

豊中市

本町遺跡

豊中市本町1丁目マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年2月

公益財団法人 大阪府文化財センター

豊中市

本町遺跡

豊中市本町1丁目マンション建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人 大阪府文化財センター

序 文

大阪府の北部に位置する豊中市は、明治 43（1910）年 3 月に梅田一宝塚間に箕面有馬電気軌道が開通したことにより、その後の沿線開発に伴って、近代以降は商都大阪のベッドタウンとして急激な変貌を遂げていきました。

こうした背景には、近代以前におきましても、市域西・南側を流れる猪名川や神崎川を利用した水運の利便性、市域北部を東西に通る旧山陽道（西国街道）や市域を南北に貫く能勢街道といった主要幹線道の存在から、古来より交通の要衝として栄えてきた地理的・歴史的環境があります。その姿は現在までも引き継がれ、大阪国際空港や中国自動車道、阪神高速大阪池田線、阪急電鉄宝塚線等の主要交通網が整備されて、政令による指定を受けた中核市として大阪府下のみならず、阪神間でも重要な位置を占めています。

さて、今回報告いたします本町遺跡は、我が国の古代窯業を考える上で看過できない桜井谷窯跡群と関連が深い遺跡として古くから耳目を集めました。

今回の調査地は、遺跡南東部の阪急宝塚線豊中駅前にぎやかな商業地の一角に位置しています。調査地周辺では駅前の開発に伴う調査が重ねられています。これまでの調査では、古墳時代後期から古代に盛期を迎えた集落の存在が確認され、桜井谷窯跡群で焼かれた須恵器の集積・選別・発送を掌った流通センター的機能を有した集落として認識されるようになりました。また、須恵器生産が終息を迎えると古代寺院である金寺山廃寺の造営・維持管理を掌った集落へと変化したとも理解されるようになりました。

今回の調査では、旧石器時代から近世期の遺構・遺物が確認され、その中でも主体となったのは、近世期の居住域や耕作地、多様な近世陶磁器に代表される多岐にわたる遺物でした。この成果は、從来描かれてきた本町遺跡の姿とは異なるもので、近世期に新免村と称された調査地周辺における文化・歴史を復元する上で貴重な新知見を得ることとなりました。遺跡周辺に広がる閑静な住宅地やにぎやかな商業地の足元には、今もなお、連錦と続いた先人たちの豊かな営みの歴史が眠っており、これからも私たちに新たな発見と驚きを与え続けてくれるものと思われます。

今回の調査成果やこれまで蓄積してきた成果が、豊中市のみならず多くの地域で活用され、文化財に対する意識をより高めてくれるものと期待してやみません。

最後になりましたが、発掘調査及び遺物整理事業の実施にあたり、多大な協力を賜りました、三井地所レジデンス株式会社大阪支店、大阪府教育委員会、豊中市教育委員会、豊中市郷土資料室、株式会社島田組をはじめ、関係各位に深く謝意を表しますとともに、今後とも当センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

平成 26 年 2 月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 田邊 征夫

例　　言

1. 本書は大阪府豊中市本町1丁目165-4に所在する本町遺跡第40次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、豊中市本町一丁目マンション建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成25(2013)年1月23日～平成26(2014)年3月31日まで、三菱地所レジデンス株式会社大阪支店の委託を受け、豊中市教育委員会の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地における調査は平成25(2013)年1月23日～4月5日に行なった。遺物整理作業は平成25(2013)年4月8日～19日・9月1日～10月7日の間に行ない、平成26(2014)年2月28日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査及び整理作業は以下の体制で実施した。

〔平成24(2012)年度〕

調査部長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、主査(中部総括) 秋山浩三、技師 新海正博

〔平成25(2013)年度〕

事務局次長兼総務企画課長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査第二課長補佐 市本芳三、技師 新海正博、専門調査員 片山彰一(写真室)、山口誠治(保存室)

4. 遺物写真撮影は中部調査事務所写真室が行ない、木製品の保存処理・樹種鑑定は同保存室が行なった。
5. 発掘調査及び整理作業の過程で以下の諸氏ならびに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
服部聰志・津川雅義・清水 篤・橋田正徳・陣内高志(豊中市教育委員会)、浅田尚子(豊中市郷土資料室)、松尾信裕(公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪城天守閣)、積山 洋(公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪歴史博物館)、小倉徹也(公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所)、豊中市教育委員会、大阪府教育委員会、三菱地所レジデンス株式会社大阪支店、株式会社島田組
6. 本書の作成は、執筆・編集を新海が担当した。
7. 本書に関わる本町遺跡についての写真・実測図などの記録類・出土遺物は豊中市教育委員会に移管し、同教育委員会において保管している。今後、広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。
2. 座標値は世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第VI系に基づき表示し、単位はmである。
3. 全体図及び遺構実測図の方位は座標北を示す。
4. 現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
6. 遺構名は、検出順に通し番号（連番）の後ろに遺構の種類（例：1土坑・52溝）をつけて表示している。
7. 本書では、遺構全体図は200分の1、遺構平・断面図は40分の1を原則として使用しているが、一部のものに関してはその限りではない。
8. 遺物実測図の縮尺は4分の1を基本として掲載するが、一部のものに関しては石器が3分の2、石製品（石臼）が6分の1の様に縮尺を変更して掲載している。写真図版の遺物は縮尺を統一していない。
9. 掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
10. 本書を作成するにあたり、以下のものを引用および参照した。

江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房株式会社

大橋康二 1989 『肥前陶磁』 考古学ライブラリー 55 ニュー・サイエンス社

大平 茂 1992 「第4章まとめ 近世丹波焼鉢の型式分類とその編年」『下相野窯址 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XVII—近世丹波焼の調査—』 兵庫県文化財調査報告第107冊 兵庫県教育委員会

奥井智子 2008 「中世大和の煮沸具について」『権原考古学研究所紀要 考古學論攷』第31冊 奈良県立権原考古学研究所

川合 剛 2002 「近畿・東海地方の有舌尖頭器」『縄文時代の石器—関西の縄文草創期・早期一』 関西縄文文化研究会

木下 亘 1983 「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷窯跡群2-17窯跡—府立少路高等学校建設に伴う調査報告一』 少路窯跡遺跡調査団

九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』

小森俊寛 2005 「京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—」 真陽社

財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター編 2006 『江戸時代のやきもの一生産と流通—』 シンポジウム資料集

白神典之 1989 「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号 東洋陶磁学会

鍬柄俊夫 1995 「第1章 大阪府南部の瓦質土器生産(1)」『日置荘遺跡』 大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター

- 積山 洋 1999 「大阪の土師質土器－主要器種を中心に－」『関西近世考古学研究』VII 関西近世考古学研究会
- 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会編 2005 『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集・資料集
- 中世土器研究会編 1998 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 難波洋三 1992 「第6節 徳川氏大阪城期の炮烙」『難波宮址の研究』第九 財団法人大阪文化財協会
- 能芝 勉他編 2004 『平安京左京北辺四坊』 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 乗岡 実 2002 「第3節 近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡 一表町一丁目地区市街地開発ビル建設に伴う発掘調査－』 岡山市教育委員会
- 長谷川眞 2006 「近世丹波焼の諸相」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』シンポジウム資料集 財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
- 光石鳴巳 2008 「近畿地方の有茎尖頭器の基礎的研究」『旧石器考古学』70 旧石器文化談話会
- 森田克行 1990 「7 摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社
- 山崎信二 2008 「第17章 近世大坂の瓦」『近世瓦の研究』 同成社

目 次

序 文
例 言
凡 例
目 次

| | |
|---------------------|----|
| 第1章 調査に至る経過と方法..... | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯と経過..... | 1 |
| 第2節 調査・整理の方法..... | 1 |
| 第2章 遺跡の位置と環境..... | 5 |
| 第1節 地理的・歴史的環境..... | 5 |
| 第2節 本町遺跡の既往の調査..... | 7 |
| 第3章 調査成果..... | 11 |
| 第1節 基本層序と遺構面..... | 11 |
| 第2節 1区の調査..... | 18 |
| (1) 第1面の遺構と遺物 | 18 |
| 第3節 2区の調査..... | 26 |
| (1) 第1面の遺構と遺物 | 26 |
| (2) 第2面の遺構と遺物 | 64 |
| 第4節 3区の調査..... | 70 |
| (1) 第1面の遺構と遺物 | 71 |
| (2) 第2面の遺構と遺物 | 74 |
| 第4章 総括..... | 81 |

挿 図 目 次

| | | | |
|------------------------------|----|-------------------------------|----|
| 図 1 調査位置と費中市内遺跡分布図 | 2 | 図 31 120溝 遺物出土状況 平・断面図・出土遺物 | 45 |
| 図 2 地区割図 | 4 | 図 32 149井戸・120溝 断面図 | 46 |
| 図 3 本町遺跡の調査区と既往の調査位置図 | 8 | 図 33 171溝 出土遺物 | 47 |
| 図 4 調査地採取の刻印レンガ | 9 | 図 34 153・167井戸・52溝 断面図 | 48 |
| 図 5 1区 西壁断面図 | 12 | 図 35 52溝・157土坑 断面図 | 49 |
| 図 6 1区 南壁断面図 | 13 | 図 36 52溝上層 出土遺物(1) | 50 |
| 図 7 2区 東壁断面図(1) | 14 | 図 37 52溝上層 出土遺物(2) | 51 |
| 図 8 2区 東壁断面図(2) | 15 | 図 38 52溝上層 出土遺物(3) | 52 |
| 図 9 3区 南壁断面図 | 16 | 図 39 52溝上層 出土遺物(4) | 53 |
| 図 10 3区 西壁断面図 | 17 | 図 40 52溝上層 出土遺物(5) | 56 |
| 図 11 1区 第1面平面図 | 19 | 図 41 52溝上層 出土遺物(6) | 57 |
| 図 12 小穴 平・断面図 | 20 | 図 42 52溝上層 出土遺物(7) | 60 |
| 図 13 7埋桶他 平・立・断面図 | 21 | 図 43 52溝上層 出土遺物(8) | |
| 図 14 15埋桶他 平・立・断面図 | 22 | 52溝下層 出土遺物(1) | 61 |
| 図 15 4水道他 断面図 | 23 | 図 44 52溝下層 出土遺物(2)・157土坑 出土遺物 | 63 |
| 図 16 5土坑他 断面図 | 24 | 図 45 2区 第2面 平面図 | 65 |
| 図 17 遺構 出土遺物 | 25 | 図 46 小穴・土坑 平・断面図 | 66 |
| 図 18 2区 第1面平面図 | 27 | 図 47 173土坑・小穴 平・断面図 | 67 |
| 図 19 小穴 平・断面図(1) | 28 | 図 48 173土坑 出土遺物 | 68 |
| 図 20 小穴 平・断面図(2)・132土坑 平・断面図 | 29 | 図 49 落込み 断面図 | 69 |
| 図 21 土坑 断面図 | 31 | 図 50 3区 第1面 平面図 | 71 |
| 図 22 土坑 出土遺物 | 32 | 図 51 42落込み他 断面図 | 72 |
| 図 23 116土坑 平・立・断面図・148溝 断面図 | 34 | 図 52 42落込み・43土坑 出土遺物 | 73 |
| 図 24 116・129土坑 出土遺物 | 35 | 図 53 3区 第2面 平面図 | 75 |
| 図 25 井戸 断面図(1) | 37 | 図 54 55溝・57落込み 平・断面図・67土坑 断面図 | 76 |
| 図 26 井戸 断面図(2) | 38 | 図 55 56・72流路 平・断面図 | 77 |
| 図 27 井戸 出土遺物(1) | 40 | 図 56 遺構 出土遺物 | 78 |
| 図 28 井戸 出土遺物(2) | 41 | 図 57 71輪状遺物 平・断面図 | 79 |
| 図 29 井戸 出土遺物(3) | 42 | 図 58 第1面 全体平面図 | 82 |
| 図 30 井戸 出土遺物(4) | 43 | 図 59 第2面 全体平面図 | 83 |

写 真 図 版 目 次

| | | |
|-----|------------------------|------------------------|
| 図版1 | 1948年米軍撮影航空写真 | 6. 150 井戸 断面（南から） |
| 図版2 | 1~3区 | 7. 160 井戸 断面（北から） |
| | 1. 1区西壁 断面（北から） | 8. 160 井戸 完掘状況（南から） |
| | 2. 1区南壁 断面（北から） | 図版7 2区 |
| | 3. 2区東壁 断面（西から） | 1. 52溝 完掘状況（南西から） |
| | 4. 3区北・東壁 断面（北西から） | 2. 52溝・167井戸 断面（西から） |
| | 5. 3区東壁 断面（北から） | 3. 157土坑 断面（東から） |
| 図版3 | 1区 | 4. 120溝 完掘状況（南から） |
| | 1. 第1面 全景（北から） | 5. 120溝 断面（北西から） |
| | 2. 15埋桶 断面（南から） | 図版8 2区 |
| | 3. 15埋桶 完掘状況（南から） | 1. 第2面 全景（西から） |
| | 4. 1土坑 断面（東から） | 2. 173土坑 完掘状況（西から） |
| | 5. 30小穴 断面（南から） | 3. 173土坑 断面（南から） |
| 図版4 | 2区 | 図版9 3区 |
| | 1. 第1面 全景（南から） | 1. 第1面 全景（北から） |
| | 2. 132土坑 断面（南から） | 2. 42落込み 完掘状況（南から） |
| | 3. 132土坑 完掘状況（南から） | 3. 42落込み 断面（北から） |
| | 4. 82小穴 断面（東から） | 図版10 3区 |
| | 5. 146小穴 断面（南から） | 1. 第2面 全景（北から） |
| 図版5 | 2区 | 2. 56流路 完掘状況（北西から） |
| | 1. 116・129土坑 完掘状況（北から） | 3. 56流路 断面（北西から） |
| | 2. 116土坑 南辺石列（東から） | 図版11 3区 |
| | 3. 116土坑 断面（南から） | 1. 55溝・56流路 完掘状況（南東から） |
| 図版6 | 2区 | 2. 72流路 断面（北西から） |
| | 1. 74井戸 断面（南から） | 3. 71轍状遺構 検出状況（南東から） |
| | 2. 153井戸 断面（西から） | 図版12 3区 56流路出土遺物 |
| | 3. 154井戸 断面（南から） | 図版13 1・2区 出土遺物 |
| | 4. 156井戸 断面（西から） | 図版14 1~3区 出土遺物 |
| | 5. 150井戸 検出状況（南から） | |

第1章 調査に至る経過と方法

第1節 調査に至る経緯と経過

本町遺跡は、大阪平野を南流する猪名川の支流の一つである千里川左岸に展開する低位段丘面上に位置し、阪急電鉄宝塚線豊中駅の東方一帯の豊中市本町1～4・9丁目にかけて広がる遺跡である。

本町遺跡は、古くから遺跡北方約3.2kmに広がる桜井谷窯跡群で焼かれた須恵器の集積地として耳目を集めていた。しかし、長らく発掘調査が実施されてこなかったこともあり、遺跡の実態を把握するに至るまでには時間を要していた。そのような中、昭和58（1983）年、豊中市教育委員会による共同住宅建設に伴う発掘調査が嚆矢となり、その後、約30年にわたって個人住宅や共同住宅、遊技場、老人保健施設の建設等に伴い、豊中市教育委員会によって39地点に及ぶ調査が積み重ねられてきた。こうした発掘調査により、当遺跡は古墳時代後期及び飛鳥・奈良時代を盛期とし、弥生時代中期から近世に至る複合遺跡であることが明らかになってきた。

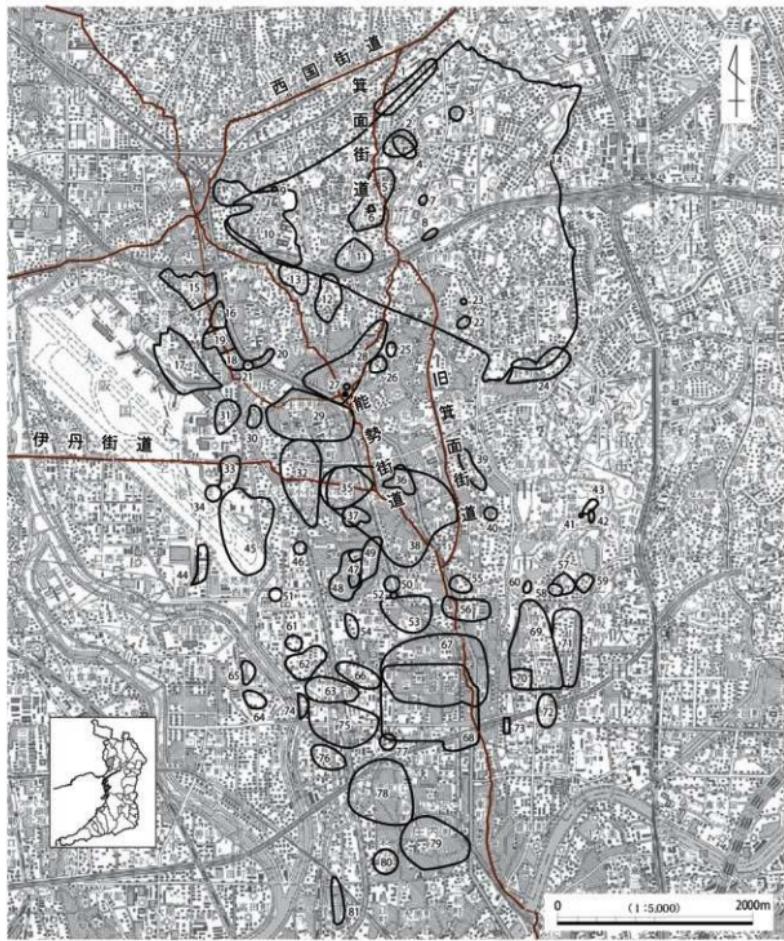
今回の調査は、豊中市本町1丁目165～4番地におけるマンション建設工事に伴う発掘調査で、本町遺跡の第40次調査にあたる。平成24（2012）年、三菱地所レジデンス株式会社大阪支店からマンションの建築申請が豊中市教育委員会に提出された。これを受けて、平成24（2012）年11月に豊中市教育委員会により現地での確認調査が実施され、柱穴や土坑等の遺構や遺物が確認された。この結果、建設に伴う遺跡の損壊が避けられないことが明らかとなり、記録保存のための発掘調査が必要であると判断された。

この後、同年12月、豊中市教育委員会から公益財団法人大阪府文化財センター（以下、「当センター」とする）に発掘調査の依頼がなされ、三菱地所レジデンス株式会社大阪支店・豊中市教育委員会・株式会社島田組・当センターの四者で協議を行ない、発掘調査事業に関わる四者協定を結んだ。平成25（2013）年1月に、三菱地所レジデンス株式会社大阪支店から発掘調査及び遺物整理事業の委託を受け、当センターで平成25（2013）年1～4月に本町遺跡第40次調査として発掘調査を、同年4・9～10月に遺物整理事業を実施する運びとなった。なお、発掘調査の実施に際しては、株式会社島田組に掘削業務と測量業務の協力を得た。

第2節 調査・整理の方法

発掘調査及び整理作業は、当センター『遺跡調査基本マニュアル』2010にのっとり実施している。

調査区割 遺物の取り上げや遺構の位置確認に関しては、当センターマニュアルに基づき平面直角座標系第VI系を基準とした区画を使用した。これにのっとり、第I～第IVまでの大小4段階の区画を設定した。第I区画は、大阪府の南西端 $X = -192,000\text{ m}$ ・ $Y = -88,000\text{ m}$ を基準とし、南北方向に6km・東西方向に8kmで区画する。表示は、南西端を基点に北へA～O、東へ0～8とする。第II区画は、第I区画を南北方向に1.5km、東西方向に2.0kmでそれぞれ4分割し、計16区画を設定する。表示は南西



| | | | | |
|---------------|----------------|-------------------|------------|-------------------|
| 1. 飯塚古墳群 | 17. 滝内山遺跡 | 34. 走井遺跡 | 50. 曾根東遺跡 | 67. 繩道遺跡 |
| 2. 野瀬春日古墳群 | 18. 弓池遺跡 | 35. 因町北遺跡 | 51. 原田中町遺跡 | 68. 繩村岡堤 |
| 3. 野瀬道路 | 19. 麻田山陣屋跡 | 36. 因町遺跡 | 52. 曾根輪輪堂跡 | 69. 小舟根遺跡 |
| 4. 野瀬春日町遺跡 | 20. 南刀船山遺跡 | 37. 因町南遺跡 | 53. 箱島北遺跡 | 70. 春日大社南郷町代今氏屋敷 |
| 5. 小路遺跡 | 21. 諸山古墳群 | 38. 板塙古墳群 | 54. 曾根南遺跡 | 71. 北木遺跡 |
| 6. 武藏國御座瀬安部氏 | 22. 上野遺跡 | 39. 下原空堀群 | 55. 城山遺跡 | 72. 小舟根南遺跡 |
| 7. 挿井谷陣屋跡 | 23. 青古古墳 | 40. 長守寺遺跡 | 56. 服部遺跡 | 73. 上野御歎野保保科氏浜陣屋跡 |
| 7. 挿井谷陣屋跡 | 24. 熊野町遺跡 | 41. 鹿塙古墳 | 57. 若竹町遺跡 | 74. 上野鶴川保連跡 |
| 8. 梶下石垣遺跡 | 25. 金山西山寺 | 42. 埼輪散ら地 | 58. 石造寺廃寺 | 75. 上野島遺跡 |
| 9. 舟糞山古墳 | 26. 新鶴山古墳群 | 43. 大坂城貢税奉行支配施設遺跡 | 59. 寺内遺跡 | 76. 上野島南遺跡 |
| 10. 徒糞山遺跡 | 27. 金山西山寺塔跡柱礎石 | 44. 原田西遺跡 | 60. 石造寺遺跡 | 77. 繩道ポンプ場遺跡 |
| 11. 内田遺跡 | 28. 本町遺跡 | 45. 熊部遺跡 | 61. 利根北遺跡 | 78. 田山遺跡 |
| 12. 梶原遺跡 | 29. 新光寺遺跡 | 46. 本部東遺跡 | 62. 利根南遺跡 | 79. 庄内遺跡 |
| 13. 北刀船山遺跡 | 30. 箕輪東遺跡 | 47. 原田城跡(北城) | 63. 吉田南遺跡 | 80. 施江遺跡 |
| 14. 梶井谷堂跡群 | 31. 箕輪遺跡 | 原田城跡(南城) | 64. 利根内遺跡 | 81. 庄木遺跡 |
| 15. 弓池(宮の前)遺跡 | 32. 山ノ上遺跡 | 48. 原田遺跡 | 65. 佐倉の山遺跡 | |
| 16. 清波東遺跡 | 33. 熊部北遺跡 | 49. 曾根遺跡 | 66. 鹿塙西遺跡 | |

● 調査位置

図1 調査位置と豊中市内遺跡分布図

国土地理院 大阪西北部・東北部(1:50,000)に加筆

端を1とし、東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北西端を16と平行式で表す。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100m単位で、南北15、東西20に区画する。表示は北東端を基点に、南へA～O、西へ1～20とする。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を10m単位で南北方向、東西方向ともに10に区画する。表示は北東端を基点に南へa～j、西へ1～10とする。なお、方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値を用いた。

調査区の呼称 調査は、掘削に伴う排土を場内に仮置きする形で行なうこととなつたため、調査地を南北で3分割して実施した。それに伴い、北側に位置する調査区を1区、中央に位置する調査区を2区、南側に位置する調査区を3区として調査区名を付与した。

整理作業においては、新たに調査区の名称を振り直すことなく調査時のものを踏襲した。本書では1区から順に記述を進めている。

遺構名 調査区に関わらず、遺構の検出順に1からの通し番号を1土坑・2溝のように遺構種別の前に付与した。

掘削方法 建物解体時の整地層、建物建設時の盛土、近世～近代期の耕作土層、近世期の整地層を重機で掘削し、それ以下を人力によって掘削を行ない、遺構面・遺構の確認及び遺物の取り上げに努めた。

遺構面と層 機械掘削で除去した近～現代の整地層や盛土を第1層、近世～近代耕作土を第2層とし、上から順に第1層・第2層・・・とした。検出した遺構面は1区においては基盤層（地山）上面のみであり、第1面と呼称した。2・3区では黒褐～灰褐色シルト（土壤層上面）と基盤層（地山）上面の計2面を確認し、それぞれ第1面、第2面と呼称した。

遺構図 遺構面に関しては、株式会社島田組事業本部測量グループによって、トータルステーションを用いた測量が実施され、1/20・1/100の平面図を作成した。さらに、石組施設に関しては簡易オルソーを用いた写真測量を実施し、石組の平面図を作成した。また、個別遺構の平面図・断面図・立面図については必要に応じて1/10・1/20で適宜作成した。土層観察用の断面に関しては1/20の断面図を作成した。

写真撮影 現場での写真撮影は、6×7カメラ、35mmカメラを使用し、それぞれ黑白フィルム、リバーサルフィルムを用いて行なった。また、写真台帳作成用にデジタルカメラを使用して撮影を行なった。なお、遺構面の全景写真撮影に関しては高所作業車を用いて行なった。

整理作業 主要遺構については現地で作成した実測図を編集し、遺構挿図を作成した。挿図の净書はadobe社製IllustratorCS2を用いてデジタルトレースを行なった。出土遺物は、洗浄・注記・接合を行なつた後、実測作業を実施した。近世陶磁器に関しては文様が描かれた資料を中心に個別のデジタル写真を撮影し、実測図に嵌め込んだ。また、一部の遺物に関しては拓本を採った。実測図は個別にデジタルトレースを行なった後、遺構毎に編集し、遺物挿図を作成した。

現地で撮影した遺構面及び個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別し、現像・焼付け作業を行なった。また、出土遺物については、報告書に掲載するものを選別し実測作業と併行して写真撮影を行ない、現像・焼付け作業に入った。以上の作業と併行して文章を作成し、編集作業を実施した。また、編集作業と併行して出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、収納作業を行なった。

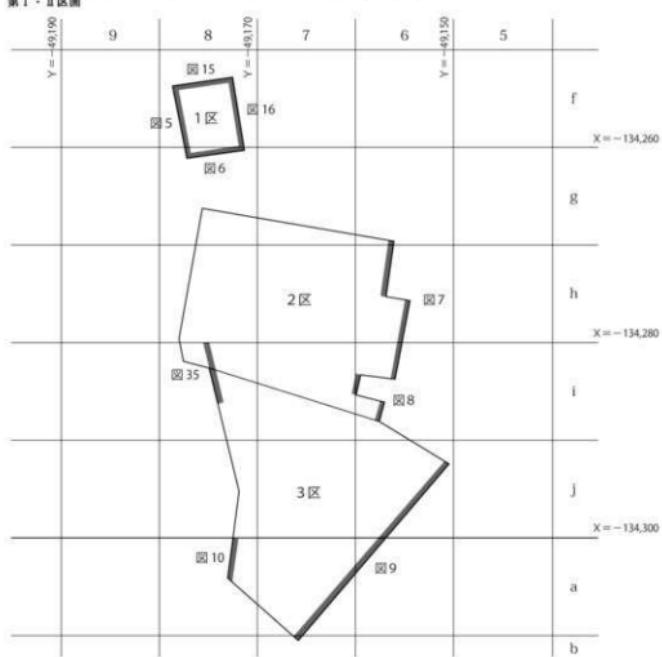
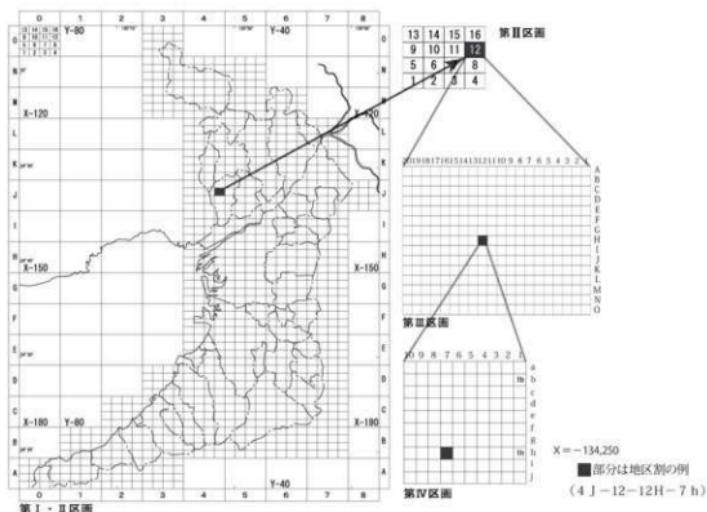


図2 地区割図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境

本町遺跡は大阪府の北部、豊中市本町1～4・9丁目にかけて所在する遺跡で、東西約1km、南北約0.4km、総面積約225,000m²を擁する集落遺跡である。

遺跡の所在する豊中市は猪名川の左岸に位置し、市内は南北で丘陵部と沖積平野に区分することができる。当遺跡が所在する市域北部は、大阪層群の隆起によって形成された千里丘陵や待兼山丘陵と千里川を境に南側に展開する通称豊中台地とに二分される。

丘陵は待兼山を境として、東側は大阪層群上部と中・高位段丘構成層からなる尾根地形が広がり、西側は低位段丘構成層からなる台地上の平坦な地形が展開する。丘陵周辺には侵食作用により形成された多くの開析谷が認められる。現在、埋没している開析谷もみられるが、一部には溜池としてその姿を留めている。さらに西側には、明瞭な段丘崖が発達しており、千里川や箕面川、猪名川等の沖積作用によって形成された沖積平野と画されている。

本町遺跡が所在する通称豊中台地は、標高15～30mの比較的傾斜の緩やかな低丘陵部をなしている。当遺跡はこの丘陵地形の西北部に位置し、標高25m前後の良好な生活環境を占地している。

地勢的に安定している低・中位段丘上には、時代を問わず多くの重要な遺跡が営まれ、古代以降、当遺跡周辺の低位段丘上には、遺跡北方に位置する旧山陽道（西国街道）や西方に位置する能勢街道といった主要幹線道が縦横に延び、市域西側の猪名川や南部の神崎川を利用した水運と併せて重要な交通の要衝であった。現在でも遺跡周辺には、北側に中国自動車道や府道大阪中央環状線が、西側に阪急電鉄宝塚線や国道176号、大阪国際空港、阪神高速道路大阪池田線が建設されており、古来の交通の要衝としての地理的環境を継承している。以下に、周辺の主要遺跡を時代順に概観しておく。

（1）旧石器時代

待兼山西側に広がる低位段丘上に位置する螢池北遺跡や螢池西遺跡、螢池遺跡、箕輪遺跡、柴原遺跡、豊中台地上の大塚古墳でサヌカイト製のナイフ形石器や盤状剥片石核、剥片の出土が知られるが、生活痕跡は確認されていない。市域の中でも螢池周辺の低位段丘上では、旧石器時代の資料が色濃くみられる場所であり、今後この周辺において石器製作址や疊群といった生活痕跡が発見される可能性が高いものと推察される。

（2）縄文時代

市域北部の千里川流域の段丘上に位置する内田遺跡、野畑春日町遺跡、野畑遺跡、柴原遺跡、螢池北遺跡、新免遺跡等や、市域南部の原田西遺跡や穂積遺跡等の沖積地に立地するものがある。前者の遺跡群は、新免遺跡や螢池北遺跡で早期の押型文土器が出土している以外は、中期から晩期の遺跡である。なお、野畑春日町遺跡では草創期の有舌尖頭器が出土している。後者の遺跡は、沖積地に散在するようになり、土器が単独に出土するような状況下にあって実態は不明と言わざるを得ない。なお、晩期になると小曾根遺跡や山ノ上遺跡等のように低地や台地縁辺部にも展開するようになり、弥生時代前期土器と晩期の遺物が共伴する例が知られる。

総体的に縄文時代の遺構・遺物の発見例は他の時代に比して少なく、今後の調査に期待したい部分である。

(3) 弥生時代

弥生時代前期の集落は、小曾根遺跡や勝部遺跡が沖積平野に、山ノ上遺跡が台地縁辺部に、野畠春日町遺跡が千里川上流域の中位段丘上に形成されている。中期になると蟻池北遺跡や新免遺跡、本町遺跡、待兼山遺跡等に代表されるように市域北部の段丘上、或いは丘陵上に新たな集落が形成されるようになる。蟻池北遺跡や新免遺跡は、小地域の中核的な集落として発展するが、後期になると次第に衰退していく。待兼山遺跡は実態がまだ明らかではないものの、断面V字状を呈する溝が検出されていることから、高地性集落であったと考えられる。

一方、後期になると新たに市域南部の猪名川下流域に利倉遺跡、利倉西遺跡、上津島遺跡、上津島河床遺跡等の多くの集落が形成され、遺跡群としてまとまりを持つようになる。終末（庄内式）期になると、市域南端にまで遺跡が広がり、島田遺跡や庄内遺跡、穂積遺跡が形成される。中でも、穂積遺跡は他地域からの多量の搬入土器がみられ、銅鏡の未製品が出土する等、流通や生産において重要な位置を占める拠点的集落として注目される。

(4) 古墳時代

古墳時代前期の集落は、弥生時代後期後半から継続するものが多く、穂積遺跡、利倉西遺跡、島田遺跡等の市域南部の台地縁辺部や沖積平野に占地している。猪名川下流域に位置する上津島遺跡や島田遺跡は、古墳時代を通じて中核的な遺跡群を形成している。前期古墳は西揖平野を望む市域北部の独立丘陵や台地縁辺部に、待兼山古墳、御神山古墳、大石塚古墳、小石塚古墳等が築かれている。

中期の集落は、須恵器出現直前に蟻池東遺跡で大型掘立柱建物群（倉庫群）がみられるが、短期間のうちに消滅し、初期須恵器の段階で竈を有する集落へと転換している。

また、市域北部の千里川上流域に位置する桜井谷窯跡群で、須恵器が焼かれ始める中期後半から後期にかけては、千里川流域に主要な集落が形成されるようになる。千里川右岸に位置する内田遺跡は、須恵器生産者集団の中心的集落と目されており、その対岸に位置する羽鷹下池南遺跡が須恵器生産工房である可能性が指摘されている。また、両遺跡の下流に位置する新免遺跡、本町遺跡が須恵器の選別や発送を掌った流通センター的機能を有した集落と想定されている。

中期古墳は大石塚古墳、小石塚古墳に継続する桜塚古墳群に集約されていく。中期後半から後期にかけては小地域毎に古墳群が形成される。代表的なものは蟻池北古墳群や待兼山古墳群、新免古墳群、新免宮山古墳群等である。中でも、新免宮山古墳群では陶棺が確認されていることから、須恵器生産の統率者集団の奥津城として捉えられている。

(5) 古代・中世

古墳時代の終焉を受けて成立してくるのが、本町遺跡の北東に位置する金寺山廐寺である。金寺山廐寺は盛期には千坊を超える間連施設を有した寺院と言われ、山田寺系の瓦を出土していることから物部氏の氏寺である可能性が指摘されている。この寺院の造営、管理を司ったのが須恵器生産衰退後の本町遺跡であったと想定されている。

奈良・平安時代の集落は、古墳時代からの立地を踏襲する傾向がみられ、猪名川に面した低位段丘上や縁辺部、沖積平野において多数検出されている。代表的な遺跡には蟻池北遺跡、本町遺跡、新免遺跡、曾根遺跡、上津島南遺跡、島田遺跡等がある。平安時代～中世の集落は蟻池北遺跡、本町遺跡、山ノ上

遺跡、豊島北遺跡、原田西遺跡、小曾根遺跡、穂積遺跡、利倉遺跡、上津島遺跡、島田遺跡等で検出されており、沖積地に展開する集落が増加する傾向にある。

猪名川流域の西摂平野には、大阪国際空港等により消滅しつつも、比較的条里制地割を色濃く残している。これらは、旧豊嶋郡の条里である。この条里制地割は低位段丘面以上には存在しておらず、沖積地においても千里川沿いや旧流路上では確認できない。

(6) 中世以降

中・近世に入り、人や物資の動きが活発になると、西国街道や能勢街道といった主要幹線道が整備され、また猪名川や神崎川の水運が活用でき、近畿北部や西摂・播磨、京・山城へと通じる交通の要衝としての特性がより注目され、戦国時代には原田城や刀根山城、伊丹城、池田城等が築かれている。

また、江戸時代には要衝の地には然るべき領主を置かず、分断統治を実施した徳川幕府により、北摂地域は幕府直轄領や旗本領、小藩等が錯綜する地域となった。

第2節 本町遺跡の既往の調査

本町遺跡は、千里川上流域に展開する桜井谷窯跡群と千里川流域で営まれた内田遺跡、羽鷹下池南遺跡、新免遺跡、新免宮山古墳群と併せて須恵器の生産と流通に関連する遺跡として広く耳目を集めている。しかしながら、長らく発掘調査が実施されなかったこともあり、実態は明らかにならなかった。

昭和58（1983）年、遺跡南部に位置する阪急電鉄豊中駅周辺の開発が活発化し、共同住宅や遊技場建設が計画され、豊中市教育委員会によって第1・2次調査が実施された。これが当遺跡における調査の嚆矢となった。

第1次調査においては2面の遺構面が確認され、下面では古墳時代後期前葉～中葉の掘立柱建物や土坑、溝等が、上面では7世紀以降の遺構が検出された。第2次調査では、古墳時代後期前葉～中葉の溝や土坑が検出され、遺構内から焼け歪んだ須恵器が多量に出土して注目を集めることになった。こうした事例はその後の調査においても普遍的にみられるようになり、先述したように桜井谷窯跡群との関係から、須恵器の集積・選別・発送を掌った集落としての機能が想定されるようになった。

その後も個人住宅や店舗付き共同住宅等の建設が遺跡全域で企図されるようになり、約30年間で39次に及ぶ調査が豊中市教育委員会によって実施され、資料が蓄積されている。

以下に、調査成果を簡単に概観しておく。

本町遺跡の主体をなす古墳時代後期については、第1・12・21・24・30・32・36次調査で掘立柱建物、第21・23・25・26・28・34次調査で竪穴建物が検出されている。なかでも、第23・26次調査で検出した竪穴建物は竪付設となっており注目される。また、第21次調査の成果から6世紀前半で竪穴建物から掘立柱建物に転換することが明らかとなった。古代以降に関しては、第6次調査で8世紀後半の掘立柱建物3棟や12世紀の掘立柱建物、第20次調査で11～12世紀の掘立柱建物、第21次調査で8世紀代の掘立柱建物、第27次調査で8世紀後半の竪穴建物が検出されている。第27次調査で検出した竪穴建物は、7世紀以降は掘立柱建物に移行する畿内の集落の在り方とは様相を異にするため、豊中周辺での竪穴建物の存続期間を検討する上で重要な資料となっている。また、第6次調査等の複数の調査地点では、遺跡北東側に位置する金寺山廃寺に関連すると推定される瓦類が出土している。

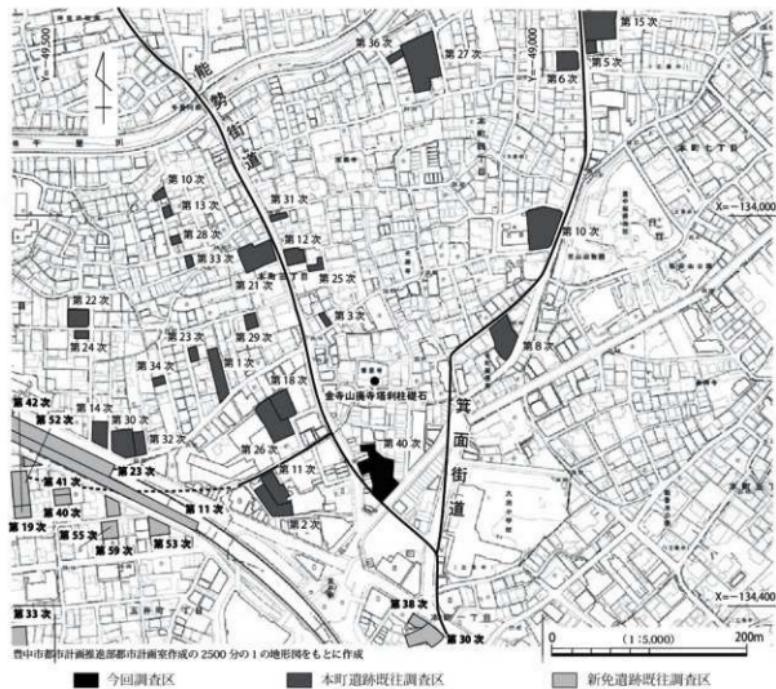


図3 本町遺跡の調査区と既往の調査位置図

須恵器生産が下火になった7世紀前半頃からは、金寺山廃寺の造営・維持管理を担った集落へと変貌したと想定されている。

こうした調査成果から、遺跡範囲内の西側で遺構密度が高く、東に向かうに従い希薄になる傾向が明らかとなり、遺跡南西部に位置する第21次調査地点に中核を有していたと推定されている。

当遺跡の初現とも言える弥生時代中期には、市域北部の段丘上、或いは丘陵上に新たな集落が形成されるようになり、当遺跡でも単発的に遺構・遺物が認められるようになる。その後、後期後半から終末期にかけては、第4・5・7・15次調査が実施された遺跡北東部に遺構・遺物が集中してみられるようになるが、後世の削平が著しく総体的に遺構の遺存状況は芳しくない。なお、第5・7次調査では住居を、第15次調査では群集土坑を検出している。近年、北摂地域では吹田操車場遺跡で古墳時代後期から古代にかけての群集土坑が多数検出されており、粘土採掘坑として推定されている。第15次調査で確認されたものは性格が明らかにされていないが、弥生時代の群集土坑として注目すべきものと言える。

参考・引用文献

浅岡俊夫 1993 『豊中市 新免古墳群第3号墳—新免遺跡第38次調査』 六甲山麓遺跡調査会

- 橋田正徳編 1995 「第II章 本町遺跡第18次調査の概要」「第III章 本町遺跡第19次調査の概要」『豊中市文化財調査報告第34集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成6年度(1994年度)』 豊中市教育委員会
- 橋田正徳編 1997 「第VI章 本町遺跡第22次調査」「第VII章 本町遺跡第23次調査」「第VIII章 本町遺跡第24次調査」「第IX章 本町遺跡第25次調査」『豊中市文化財調査報告第40集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要—阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査—平成7年度(1995年度)』 豊中市教育委員会
- 橋田正徳編 2001 「第IV章 本町遺跡第26次調査」『豊中市文化財調査報告第49集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成12年度(2000年度)』 豊中市教育委員会
- 橋田正徳編 2006 「第VII章 本町遺跡第32次調査」『豊中市文化財調査報告第58集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成17年度(2005年度)』 豊中市教育委員会
- 清水 篤編 2004 「第VI章 本町遺跡第28次調査」『豊中市文化財調査報告第55集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成15年度(2003年度)』 豊中市教育委員会
- 陣内高志編 2003 「第III章 本町遺跡第27次調査」『豊中市文化財調査報告第53集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成14年度(2002年度)』 豊中市教育委員会
- 陣内高志編 2007 「第III章 本町遺跡第33次調査」『豊中市文化財調査報告第59集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成18年度(2006年度)』 豊中市教育委員会
- 陣内高志編 2008 「第V章 本町遺跡第34次調査」『豊中市文化財調査報告第60集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成19年度(2007年度)』 豊中市教育委員会
- 陣内高志編 2010 「第IV章 本町遺跡第36次調査」『豊中市文化財調査報告第62集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成21年度(2009年度)』 豊中市教育委員会
- 豊中市教育委員会 1989 「第III章 本町遺跡第12次調査の概要」『豊中市文化財調査報告第27集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1988年度』
- 豊中市史編さん委員会 2005 『新修 豊中市史』第4巻 考古
- 豊中市史編さん委員会 2009 『新修 豊中市史』第1巻 通史1
- 服部聰志編 1991 「第II章 本町遺跡第13次調査の概要」『豊中市文化財調査報告第29集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1990年度』 豊中市教育委員会
- 柳本照男編 1982 『豊中市文化財調査報告第9集 桜井谷窯跡群2-17窯跡—府立少路高等学校建設工事に伴う調査報告—』 少路窯跡遺跡調査団
- 柳本照男ほか編 2004 『豊中市文化財調査報告第54集 金寺山廃寺—第1・2・3次発掘調査報告書—』 豊中市教育委員会

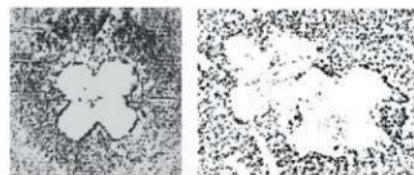


図4 調査地採取の刻印レンガ (S=1:1)

豊中市には今もなお、大正2(1913)年に建設された豊中グラウンド(豊中球場)や昭和13(1938)年に建設された大阪府立豊中女子高等学校(現:大阪府立桜塚高校)の煉瓦造りの建物跡や岡町住宅経営地の煉瓦造り側溝等が残されており、煉瓦に対して注目が

高い地域である。図4は調査終了後、埋め戻しの際に採取した刻印レンガである。調査地には多くの煉瓦がみられたが、刻印が施されたものは少ない。近代以降に煉瓦を用いた建物が建てられていたのである。採取した煉瓦は、 $225 \times 105 \times 55 \sim 60\text{mm}$ を測る。煉瓦の規格は大正14（1925）年に $210 \times 100 \times 60\text{mm}$ に統一されることから、採取した煉瓦はそれ以前に製造されたものと推定される。刻印は「×」を用いた岸和田煉瓦のものである。刻印は煉瓦の最も広い面に押されている。

参考文献

豊中市教育委員会 2009 「岡町住宅経営地の遺構—煉瓦溝からたどる近代郊外住宅地—」『文化財ニュース豊中』NO.35

第3章 調査成果

第1節 基本層序と遺構面

今次の調査はマンション建設に伴うもので、調査地は北側に位置するタワーパーキング部分と南側に位置するマンション本体部分に分かれる。掘削土を場内処理する関係で、マンション本体部分は2分割して調査を行わなくてはならず、3つの調査区を設定することになった。北側から1～3区と称する。

調査地は近年まで宅地として使用されていたため、ほぼ平坦に造成されていたが、調査の結果、以前は北から南へと緩やかに傾斜する地形であることが明らかとなった。

いずれの調査区も現代の建物撤去に伴う搅乱や近世・近代の整地層が広範に及んでおり、共通する堆積層を把握することができなかったため、第40次地点としての基本層序を提示し難い。従って、ここでは各調査区において比較的遺存状態が良かった部分の層序を代表させて記載する。

基本層序（図2・5～10・図版2）

1区

第1層は現代の建物撤去に伴い埋め戻した整地層・盛土層である。整地層や盛土は黄灰～黄色系のシルトや粘土（近傍の低位段丘構成層を削ったものか）を基調とした土砂を客土にしており、非常に固く締まっている。埋め戻し土には建物解体に伴って排出されたレンガや瓦、礫等を含んでいる。層厚は約0.5～0.8mである。

第2層は黄色系シルト質粘土と褐色系シルトを基調とした整地層である。出土遺物に恵まれなかつたため、時期は不詳であるが、近代段階の可能性が高い。褐色系シルトをベースに敷き、上部を黄色系シルト質粘土で被覆する。断面観察ではあるが、黄色系シルト質粘土上面でカマド状の焼土面がみられることから、近代建物内の土間を構築する整地単位である蓋然性が高い。層厚は約0.2mである。

第3層は黄色系シルト混細～中砂である。炭化物や直径1cm前後的小礫を含む。斑駁が顕著にみられ、比較的均質に搅拌を受けている。近世～近代の耕作土の可能性が高い。層厚は約0.1～0.2mである。

第4層は黄色系シルト～シルト質粘土と褐灰～褐色系シルト混細砂を基調とした近世段階の整地層である。褐灰～褐色系シルト混細砂をベースに敷き、上部を黄色系シルト～シルト質粘土で被覆する。断面観察ではあるが、黄色系シルト～シルト質粘土上面でカマド状の焼土面がみられることから、近世建物内の土間を構築する整地単位である蓋然性が高い。層厚は約0.15～0.2mである。

第4層を掘削して検出した基盤層（地山）上面を第1面として調査を行なった。地山面では近世段階の柱穴や礎石、埋桶、土坑等を多数検出した。

基盤層（地山）は明黄褐色系シルト～粘土である。乾痕が顕著にみられる。

2区

第1層は現代の建物撤去に伴い埋め戻した整地層・盛土層である。整地層や盛土は黄灰～黄色系のシルトや粘土（近傍の低位段丘構成層を削ったものか）を基調とした土砂を客土にしており、非常に固く

西壁断面

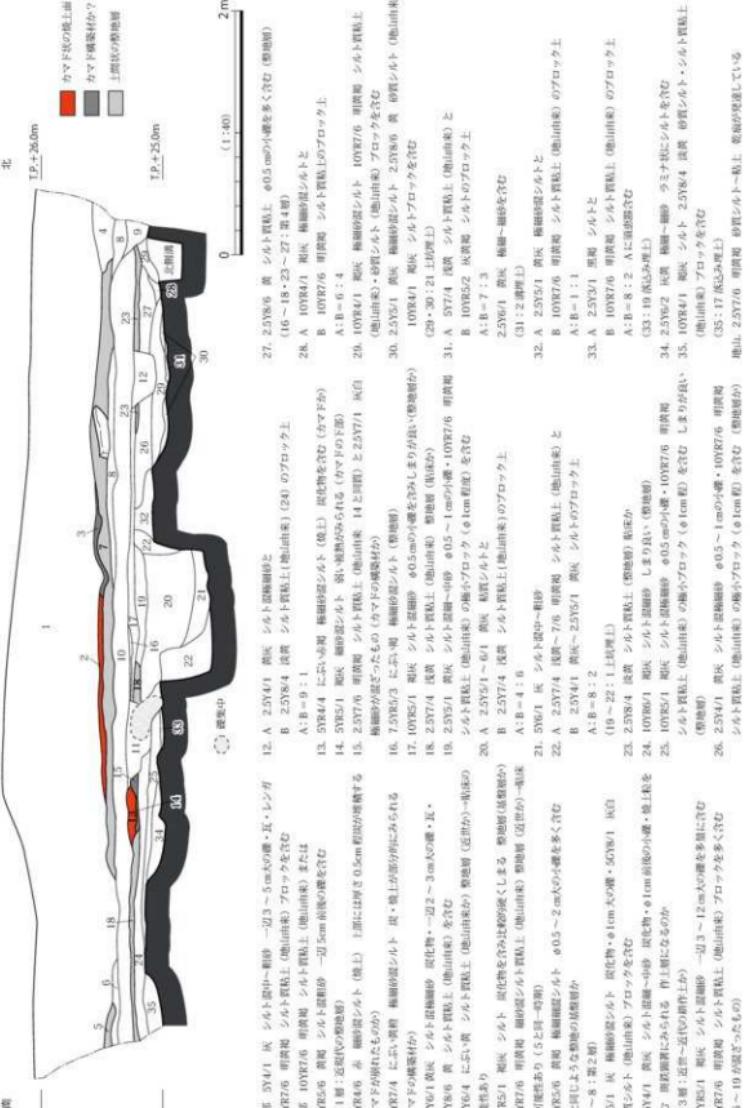


図 5 西壁断面図

南壁断面

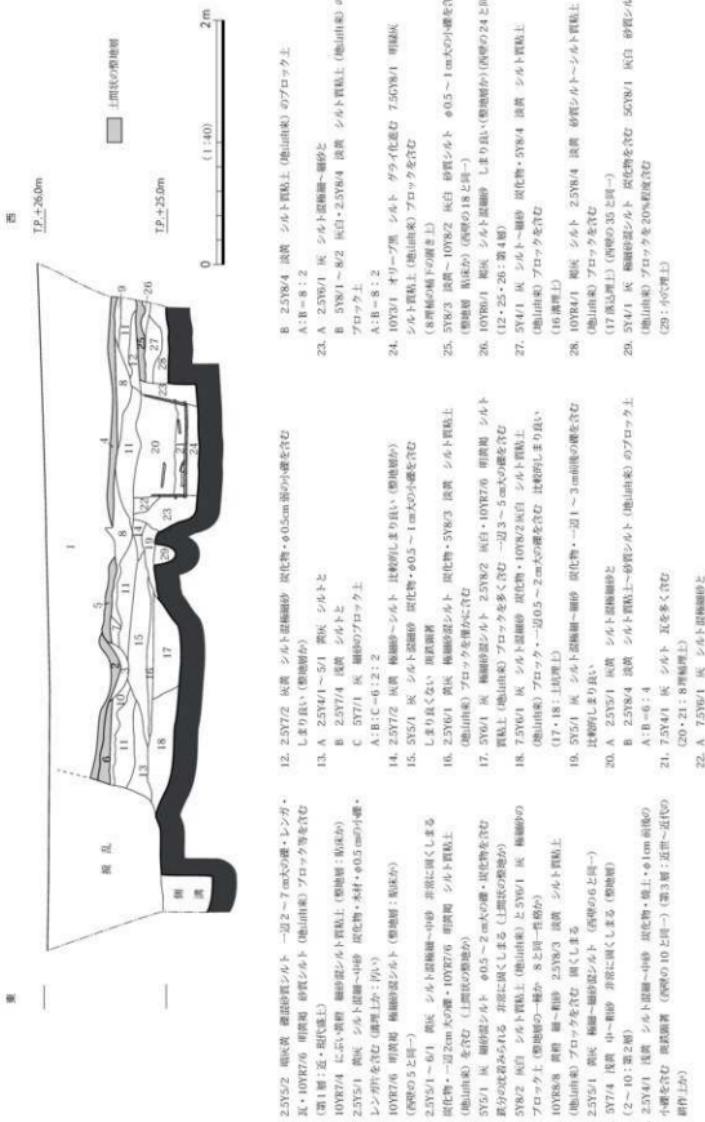


図 6 1 図 南壁断面図

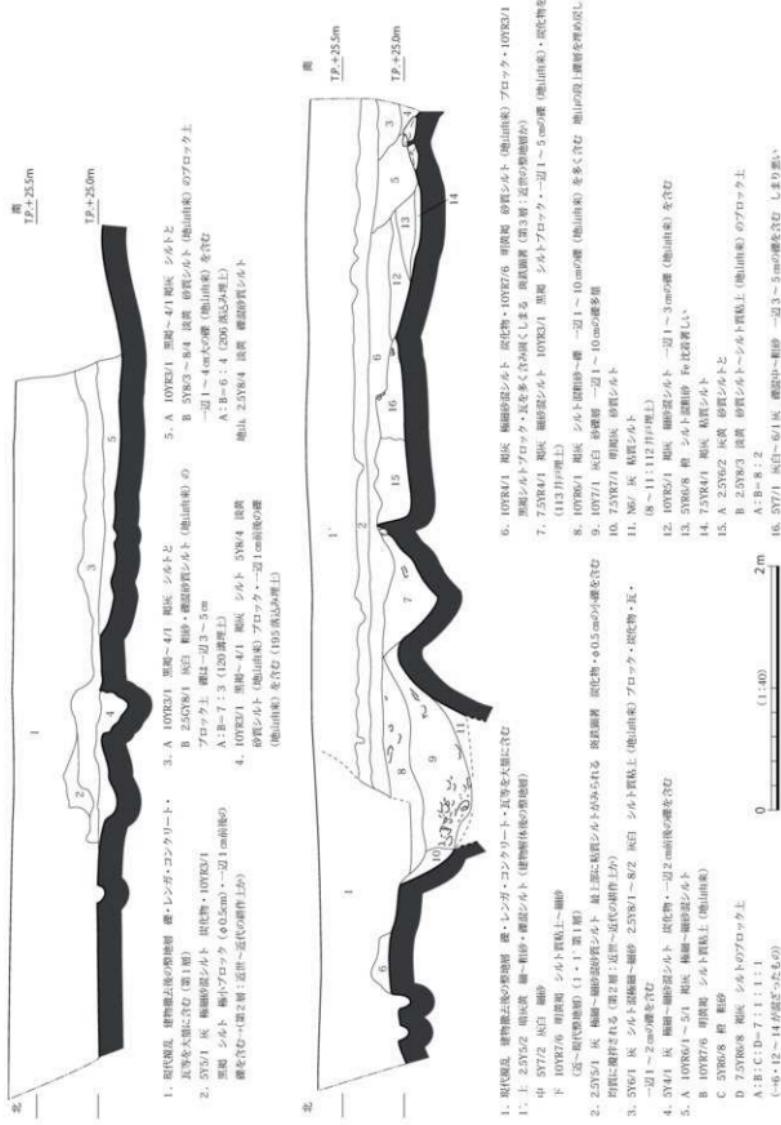


図7 2区 東壁断面図(1)

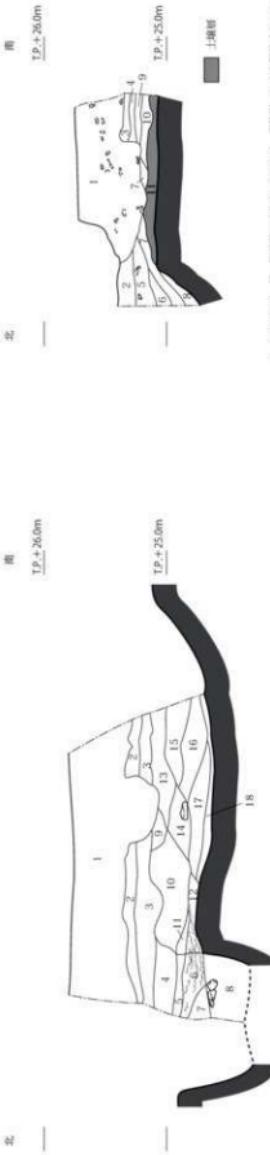


図8 2区 東壁断面図 (2)

1. 上・2.5/5/2 帯灰質 砂質シルト 地下水位(地表付近) 中・5/7/2 16日 地下水
2. 2.5/5/1 地下水 地下水-帶灰質シルト 地上・(3) 16日
3. 2.5/5/2 帶灰質 地下水-古代の耕作土を含む
4. A 2.5/5/1 地下水 地下水-帶灰質シルト 地上
5. A-B : 4 5/7/5/1 地下水 地下水-帶灰質シルト (地山付近) の砂ブロック
6. 2.5/5/1 地下水 シルト 地下水-帶灰質シルト 地上物・
7. 10/8/1 地下水 地下水-4/1 地下水 地下水-帶灰質シルト
8. 5/3/4/1 地下水 地下水-帶灰質シルト 7.5/6/1 地下水 地下水-帶灰質シルト
9. 10/8/1 地下水 地下水-帯灰質シルト 地上物を含む
10. A 5/6/1 地下水 地下水-帯灰質シルトと
B 10/8/6 明礬鉄 シルト 地上・2.5/8/4 地下 地下水-帯灰質シルト
(地山付近) の砂ブロック上
A-B : 9 : 1
11. 2.5/7/1 地下水 地下水-帯灰質
12. 2.5/4/1 地下水 地下水-帯灰質
13. 10/8/2 地下水 地下水-帯灰質 地下物・近世の耕作土
14. 2.5/5/1 地下水 地下水-帯灰質シルト 地上物・
15. 2.5/4/1 地下水 地下水-帯灰質シルト 地上物を含む
16. 2.5/5/1 地下水 地下水-シルト 地上物・
2.5/8/1 地下水 シルト (地山付近) の砂ブロック
17. 2.5/5/1 地下水 地下水-帯灰質シルト 地上物・
18. 5/3/4/1 地下水 地下水-帯灰質シルト
(地山付近) の砂ブロック
A-B : 10 : 5/2 地上物上層 17 ~ 18 15cm 深度上層
A-B : 10 : 5/2 地上物上層 17 ~ 18 15cm 深度上層
1. 7.5/8/6 直 地下水-帯灰質シルトと 10/8/7/6 明礬鉄 シルト 地上物と N71
地山付近の砂シルトが混ざったもの・
10m程度の厚さ
2. 5/4/1 地下水-シルト 地上物・
3. 10/5/4 16日 地下水-シルト 地上物・
(2~3) 第2層
4. 2.5/7/6 地下水 地下水-シルト
5. 2.5/7/6 地下水 地下水-シルト 地上物・
6. 5/4/1 地下水 地下水-シルト 地上物・
7. 2.5/5/1 地下水 地下水-シルト 地上物・
8. 2.5/7/1 地下水 地下水-シルト
(5~8) 第3層
9. 5/6/1 地下水 地下水-シルト 地上物を含む
10. 10/8/1 地下水 地下水-シルト 地上物を含む
11. 10/8/1 地下水 地下水-シルト
地山・7.5/8/7/1 明礬鉄 シルト
A-B : 10 : 5/2 地上物上層 17 ~ 18 15cm 深度上層
A-B : 10 : 5/2 地上物上層 17 ~ 18 15cm 深度上層

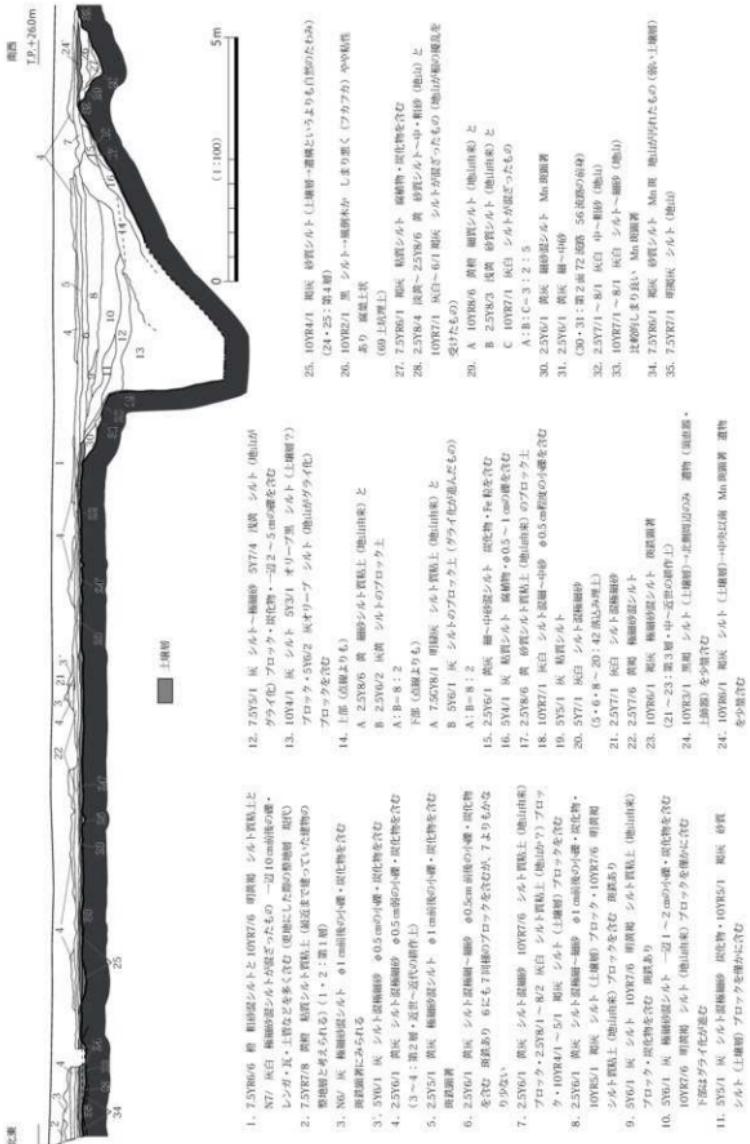


図9 3区 南壁断面図

締まっている。埋め戻し土には建物解体に伴って排出されたレンガや瓦、礫等を多量に含んでいる。層厚は約0.4～0.7mである。

第2層は灰色極細～細砂混砂質シルトである。炭化物や直径0.5cm前後の小礫を含む。斑鉄が顕著にみられ、比較的均質に攪拌を受けている。近世～近代の耕作土の可能性が高い。1区の第3層に近似するものである。層厚は約0.1mである。

第3層は褐色極細砂混シルトである。明黄褐色砂質シルト(地山由来)や黒褐色シルト(土壤層由来)ブロック、瓦を多く含み、固く締まっている。近世段階の整地層と思われる。層厚は約0.1～0.2mである。当層は52溝よりも北側で確認できる。

第4層は褐色～灰色系砂混シルト～細・中砂である。層厚は約0.25mである。当層は52溝よりも南側でみられるもので、3区の第3層と同質である。中～近世の耕作土と思われる。

第5層は黒褐色～褐色シルト。基盤層(地山)である浅黄色砂質シルトを母材とした土壤層である。須恵器や土師器を少量包含している。当層は2区中央部以南に堆積するもので、3区の第4層と同質である。層厚は約0.1mである。

2区では第4層を除去し終えて検出した基盤層(地山)〔2区北側部分〕または第5層上面を第1面として、第5層を除去し終えて検出した基盤層(地山)上面〔2区南側部分〕及び北側部分で黒～黒褐色シルトが堆積した落込みを第2面として調査を行なった。第1面では近世段階の柱穴や礎石、井戸、埋桶、土坑、溝等を、第2面では中世段階の土坑、小穴、時期不詳の落込みを検出した。

基盤層(地山)は黄色系砂質シルト～礎混砂質シルト[52溝以北]・明褐色シルト[52溝以南]である。

3区

第1層は現代の建物撤去に伴い埋め戻した整地層・盛土層である。整地層や盛土は黄灰～黄色系のシ

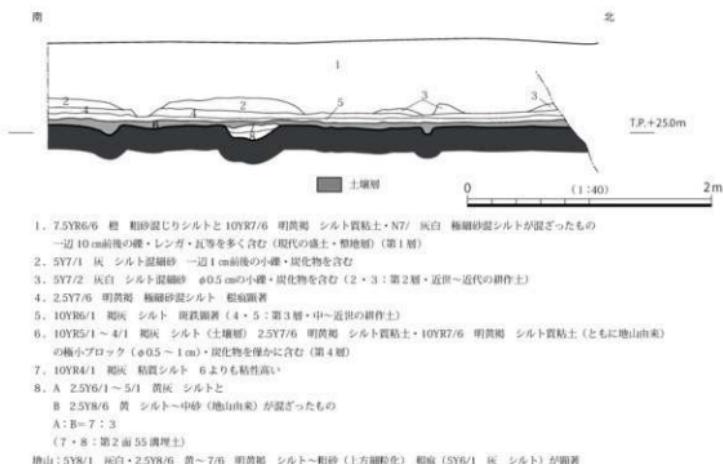


図 10 3区 西壁断面図

ルトや粘土（近傍の低位段丘構成層を削ったものか）を基調とした土砂を客土にしており、非常に固く締まっている。埋め戻し土には建物解体に伴って排出されたレンガや瓦、礫等を多量に含んでいる。層厚は約0.3～0.45mである。

第2層は黄灰～灰色シルト混極細砂である。炭化物や直径0.5cm前後的小礫を含む。斑鉄が顯著にみられ、比較的均質に攪拌を受けている。近世～近代の耕作土の可能性が高い。1区の第3層に近似するものである。層厚は約0.1～0.2mである。

第3層は灰白色シルト混極細砂・褐色系極細砂混シルトである。層厚は約0.1mである。2区の第4層と同質である。中～近世の耕作土と思われる。

第4層は黒褐色～褐色シルト。基盤層（地山）である浅黄色砂質シルトを母材とした土壤層である。須恵器や土師器を少量包含する。2区の第5層と同質である。層厚は約0.1mである。

3区では第3層を除去し終えて検出した第4層上面を第1面として、第4層を除去し終えて検出した基盤層（地山）上面を第2面として調査を行なった。第1面では耕作痕や溜池状遺構、第2面では古代末の溝や古墳時代の自然流路、時期不詳の轍状の遺構等を検出した。

基盤層（地山）は灰白色～黄色系シルト～粗砂である。

第2節 1区の調査

1区は調査地の北側、 $X = -134,253 \sim 261$ ・ $Y = -49,171 \sim 179$ の範囲内に位置する、南北約7.5m・東西約6mを測る平面長方形を呈する調査区である。近代・近世の整地層や耕作土を掘削して検出した基盤層（地山）上面を第1面（最終面）として調査を行なった。遺構面は東側がやや高くなるものの、ほぼ平坦でT.P.+25.0m前後となる。

第1面では調査区全面に土坑、埋桶、礎石、小穴、水溜状施設、溝等の遺構が広がる。これらの遺構の時期は出土遺物の年代観から大半のものが近世期の所産と考えられる。なお、西・南側断面では近世期に複数の土間状の整地層やカマド状の焼土面が観察できることから、本来は上位にも複数の近世遺構面が存在していたものと推察される。

（1）第1面の遺構と遺物（図11～17・図版3）

小穴・礎石（図12・図版3）

調査区全域で直径0.2～0.4mの平面円形や梢円形を呈する小穴を40基余り検出した。小穴からは出土遺物がほとんど確認できず、また基盤層（地山）上で検出したこともあり、個別の掘削開始面を明らかにすることはできなかった。その中にあって、20・25・40小穴のように一辺20cm前後の平石を礎石として据えたものは、初期段階の建物を構成したものと位置付けることが可能であろう。

小穴の埋土は灰～褐色シルト或いは黄灰色シルトを基調とし、地山由来の黄色系シルトや砂質シルトブロックを含んでいる。

小穴の性格に関しては明らかにできないものが多いが、20小穴のように柱痕跡が認められ一辺10cm、厚さ6cmの平石を根石として底に敷くものがあり、建物として復元はできないものの、柱穴と

して機能した小穴も少なからず存在したと想定される。

埋桶（図 13・14・17・図版 3）

桶が土坑内に埋置される埋桶を 4 基（7～9・15 埋桶）検出した。これらは基盤層（地山）上面で検出したこともあり、個別の掘削開始面を明らかにすることはできなかった。

7 埋桶（図 13）

調査区西側中央、 $X = -134,257 \cdot Y = -49,177$ 付近に位置する。埋桶は直径約 0.35 m、深さ 0.2 m+α の平面円形の土坑を掘り、その中に直径約 0.3 m の桶を埋置する。なお、土坑底面には桶の安定を図るために細砂混粘質シルト（グライ化してオリーブ黒色を呈する）を、側面には桶の裏込め土として灰色細砂混粘質シルトを入れている。遺物は出土していない。

なお、桶は上部が削平により欠失しており、現状で約 0.13 m の高さを有する。桶にはスギ材を使用。

8 埋桶（図 6・17）

調査区南西隅、 $X = -134,260 \cdot Y = -49,175$ 付近に位置する。南側は調査区外へと広がる。埋桶は直径約 1.2 m、深さ約 0.5 m の平面円形の土坑を掘り、その中に直径約 0.85 m の桶を埋置する。なお、土坑底面には桶の安定を図るためにシルト（グライ化してオリーブ黒色を呈する）を、側面には桶の裏込め土として灰色シルト混細～極細砂と地山由来の灰白・淡黄色砂質シルトのブロック土を入れている。

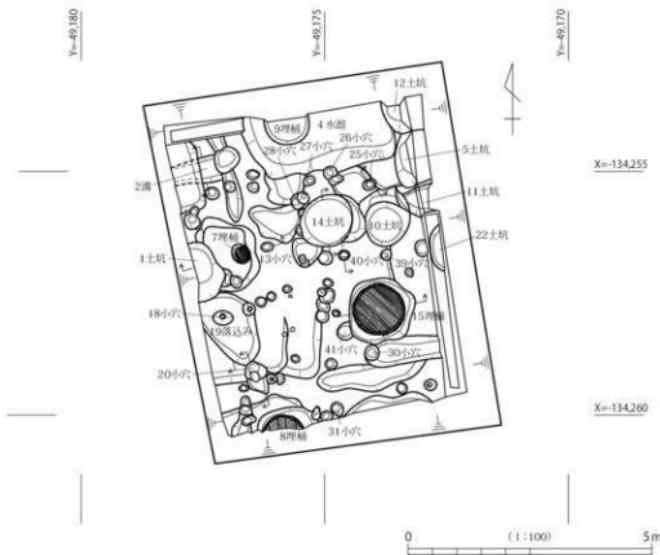


図 11 1 区 第 1 面 平面図

南壁断面の観察から、上位の近世遺構面に帰属するものと考えられる。

機能終了後、埋め戻し時に多量の瓦を廃棄している。出土遺物は瓦以外に丹波焼の貧乏徳利（図17-1）や須恵器がある。1は外面に鉄軸が、内面には透明釉がかけられ、外面にはイッヂで文字が書かれる。18世紀代の所産であろうか。

9 埋桶（図15）

調査区北辺中央、X = -134,256・Y = -49,176付近に位置する。北側は調査区外へと広がる。埋桶は直径約0.9m、深さ約0.7mの平面円形の土坑を掘り、その中に直径約0.7mの桶を埋置する。なお、土坑底面には桶の安定を図るために灰色細～中砂を、側面には桶の裏込め土として灰色細砂混シルトと地山由来の明緑灰色シルト質粘土のブロック土を入れている。北壁断面の観察から、上位の近世遺構面に帰属するものと考えられる。

機能終了後、桶は解体されており、埋土に桶部材が多量に廃棄されている。出土遺物は極めて少なく、僅かに須恵器表裏部片がみられた。

15 埋桶（図14・図版3）

調査区東側、X = -134,258・Y = -49,174付近に位置する。埋桶は直径約1.3m、深さ0.65m

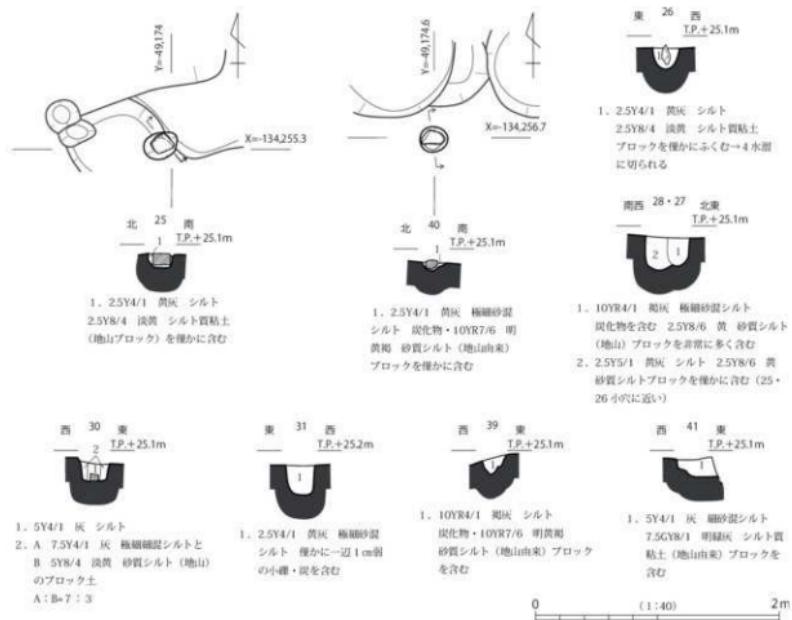


図12 小穴 平・断面図

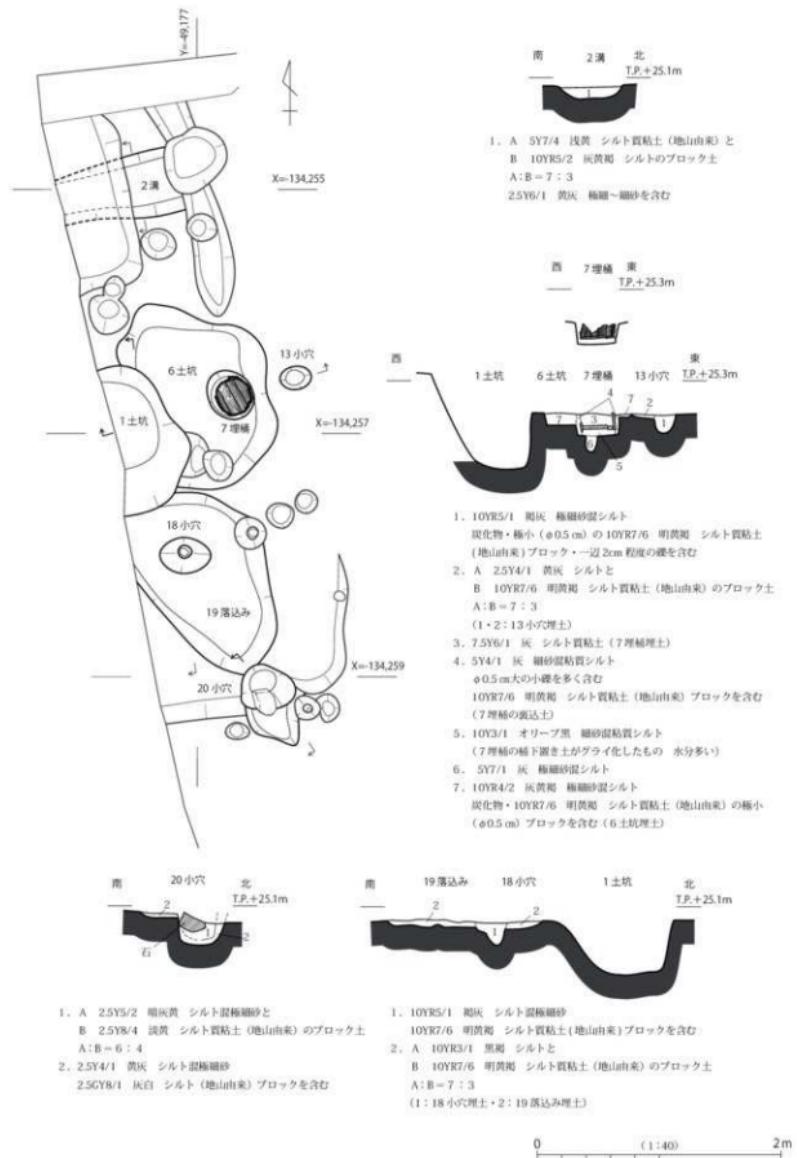


図13 7埋桶他 平・立・断面図



図 14 15 墓桶他 平・立・断面図

$+ \alpha$ の平面円形の土坑を掘り、その中に直径約 1.1 m の桶を埋置する。なお、土坑底面には桶の安定を図るために灰色粘質シルト（グライ化）を、側面には桶の裏込め土として黄灰色極細砂混シルトと地山由来の明緑灰色砂質シルトのブロック土を入れている。

機能終了後、埋め戻し時に多量の瓦を廃棄している。出土遺物は瓦以外にみられなかった。なお、桶内埋土最下層からは種子（マクワウリの仲間）11点の出土があった。

これらの埋桶の性格は明らかではないが、桶に明瞭な糞尿の痕跡が認められることや上位面でカマド状の施設が構築されていることから台所に近い区画に設置された水溜として使用された可能性を想定しておきたい。

土坑（図 13～17・図版 3）

調査区全域で、平面円形や不定形な土坑が複数基みられた。中でも多く検出できた平面円形を呈する土坑を中心に記載をすすめる。これらは基盤層（地山）上面で検出したこともあり、個別の掘削開始面を明らかにすることはできなかった。

平面円形を呈する土坑には、調査区北東隅に集中して掘削された 5・10・12・14・22 土坑、調査



区西辺中央に位置する1土坑がある。これらは埋桶の掘り方と同様な断面形を呈しており、多くの土坑(1・5・10～12・22土坑)はブロック土で埋め戻されている。

こうした土坑の側壁には桶に巻かれた蓋の残片が付着する例や、埋土に桶の部材が廃棄されている例が多く認められたことから、本来は埋桶であったと推察され、廃棄時に埋置していた桶を抜き取ったものであろう。

出土遺物は総体的に少なく、丹波焼擂鉢が1・5・10土坑から、肥前系染付が12土坑から、花崗岩製石臼が14土坑から出土している。なお、瓦はいずれの土坑からも出土している。図17-2は1土坑出土の丹波焼擂鉢。擂目は7条一単位の櫛描きである。長谷川分類I B3類、17世紀中頃～18世紀前半の所産か。



図 16 5 土坑他 断面図

4水溜(図15・17・図版13・14)

調査区北辺中央から東側、X = -134,255・Y = -49,175付近に位置する。北側は調査区外へと広がる。確認できた規模は東西約2.9m、南北約1.2m、深さ約0.3mである。水溜の西側は9埋桶に、東側は12土坑に切られている。断面形は逆台形を呈し、埋土は大きく3層に分かれる。上層は地山由来の明緑灰シルトブロックを含む灰色細砂混粘質シルト、中層が地山由来の明緑灰砂質シルトブロックを含む灰色極細～細砂混粘質シルト、下層が灰色粘質シルト～細砂である。出土遺物には肥前系陶器碗、瀬戸・美濃系陶器天目碗・腰錆茶碗、須恵器、桶底部材、蓮華文軒丸瓦等がある。図17-3は土師質皿。4は肥前系陶器碗。体部下半は露胎で、内面には透明釉がかけられる。高台内には兜巾を残す。17世紀前半の所産。5は瀬戸・美濃系陶器天目碗。高台脇は露胎。内外面に鉄釉がかけられる。16世紀代の所産。6は硯。大半を欠損し、僅かに海部が残る。残存する海部には太くて深い擦痕が認められることから、砥石として転用された可能性がある。粘板岩または黒色頁岩製か。7はスギ材を用いた桶底。

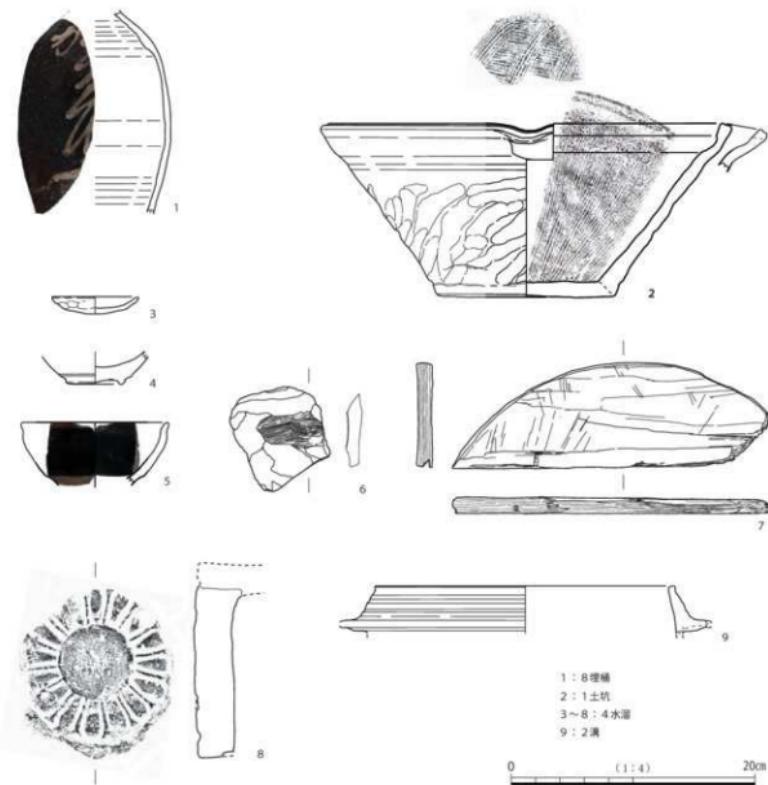


図17 遺構出土遺物

復元径は約35cmを測る。8は細弁16葉蓮華文軒丸瓦。周縁は素文となっている。蓮子は4個確認できる。本来は $1+4+9$ の14個であろうか。上半部の周縁部は剥落。剥落部分には瓦当と周縁部を密着させるための布目がみられる。復元径は約16cm。

2溝（図13・17）

調査区北西隅、 $X = -134,255 \sim Y = -49,177$ 付近に位置する。 $N - 76^\circ - E$ を軸に東から西へとはしる。溝は複数の土坑や溝に切られ、判然としない部分も多いが、西壁断面観察の結果、西側は調査区外へと延びる。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰黄褐色シルトと地山由来の浅黄色シルト質粘土のブロック土である。出土遺物には瓦質羽釜（図17-9）がある。鶴柄分類B群IV類、15世紀代の所産。出土遺物や埋土から近世期以前の遺構と想定される。

なお、2溝以外に近世期以前の遺構と想定されるものに、調査区西端で検出した黒褐色シルトと地山由来の黄色系シルトのブロック土を埋土にもつ19落込み等の遺構が挙げられる。出土遺物に恵まれなかったため、帰属時期は明らかではないが、埋土の黒褐色シルトが3区で確認した第4層に類することから、古墳時代から古代の遺構である可能性が窺える。

1区で検出した多くの遺構埋土からは多量の瓦が出土する。このことから瓦葺の建物があったと推察される。また、調査区西側断面で黄色系シルトを用いた土間状の整地層上面でカマド状の焼土面が観察できること、多数の埋桶が設置されていることを勘案すれば、建物内でも台所に近い部分である可能性が高い。

第3節 2区の調査

2区は調査地のほぼ中央に位置し、 $X = -134,266 \sim -134,288 \cdot Y = -49,154 \sim -49,178$ の範囲に位置する、南北約18m×東西約23mの調査区である。

近代・近世の整地層や耕作土を掘削し検出した $X = -134,275$ 以南にみられる黒褐色～褐灰色シルト上面及び、以北でみられる基盤層（地山）上面を第1面として、 $X = -134,275$ 以南にみられる黒褐色～褐灰色シルトを掘削して検出した基盤層（地山）上面及び以北の基盤層（地山）上面で確認した黒褐色～褐灰色シルトが堆積した落込み等を第2面（最終面）として調査を行なった。

第1面は北側がやや高くなるもののほぼ平坦な地形で、標高はT.P.+25.1m前後である。第1面では調査区全面に柱穴、礎石、井戸、土坑、溝等の遺構が広がる。第2面は北側から緩やかに南側に傾斜する地形となる。第2面では小穴や土坑、不定形な落込みを検出した。

（1）第1面の遺構と遺物（図18～44・図版4～7）

小穴・礎石（図19・20・図版4）

直径0.2～0.4mの平面円形や楕円形を呈する小穴や礎石を100基余り検出した。これらは $X = -134,270 \sim -134,278 \cdot Y = -49,160 \sim -49,170$ の範囲に集中してみられる。小穴からは出土遺物がほとんど確認できず、また大半のものを基盤層（地山）上面で検出したこともあり、個別の掘削開始

面を明らかにすることができなかった。

小穴の埋土は灰～褐色シルト或いは黄灰色シルトを基調とし、地山由来の黄色系シルトや砂質シルトブロックを含んでいる。

小穴の性格に関しては明らかにできないものが多いが、82・145・146 小穴等のように一辺 20cm 前後の平石を礎石として据えるもの、76・126・168・172 小穴のように根石を底に敷くものがあり、建物として復元はできないものの、建物の基礎としての性格を有するものが多いと推定される。

なお、多くの遺構の埋土から多量の瓦が出土することから、建物は瓦葺であったと推察される。

土坑（図 20～24・図版 4・5）

調査区全域で、平面円形や方形を呈する土坑が複数基みられた。土坑は大型のものが調査区北側の X = -134.270 ライン付近や西南西側の X = -134.280・Y = -49.170 付近でまとまって掘削されていた。これらは基盤層（地山）上で検出したこともあり、個別の掘削開始面を明らかにすることができなかつた。

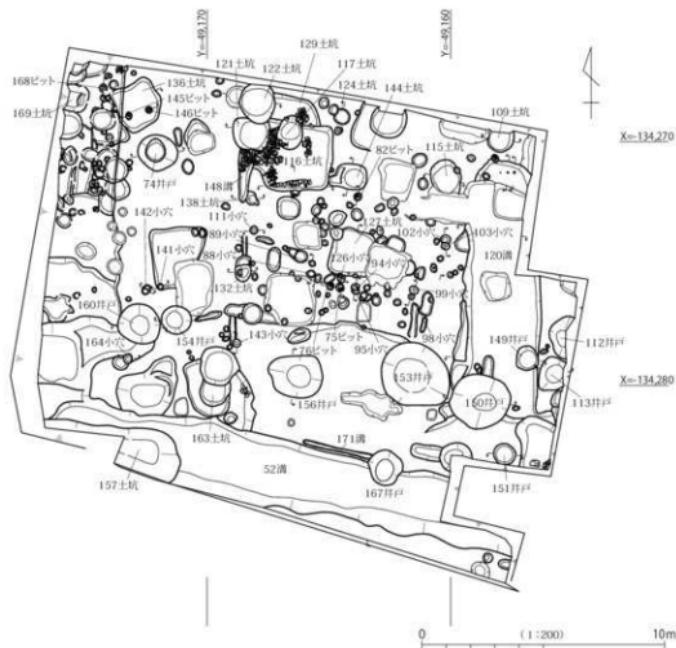
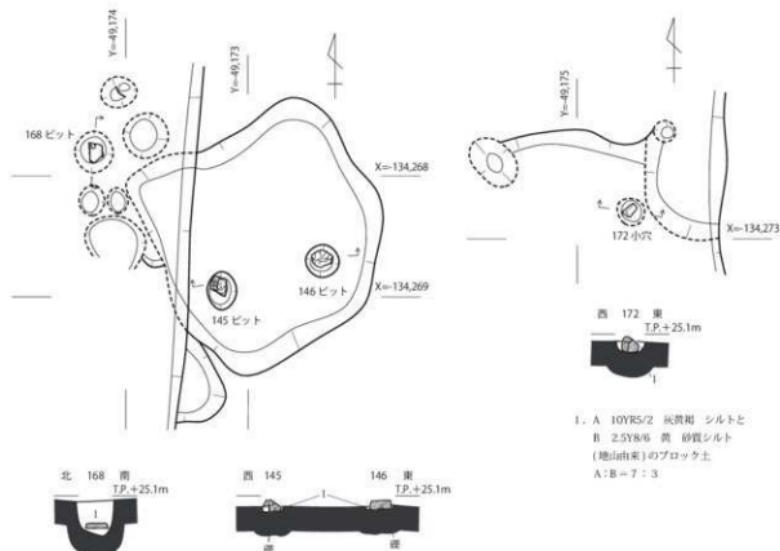
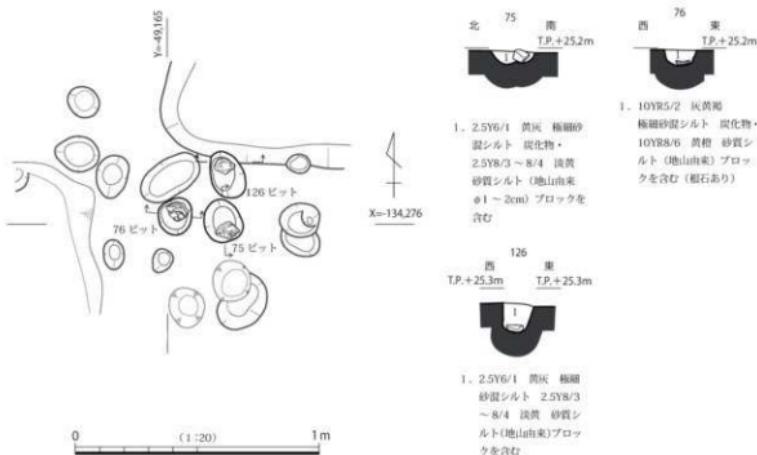


図 18 2 区 第 1 面 平面図



I. A 10YRS/2 灰黄褐 シルト
B 2.5Y8/6 黄 砂質シルト
(地山由来)のブロック土
A:B = 7:3

- I. 5Y4/1 底 極細砂混シルト
炭化物・5GY8/1 底白 砂質シルト
(地山由来)ブロックを含む
(136 土坑4由来)を含む
- I. 2.5Y5/1 黄灰 シルト
10Y8/2 灰白 シルトブロック(地山由来)・
2.5Y7/4 灰黄 極細砂～シルトブロック
(136 土坑4由来)を含む



I. 10YR5/2 灰黄褐
極細砂混シルト 炭化物・
10Y8/6 灰白 砂質シ
ルト(地山由来)ブロック
を含む(粗石あり)

- I. 2.5Y6/1 黄灰 極細
砂混シルト 2.5Y8/3
~8/4 灰黄 砂質シ
ルト(地山由来)ブロック
を含む

図19 小穴 平・断面図 (1)

109・115 土坑 (図 21)

調査区北東隅、X = -134,270・Y = -49,150付近に掘削された平面不整円形を呈する土坑である。109 土坑は長径約 1m、深さ約 0.35m、115 土坑は短径約 1.2m、深さ約 0.3m を測る。いずれも断面形は逆台形を呈し、ブロック土で埋め戻されている。後述する 121・122 土坑のように土坑の側壁には桶に巻かれた壺の残片の付着が確認されなかったが、埋土の状況や形態から埋桶であった可能性を

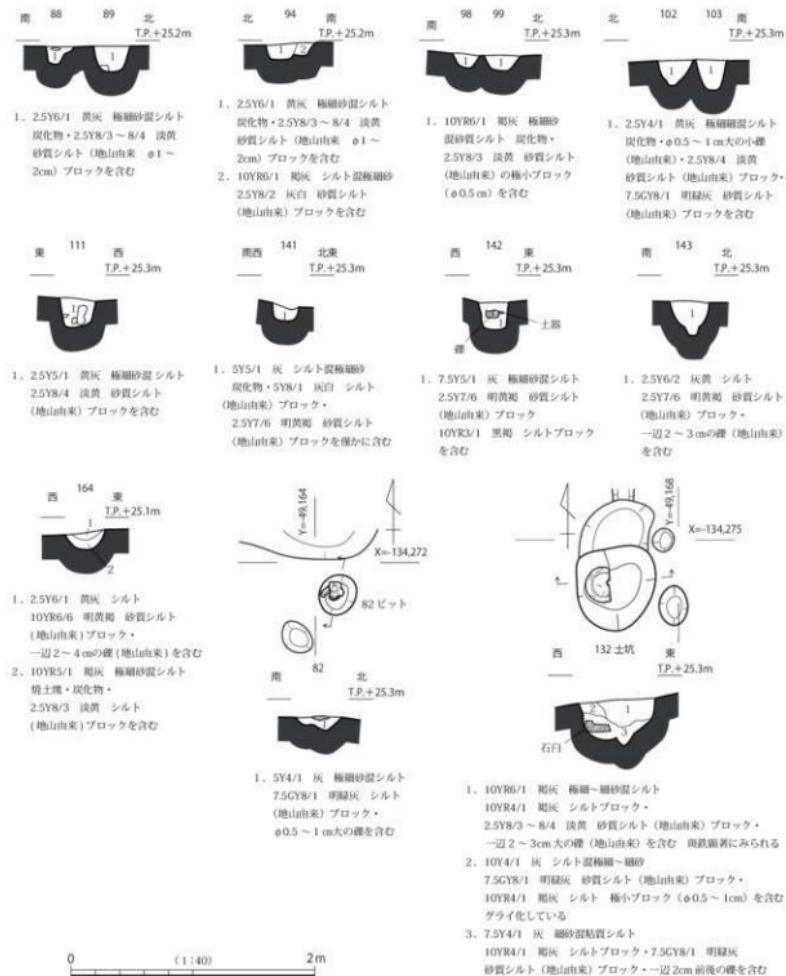


図 20 小穴 平・断面図 (2)・132 土坑 平・断面図

指摘しておきたい。出土遺物は極めて少なく、109 土坑から土師器細片がみられたのみで、帰属時期は明らかではない。

144 土坑（図 21）

$X = -134,271 \cdot Y = -49,164$ 付近に掘削された土坑。平面隅丸方形を呈する。長辺約 1.5 m、短辺約 1 m、深さ約 0.3 m を測る。土坑西側は 2 段に掘り込まれている。埋土は 3 層に分かれ、上層が黄灰色極細砂混砂質シルトで地山由来のシルト質粘土ブロックや焼土粒を含み、炭化物をラミナ状に含んでいる。中層が灰色極細砂混粘質シルト、下層が灰色細～中砂である。出土遺物には肥前系陶器刷毛目碗・京焼風碗・呉器手碗、肥前系染付碗・皿、丹波焼甕、須恵器等がある。18 世紀代の所産であろう。

124 土坑（図 21・22）

$X = -134,269 \cdot Y = -49,164$ 付近に掘削された平面円形を呈する土坑。直径約 0.6 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色シルト混極細～細砂で地山由来のブロックや礫を多く含む。出土遺物は瓦質羽釜、瓦類、砥石がある。図 22-10 は瓦質羽釜。鋤柄分類 C 群 IV 類、15 世紀末～16 世紀初頭の所産か。

出土遺物の年代観や埋土の様相から近世期以前の遺構と考えられ、本来ならば第 2 面に帰属させるべき遺構であろう。

117・121・122 土坑（図 21・22・図版 13）

調査区北側、 $X = -134,270 \cdot Y = -49,167$ 付近に掘削された土坑群である。平面形は長辺円や隅丸方形を呈する。これらの土坑は 116・129 土坑や 148 溝を切って構築されている。なお、121 と 122 土坑は切り合い関係にあり、122 土坑が新しい。117 土坑は長辺約 1.4 m、121 土坑は一辺約 1.5 m、深さ約 0.5 m、122 土坑は長辺約 1.6 m、深さ約 0.5 m を測る。いずれも断面は逆台形を呈し、ブロック土で埋め戻されている。121・122 土坑の側壁には桶に巻かれた縄の残片が付着し、117 土坑埋土には桶の部材が廃棄されていたことから、本来は埋桶であったと推察され、廃棄時に埋置していた桶を抜き取ったものであろう。

出土遺物には 117 土坑から備前焼水屋甕や砥石、円筒埴輪片が、121・122 土坑から肥前系陶器碗・皿や肥前系染付皿、焼締陶器、須恵器等がみられる。図 22-11 は 117 土坑出土の備前焼水屋甕である。断面三角形を呈する突帶が 1 条廻る。また半環状を呈する把手の痕跡をもつ。12～14 は 121 土坑出土。12・13 は肥前系陶器である。12 は京焼風碗。18 世紀前半の所産か。13 は皿。内外面は白化粧土塗りで、内面に刷毛目文が施される。17 世紀後半の所産。14 は肥前系染付皿。豊付は釉剥ぎされ、砂目痕がみられる。内面見込みは蛇の目釉剥ぎ。17 世紀前半の資料か。15 は 122 土坑出土の円筒埴輪。同形のものが 121 土坑からも出土している。土師質の焼成。赤色くさり礫を胎土に多く含む。6 世紀前半の所産か。

出土遺物の年代観から 18 世紀代の所産と推察される。

116・129 土坑（図 23・24・図版 5・14）

調査区北側、 $X = -134,270 \cdot Y = -49,167$ 付近に掘削された平面方形を呈する土坑。116 土坑は



図21 土坑 断面図

117・121 土坑に切られ、129 土坑は 116・117・122 土坑に切られる。

116 土坑は東西約 3.2 m、南北約 3 m を測り、断面形は浅い皿状を呈する。断面観察から、土坑は一度埋まつた後、再度掘削されたようであり、その際に土坑中央や東側で南北にはしる石列が構築されたようである。石列の遺存状態が良くなかったため、その性格は不明である。

土坑南辺には一辺 10 ~ 20 cm の平石を 13 個並べた石列が構築されていた。土坑西側には多量の石が集積されていた状況を勘案すると、他にも石列が築かれていた可能性が高い。土坑の性格は明らかではないが、埋土最下層には水成堆積と思われるシルトと細砂の互層がみられる。南辺沿いに築かれた石列を護岸状施設と想定するならば、116 土坑は水溜状施設であった蓋然性が高い。

出土遺物には肥前系染付、備前焼甕・擂鉢、土師器皿、瓦質羽釜、須恵器、巴文軒丸瓦、平瓦、有舌尖頭器等がある。15 ~ 16 世紀代の遺物が主体を占めていることから、染付は混入と思われる。図 24

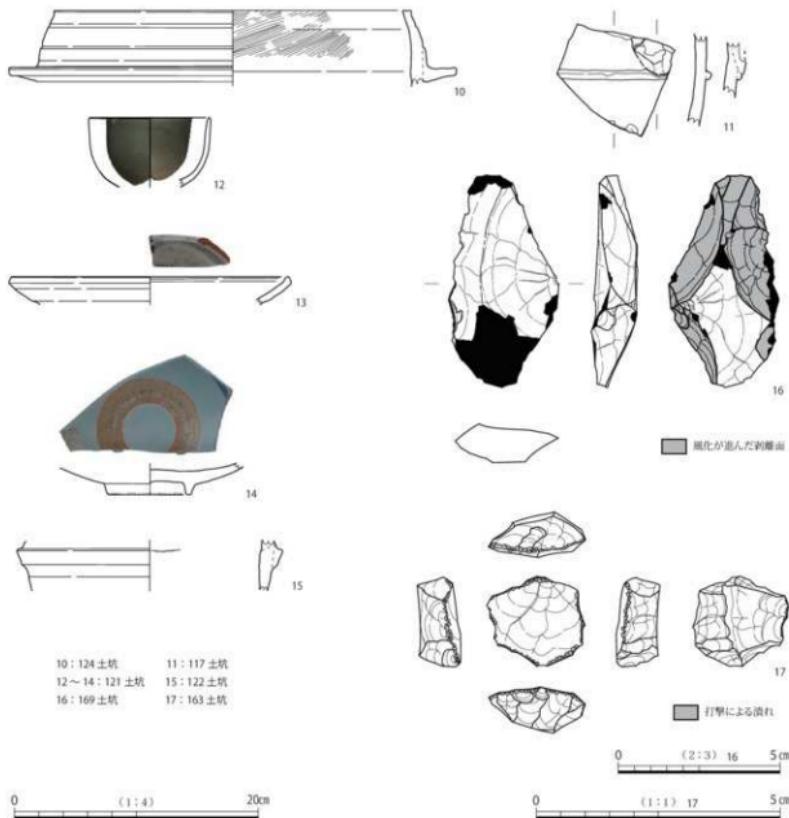


図 22 土坑 出土遺物

— 18 ~ 20 は土師器皿。胎土は混和材をほとんど含まない精良なもので、橙色系である。15世紀後半～16世紀前半の所産。21・22 は備前焼である。21 は壺。口縁部は玉縁状であるが、肥厚は退化傾向にある。15世紀後半～16世紀の所産。22 は擂鉢。23 は須恵器高环脚部。黒色粒を多く含む。24 は三巴文軒丸瓦。巴頭は近接し、尾は短い。瓦当面に離れ砂が付着。25 はサヌカイト製有舌尖頭器。先端部及び舌部を欠損する。斜並行剥離は確認できるが、全体的に摩滅が著しい。形態は B タイプである。重量は 28.3 g。

129 土坑は 116 土坑の北側に位置する。土坑の大半を 116 土坑に切られるため、全容は明らかでない。土坑東側底面に円形に石が集積されている。出土遺物には瓦質羽釜、須恵器、土師器、瓦類がみられる。図 24～26 は土師器皿。胎土は混和材をほとんど含まない精良なもので、灰黄色系である。15世紀後半～16世紀前半の所産。27 は瓦質羽釜。鋤柄分類 C 群 IV-2 類、15世紀後半～16世紀前半の資料であろう。28 は半截花菱唐草文軒平瓦か。大半を欠損するが、左外縁には滑り止めの突起を有している。

両土坑は出土遺物の年代観から、15世紀後半～16世紀の所産と考えられ、本来ならば第2面に帰属させるべき遺構と言える。

169 土坑（図 22・図版 14）

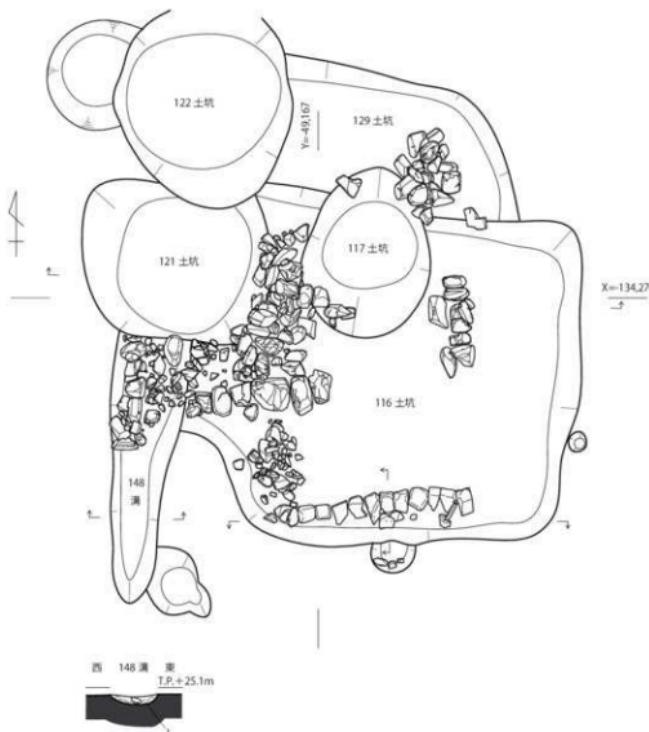
調査区北西隅、 $X = -134,268 \cdot Y = -49,175$ 付近に掘削された土坑。土坑西側は調査区外へと広がる。169 土坑周辺には複数の同形の土坑が重複して掘削されている。169 土坑の埋土は 2 層に分かれ、上層が黄灰色シルトと地山由来の灰白色砂質シルトのブロック土、下層が灰色極細～細砂混シルトである。出土遺物には摩滅した須恵器・土師器片、サヌカイト製横長有底刺片があるが、土坑の時期を示したものではない。埋土の状況から近世期の遺構と想定される。図 22-16 はサヌカイト製横長有底刺片。背面の末端部に平滑な剥離面を取り込んだ横長の刺片。腹面側の周縁にみられる剥離面は風化が著しく進んでいることから、剥離作業以前の剥離と考えられる。重量は 25.2 g を測る。旧石器時代の所産であろうか。

136 土坑（図 21）

調査区北西側、 $X = -134,269 \cdot Y = -49,173$ 付近に掘削された平面隅丸方形を呈する土坑。規模は東西約 1.9 m、南北約 2 m、深さ約 0.2 m である。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黄灰色～浅黄色シルトを基調とする。断面図の 4 は固く締まっており、当層の掘削途中で礎石（145・146 小穴）を検出した。窪みを整地したものか。出土遺物は焼締陶器、土師器、須恵器、瓦が少量出土したのみである。

127 土坑（図 21）

調査区中央やや東寄り、 $X = -134,274 \cdot Y = -49,164$ 付近に掘削された平面隅丸方形を呈する土坑。土坑東側は攪乱によって切られている。土坑南北中軸ライン上の北側底面で、直径 0.5 m 前後の土坑がみられる。規模は現状で東西約 1.5 m、南北約 2 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m を測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は締まりの悪い灰白色の極細～細砂である。この種の埋土は他にみられず、土坑の性格は不明である。遺物は出土しなかった。



1. 2.5Y6/1 黄灰 シルト—極細砂 ラミナあり
炭化物・一辺5cm程度の礫(地山由来)を含む

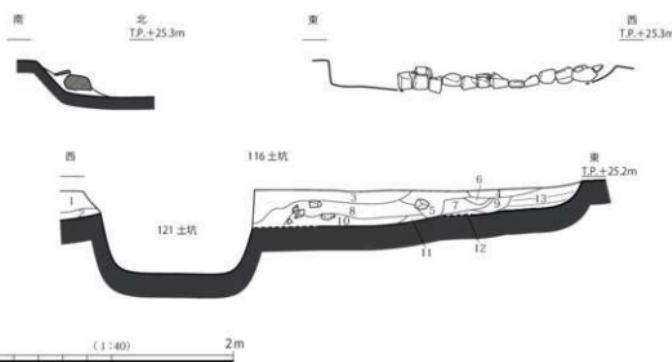


図23 116土坑 平・立・断面図・148溝 断面図

116 土坑 土色

1. IOYR4/2 灰黄褐 糙面砂質シルト
IOYR7/6 明黄褐 砂質シルト(地山由来)ブロック・
IOYR4/1 黄灰 シルトブロック・
一辺1~5cmの礫(地山由来)を含む
非常に固くしまる
2. IOYR5/1 黄灰 シルト
炭化物・2.5YT/1 灰黄 極細砂ブロックを僅かに含む
3. IOYR6/1 黄灰 極細砂混シルト
炭化物・2.5YS/2 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロック・
IOYR3/1 黑褐 シルトブロックを含む
固くしまる 壊れ易者
4. 2.5YS/1 黄灰 シルト混細砂
炭化物・2.5YT/2 灰黄 シルトブロック(地山か)・
一辺1~2cmの礫を含む
5. A IOYR7/6 明黄褐 砂質シルトと
B IOYR5/1 黄灰 シルトのブロック土
A:B=6:4

6. SY7/1 灰灰 極細砂
7. 2.5Y6/2 灰黄 粘土
(この粘土中に石片の縞がくるまれる)
8. 2.5Y4/1 黄灰 シルト混極細砂
炭化物・2.5YS/2 灰白 砂質シルト(地山由来)ブロック・
SY4/1 黄 シルトブロック・
一辺5~10cmの礫を含む
9. 2.5Y6/1 黄灰 極細～細砂混シルト
IOYR3/1 黑褐 シルトブロック・
2.5YS/6 黄 砂質シルトブロックを含む
10. IOYR4/1 黄灰 シルト～粘土
西側は石数のため不明
11. 2.5YS/1 从白 極細～細砂
12. 2.5YS/1 黄灰 細砂
13. 2.5Y7/1 灰白 シルト混細砂と
2.5YS/1 黄灰 シルトの互層
2.5YS/6 黄 砂質シルト(地山由来)ブロック・
一辺3cmの大礫を含む

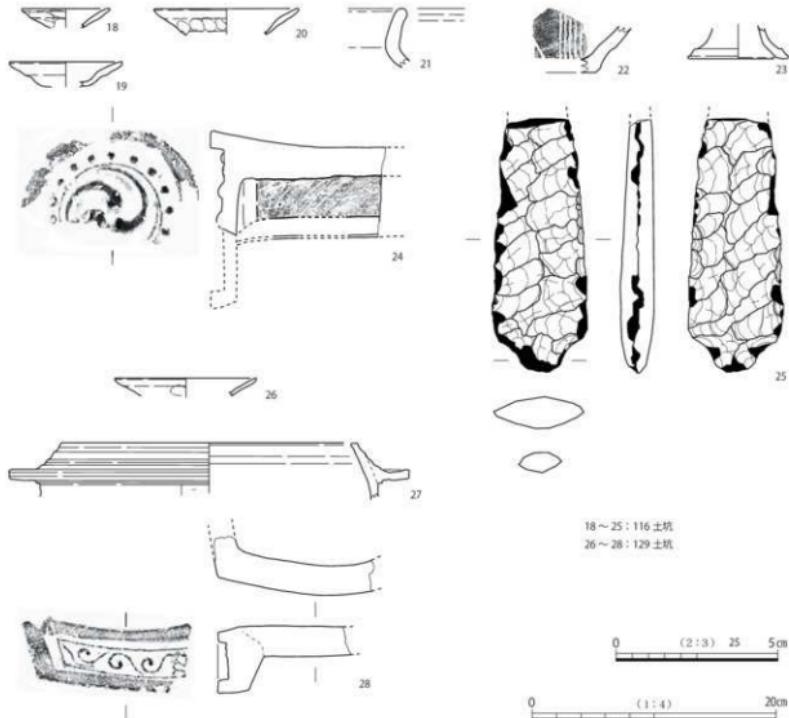


図 24 116・129 土坑 出土遺物

132 土坑（図 20・図版 4）

調査区中央やや西寄り、 $X = -134.275$ ・ $Y = -49.168$ 付近に掘削された土坑。平面形は不整な隅丸方形を、断面形は逆台形を呈する。埋土は3層に分かれ、下層に花崗岩製の石臼（上臼）が廃棄されていた。出土遺物には瓦や石臼があったのみで、時期は不詳である。

163 土坑（図 22）

調査区南西側、 $X = -134.280$ ・ $Y = -49.170$ 付近に掘削された平面不整円形を呈する土坑。土坑北側は土坑に切られており全容は判然としない。現状で東西約1.2m、深さ約0.3mを測る。出土遺物には肥前系陶器碗・呂器手碗・皿、肥前系染付碗、焼締陶器擂鉢、土師器火鉢、瓦質火鉢、須恵器等がある。図22-17は緑色チャート製火打石である。縁辺部は打撃によるツブレが顕著。使用に耐えられないサイズになったため、廃棄されたものと考えられる。重量は3.4g。

出土遺物の年代観から17世紀中頃の所産と思われる。

井戸（図 25～30・32・34・図版 6）

調査区南側の $X = -134.280$ ライン沿いには井戸が11基掘削されている。いずれも検出面から約1m前後で湧水がみられる。74・149・154井戸以外には井戸枠の痕跡が認められないので、素掘りの井戸であったと思われる。

74 井戸（図 25・27・図版 6）

調査区北西、 $X = -134.270$ ・ $Y = -49.172$ 付近に掘削された平面不整椭円形を呈する井戸。東西約1.6m、南北約1.5m、深さ約1.7mを測る。断面形は漏斗状を呈する。埋土には多量の屋根瓦と井戸枠瓦が廃棄されていた。本来は瓦組の井戸であろう。出土遺物には肥前系陶器京焼風碗、肥前系染付碗、砥石、花崗岩製石臼等が出土している。図27-29はスギ材を用いた桶底である。

出土遺物の年代観から、18世紀代の所産であろう。

112・113 井戸（図7・25・27）

調査区東辺、 $Y = -49.155$ ライン上に南北に並列して掘削されている。112井戸が北側に、113井戸が南側に位置し、113井戸が112井戸を切っている。井戸東側は調査区外に広がるため、全容は判然としない。出土遺物は113井戸から肥前系染付碗、瓦質火鉢、須恵器が出土している。図27-30は平面円形を呈する瓦質火鉢。31・32は肥前系染付碗。31は筒形碗。疊付は釉剥ぎされ、砂目痕がみられる。17世紀中頃の所産。32は丸碗（波佐見）。高台は施釉を基本とするが、やや雑なため露胎となる部分がみられる。内面見込みは蛇の目釉剥ぎ。外面は梅樹文が描かれる。17世紀後半～18世紀前半の所産。

出土遺物の年代観から、18世紀前後の所産であろう。

149 井戸（図 32）

113井戸の西側約1mに位置する平面不整円形の井戸。直径約0.9mである。断面形は長方形状を呈する。井戸側壁際には井戸枠が腐朽したような痕跡がみられた。出土遺物は不明陶器片が1点あるのみ



図25 井戸 断面図(1)

で時期は不詳である。

151 井戸（図25）

113 井戸の南約3mに位置する平面円形の井戸。直径約0.9mである。井戸を埋める際に設置した息抜き用の竹痕跡が残る。出土遺物には肥前系陶器、肥前系染付、備前焼、土師質十能がみられた。

152 井戸（図8）

151 井戸の西側約1mに位置する平面円形の井戸。直径約1.1mである。肥前系（波佐見）染付梅樹文丸碗がみられた。17世紀後半～18世紀前半の所産であろう。

150・153 井戸（図25・28・34・図版6）

152 井戸の北側約1mに位置する平面不整円形を呈する大型の井戸。150・153 井戸が東西に並列するように掘削されている。150 井戸は東西約2.4m、南北約2.2mを測る。断面形は漏斗状を呈する。埋土には多量の屋根瓦や礫が廃棄されていた。153 井戸は東西約2.7m、南北約2.6mを測る。断面形は漏斗状を呈する。埋土には多量の屋根瓦や礫が廃棄されていた。出土遺物は150 井戸から肥前系陶器皿、土師質羽釜、焼綿陶器（備前焼か）甕、須恵器、瓦類が、153 井戸から土師質羽釜、瓦質羽釜、



図26 井戸 断面図（2）

肥前系陶器碗、瀬戸・美濃系陶器天目碗、陶器壺、須恵器、石臼、瓦類等がみられる。

図 28 - 33 は 150 井戸出土の焼締陶器（備前焼か）甕。34 ~ 44 は 153 井戸出土遺物である。34 は肥前系陶器碗。高台脇から高台内は露胎。内面は灰釉がかけられる。高台は極めて低い。16世紀末 ~ 17世紀初頭の所産か。35 は瀬戸・美濃系陶器天目碗。高台脇以下は露胎。外外面に鉄釉がかけられる。17世紀前半の所産であろう。36 は焼締陶器（備前焼か）甕か壺。外面に断面三角形の突帯が 1 条廻る。37 は土師質羽釜。鍔は極めて短い。15 ~ 16 世紀の所産か。38・39 は瓦質羽釜である。酸化焰焼成により土師質になったもの。38 は短い鍔が付く。39 は赤色くさり礫を多く含んでいる。両者とも鶴柄分類 D 群 II 類、16 世紀前半の所産であろう。40 は須恵器甕。頸部外面上には櫛描きの波状文が施される。胎土には黒色粒が顕著にみられる。6 世紀中頃～後半の所産。41 は三巴文軒丸瓦。42 は軒丸瓦。瓦当面が剥落したもの。凹面の玉縁連結部近くに仕切りを設けており、滑り止めとしている。43・44 は花崗岩製石臼。43 は磁白の上臼である。播目は 8 分画であろう。44 は磁白の下臼。播目は 8 分画である。

156 井戸（図 25・図版 6）

調査区中央南側、 $X = -134,280 \cdot Y = -49,166$ 付近に掘削された平面隅丸方形を呈する井戸。規模は東西約 2.4 m、南北約 1.7 m、深さ約 1 m を測る。南側は 2 段に掘削される。断面形は逆台形状をなす。出土遺物には肥前系陶器皿、瀬戸・美濃系陶器内堀皿、不明陶器甕または壺等がある。

出土遺物の年代観から 17 世紀代の所産と思われる。

154 井戸（図 26・29・図版 6・14）

調査区西側、 $X = -134,277 \cdot Y = -49,171$ 付近に掘削された平面円形を呈する井戸。直径約 1.2 m を測る。断面形は逆台形を呈する。井戸側壁際には井戸枠が腐朽したような痕跡がみられた。出土遺物には肥前系陶器、肥前系染付碗、京・信楽系陶器鍋、瀬戸・美濃系陶器碗、備前焼播鉢、軟質施釉陶器、土師質培培、瓦質火鉢、砥石等がある。

図 29 - 45 は土師質培培。口縁部外面に粘土を貼り付けて把手を作る。把手上面には貫通しない直径 0.6cm の孔を穿つ。口縁部外面にススが付着。胎土には赤色くさり礫や雲母、チャート等がみられる。積山分類 D2 類、大阪産の培培。18 世紀代の所産。46 は瓦質火鉢。外面には幅 1 cm の突帯が 2 条廻り、突帯上には D ~ O 字状の刻み目を入れる。18 世紀代の所産であろう。

47 ~ 49 は肥前系陶器である。47 は火入れか。口縁端面に浅い 3 条の沈線が廻る。外面は鉄釉がかけられ、内面は露胎である。17 世紀後半の所産であろうか。48 は甕か。口縁端面には浅い 5 条の沈線が廻る。17 世紀代の所産であろう。49 は壺か。外面にはカキメが施され、鉄釉がかけられる。17 世紀後半頃の資料であろうか。

50 は瀬戸・美濃系陶器碗（せんじ）。胎土は磁器質。外面には鉄釉で刷毛目文が描かれる。17 世紀後半～18 世紀中頃の所産。51 は京・信楽系陶器鍋。三角錐状の脚が 3 方向に付く。底部付近は露胎で、それ以外には内外面に鉄釉がかけられる。内面見込みに 1箇所目跡が残る。52 は不明陶器壺か。内面は露胎であることから袋物である可能性が高い。外面には鉄釉がかけられる。底部外面は伏せて焼成したためか、自然釉がかかる。

53 は備前焼播鉢。高台が付くタイプ。播目は幅 2.5cm で、11 条一単位の櫛描きである。18 世紀中頃の所産。54 は丹波焼播鉢。口縁部は片口となる。口縁部外面には浅い沈線が 2 条廻る。播目は幅 2 cm で、

7条一単位の櫛描きである。17世紀後半～18世紀前半の資料。

55・56は軟質施釉陶器。55は皿。内面及び口縁部外端部に柿袖をかける。口縁部に油煙が付着することから灯明皿として使用されたもの。56はミニチュアの把手付片口。全面に緑釉と透明釉がかけられる。厚く釉が残る部分は銀化が著しい。まごと道具の一種か。

57～59は肥前系染付である。57・58は丸碗。58は内面見込みに蛇の目釉剥ぎ。57は17世紀前半、58は17世紀末～18世紀前半の所産か。59は小杯（波佐見）である。呉須・釉はやや緑がかる。17世紀後半～18世紀前半の所産。60は砥石。肌理は粗い。表裏面及び長側面が砥面となる。側面には細かな擦痕が、表裏面には段差が付くような大振りな使用痕がみられる。砂岩製。

出土遺物の年代観から18世紀代の所産と思われる。

160 井戸（図26・図版6）

154 井戸のすぐ西側に位置する。直径約1.7mの平面円形の井戸。断面形は漏斗状を呈する。断面観察の結果、井戸は埋没後、上部を再掘削して土坑が築かれていた。土坑の埋土はラミナが観察できる堆積であるため、自然に埋まつたと推察される。なお、最上部には大型の礫が多数廃棄されていた。井戸からの出土遺物は極めて少なく、肥前系染付丸碗、焼締陶器擂鉢、瓦、土師器、須恵器が少量みられるのみであった。

出土遺物の年代観から17世紀末～18世紀前半頃の所産か。

167 井戸（図30・34・図版7・14）

153 井戸の南側約2.5m、X = -134.283・Y = -49.163付近に位置する平面不整梢円形を呈する井戸。52・171溝を切っている。規模は長径約1.6m、短径約1.4mである。断面形は漏斗状を呈する。埋土には礫を多量に含んでいる。出土遺物には肥前系陶器、肥前系染付碗・皿・油壺・水滴・京・信楽系陶器碗・鍋・瀬戸・美濃系陶器碗・備前焼擂鉢、土師質皿・焰烙、漆器椀等がある。

図30～61は土師質皿。所謂「へそ」皿である。外面にユビオサエの痕跡を残す。胎土は混和材をほとんど含まない精良なもので、褐灰色系である。18世紀初頭頃の所産であろう。62は土師質盤か。

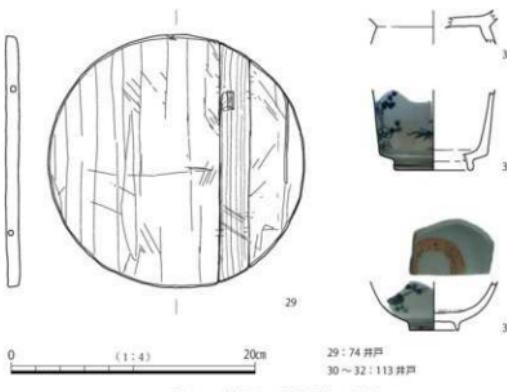


図27 井戸 出土遺物（1）

胎土は灰白色を呈する比較的密なもの。長石や石英、雲母、赤色くさり礫を含んでいる。63～67は土師質焰烙である。63は口縁部外面にスヌが付着。胎土には赤色くさり礫が顕著にみられる。積山分類D2類、大坂産の焰烙で18世紀代の所産であろう。64～66は口縁部下半に突帯が廻る。突帯下にはスヌが付着。65は口縁端部を一部肥厚させて、把手を作っている。64・65は積山分類F1類、66

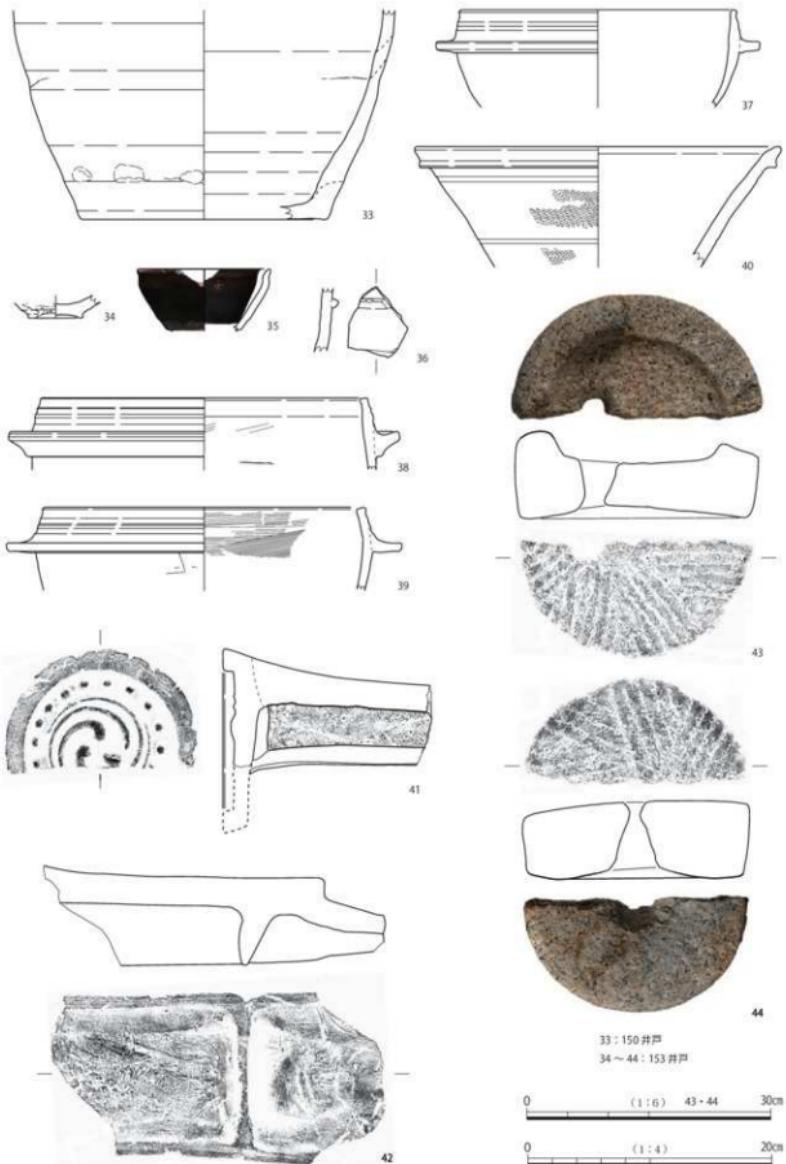


図 28 井戸 出土遺物 (2)

はF2類で大和産であろう。18世紀代の所産。67は口縁部が肥厚し、外面下端が突帯状に突出して棱を成している。口縁部以下にスヌが付着。胎土には赤色くさり礫が頗著にみられる。積山分類G類、枚方産の焰烙で19世紀代の所産であろう。

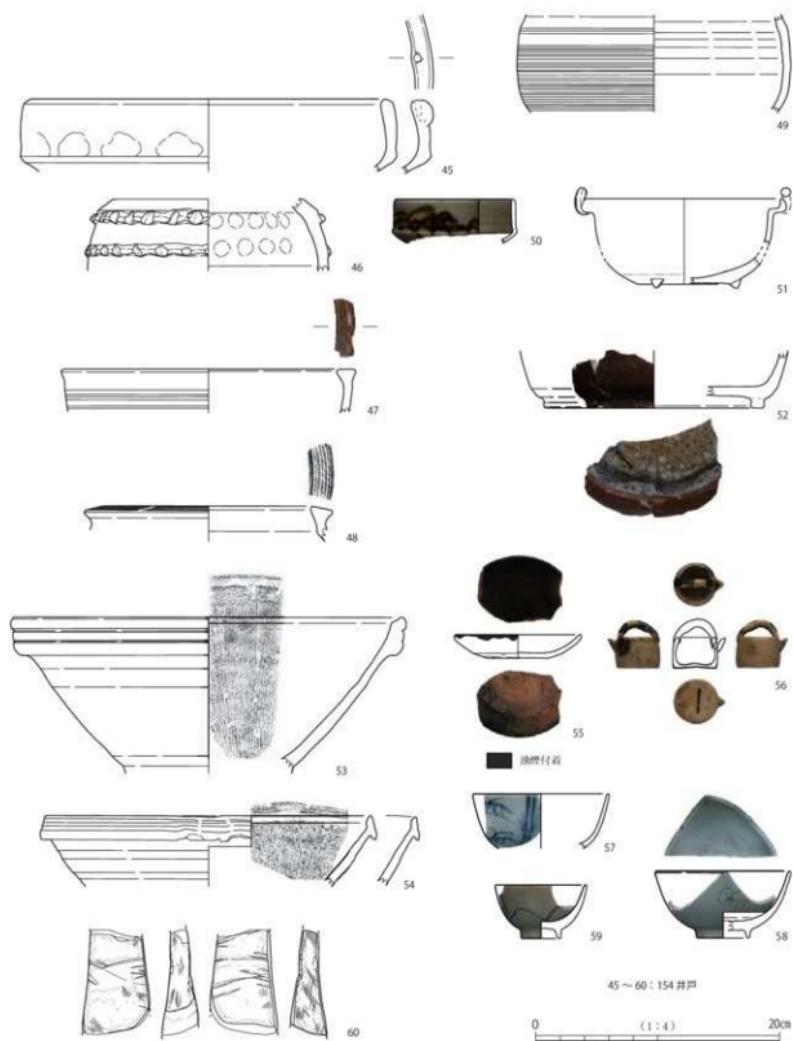


図29 井戸 出土遺物（3）



図30 井戸 出土遺物 (4)

68～70は肥前系陶器である。68は碗。灰釉がかけられる。胎土に黒色粒が顯著にみられる。69は皿。豊付から高台内は露胎となっている。高台内に兜巾がみられる。内面見込みは蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部に鉄漿を塗布する。内面見込みに2箇所、豊付に3箇所の砂目跡がみられる。17世紀後半の所産。70は鉢。内面は白化粧土を塗布する。17世紀末～18世紀初頭の所産であろう。

71・72は瀬戸・美濃系陶器。71は丸碗。高台脇から高台内は露胎で、それ以外には鉄釉がかけられる。18世紀後半頃の所産であろうか。72は腰錆茶碗である。18世紀後半から19世紀前半の所産である。73・74は京・信楽系陶器である。73は平碗。内面見込みに草花文を赤・緑彩で描く。18世紀中頃の所産か。74は鍋である。体部外面下3分の1～底部は露胎。それ以外には鉄釉がかけられる。底部外面にはススが付着。75は堺擂鉢である。口縁部内面に突帯を廻らせ、その上に沈線を1条廻らせる。擂目は9条+aが一単位の櫛描きである。突帯直下の擂目は軽くナデ消している。18世紀前半～中頃の所産であろう。76は備前焼壺か。77は土師質土器ミニチュア碗。極めて精良な胎土。ままごと道具の一種であろうか。78は土人形の鳩。表面には離型剤として使った雲母が多く付着する。

79は肥前系(波佐見)磁器白磁碗。口縁端部は端反となる。豊付以外は全面施釉。内面見込みは蛇の目釉剥ぎである。口縁部内面に黒色付着物がみられる。19世紀代の所産。80～89は肥前系染付である。80～82は丸碗。80は18世紀前半、81は18世紀後半、82は19世紀前半の所産である。83・84は外青磁染付筒形碗。内面見込みに五弁花文が描かれる。口縁部内面には四方襷文がみられる。18世紀後半の所産。

85は皿(波佐見)である。豊付は釉剥ぎ。内面見込みは蛇の目釉剥ぎである。18世紀後半～19世紀初頭の所産。86は蓋である。18世紀中頃～後半の所産であろうか。87は油壺である。体部は扁平で、肩が張るタイプ。豊付は釉剥ぎで、砂目積みの痕跡が残る。外面には草花文が描かれる。17世紀末頃の所産であろうか。88・89は水滴。88の底部内面には布目がみられる。17世紀後半～18世紀後半の資料。90・91は肥前系磁器白磁紅皿。施釉は雜である。外面は貝殻状の型押し成型。91の露胎となつた部分には紅が残る。高台内には梅花状の墨書記号がみられる。18世紀後半～19世紀初頭の所産であろう。92は中国製青花皿。口縁端部は端反となる。16世紀後半の資料。

93は須恵器环身である。胎土に黒色粒を多く含む。6世紀中頃の所産。94は円環状銅製品。口径は約7cm。他の部品と繋がって口縁部をなすものと考えられる。95はスギ材を用いた桶底。復元径は約18cmを測る。なお、図化はできなかったが、漆器椀には内外面に赤漆が塗布され、木地にはカツラが使用されている。

52溝を切って構築されていることや出土遺物の年代観から19世紀代の所産と思われる。

溝(図23・31～44・図版7)

調査区全域でほぼ南北を指向する幅約0.3mの短い溝を複数検出した。これらの溝の性格は不明であるが、上位層に近世～近代の耕作土が確認されることから、耕作に伴う飼溝である可能性を指摘することができる。こうした細い溝以外に、調査区東側Y=-49.160ライン沿いにほぼ南北を指向するものや調査区南側でN-80°-Wを指向する幅の広いものがみられた。

148溝(図23)

調査区北側中央やや西寄り、X=-134.270・Y=-49.168付近に位置する溝である。北側は121

土坑に切られる。溝は幅約 0.6 m、深さ約 0.05 m、検出長約 2.2 m を測る。断面形は浅い皿状を呈し、ラミナがみられる黄灰色シルト～極細砂が堆積している。また、溝内には多くの礫が廃棄されていた。

出土遺物には須恵器壺身や砥石がみられたが、溝の時期を示すものではない。遺構の切り合い関係から、16世紀以降、18世紀以前の所産と捉えられる。

120 溝（図 31・32・図版 7）

120 溝は調査区東側 Y = -49,160 ライン沿いに位置し、ほぼ南北にはしる。溝は幅約 3.2 m、深さ約 0.2 m、検出長約 12.5 m を測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。上層は直径 1 ~ 5 cm 前後の礫や地山由来の砂質シルトブロックを多く含み、非常に固く綿まとった灰黄色シルト混細砂、下層はやや粘性のある灰褐色極細～細砂混シルトである。なお、溝北側については黒褐色砂質シルトを埋土にもつ下位の落込みを掘削して築かれているため、埋土はその影響を強く受けている。

120 溝は X = -134,271 付近を始点として南へと延び、南側は X = -134,284 付近で 52 溝に切ら

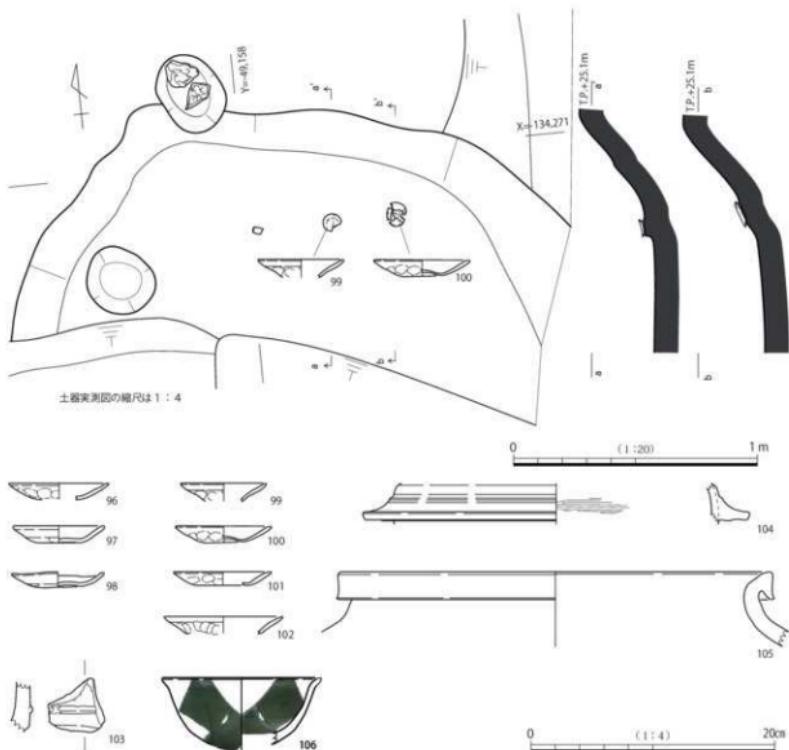


図 31 120 溝 遺物出土状況 平・断面図・出土遺物

れている。なお、52溝を越えて南側には延伸しない。また、溝埋没後は近世期に複数の井戸が掘削されている。溝の性格は明らかでないが、比較的広い幅を有することを勘案すれば区画を意図した溝と推察される。

120溝の北側底面では16世紀後半の所産と推定される土師質皿2枚が出土している。それら以外に瓦質羽釜・火鉢、常滑焼甕、青磁碗が出土した。図31-96~102は土師質皿である。98~102は所謂「へそ」皿である。96・100~102は黄橙色系胎土、それ以外は褐色系の胎土である。いずれも16世紀後半頃の所産である。103は瓦質火鉢（風炉か）。体部下位に断面蒲鉾状の突帯が1条廻る。15世紀代の所産であろうか。104は瓦質羽釜。15世紀後半の所産か。105は常滑焼甕である。口縁部縁帶は下方に垂下するが、上方には発達しない。所謂N字状口縁を呈する。14世紀後半~15世紀の所産か。106は龍泉窯系青磁碗である。口縁端部は端反。内面見込みは劃花文か。外面には蓮弁がみられない。13世紀中頃~14世紀初頭の所産であろう。

出土遺物の年代観から16世紀後半の所産と想定される。

171溝（図33）

調査区南側中央、X = -134.283・Y = -49.164付近に位置する溝である。後述する52溝と平行するように、N-77°-Wを指向し、東西にはじむ。溝は幅約0.2m、深さ約0.05m、検出長約2.6mを測る。溝東側は167井戸に切られる。断面形は浅い皿状を呈し、黄灰色極細砂混シルトを埋土にもつ。

出土遺物には肥前系陶器碗・皿、肥前系染付碗等がある。図33-107は肥前系陶器溝縁皿である。透明釉がかけられる。17世紀前半の所産。108は土師質土器ミニチュア風炉。極めて精良な胎土。表面には離型剤として使った雲母が多く付着する。ままごと道具の一種であろうか。109・110は肥前系染付碗。109は丸碗、110は筒丸碗である。ともに体部外面に一重網目文が描かれる。17世紀中頃~



図32 149 井戸・120 溝 断面図



図 33 171 溝 出土遺物

後半の所産。

出土遺物の年代観から 17 世紀代の所産であろう。

52 溝（図 34～44・図版 7・13・14）

調査区南端に位置し、N - 77° - W を指向して東西にはしる溝。溝は幅 2.5 ~ 3 m、深さ約 0.5 m を測る。検出長は約 17 m を測り、東西両側は調査区外へと延びる。溝東側北肩は 167 井戸に切られている。断面形は不整逆台形状を呈し、埋土は大きくみて 2 層に分かれる。上層は礫を多量に含む灰色系極細砂混シルトを基調としたものである。近世陶磁器や瓦等も多量に廃棄されており、人为的に埋め戻された堆積層と考えられる。下層は黄灰～褐色粘質シルトである。ラミナがみられなかったことから、止水状態であったと想定される。52 溝以南の 3 区側では耕作痕しか確認できなかったことから、この溝は耕作地と居住域を区画するための区画溝であったと推定される。

遺物は上層を中心に遺物収納コンテナ（内法：54 × 34 × 15cm）で 9 箱出土している。出土遺物には土師質土器、瓦質土器、肥前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前焼、丹波焼、肥前系染付、須恵器、瓦類、砥石、石臼、緑色チャート製火打石等がある。土器・陶磁器類の組成分類まで実施することができなかったが、肥前系染付碗・皿、肥前系陶器碗が顕著にみられた。

図 36～43・111～283 は上層出土遺物である。

図 36～111～126 は土師質土器である。111 は皿。黄橙色系の精良な胎土。赤色くさり礫を含む。18 世紀末～19 世紀初頭か。112 は羽釜。短い鍔が水平に延びる。鍔以下にはススが付着する。113～120 は焰烙。113～117 は胎土に赤色くさり礫が顕著にみられる。117 は口縁部外面に粘土を貼り付けて肥厚させ、端面に直径 0.4cm の貫通しない孔を穿つ。いずれも積山分類 D 類、大坂産の焰烙で 18 世紀代の所産であろう。118 は口縁部下半に突帯が廻る。突帯下にはススが付着。積山分類 F2 類で大和産であろう。18 世紀代の所産。119・120 は口縁部が肥厚し、外面下端が突帯状に突出して稜を成している。口縁部以下にススが付着。胎土には赤色くさり礫が顕著にみられる。積山分類 G 類、枚方産の焰烙で 19 世紀代の所産であろう。121～124 は火鉢類である。121 は把手が付くもの。把手には縱位の刻みがみられる。122・123 は口縁部を内側に肥厚させる。122 は口縁端面から口縁部内面にかけてススが付着する。123 は外面に赤色の化粧掛けが施され、体部上部に外面から穿孔された直径約 0.8 cm の円孔がみられる。124 には高い高台がつく。125 は五徳である。口縁端部内面に接して幅 2 cm 以上、長さ 3.5cm の平面長方形の粘土板を貼り付けて受けを作る。126 は十能の柄である。

図 36～127～132 は瓦質土器である。127～129 は火鉢類。127・128 は平面円形の火鉢。口縁部を内側に肥厚させる。ともに口縁部内面にススが付着。127 の体部外面上には櫛状工具による連続刺突文がみられる。128 は外面の剥離が著しく詳細は不明である。129 は平面方形を呈するもの。脚がつく。体部外面上には菊花状のスタンプ文が施される。130 は羽釜。酸化焰焼成のためか土師質になっている。口縁部外面上には浅い凹線が 2 条廻る。鍔以下はヘラ削り、内面はハケメが施される。131 は口径 5 cm の蓋。天井部や口縁部内面には炭素分がみられない。132 は脚か。底面は正五角形を呈し、「吉」

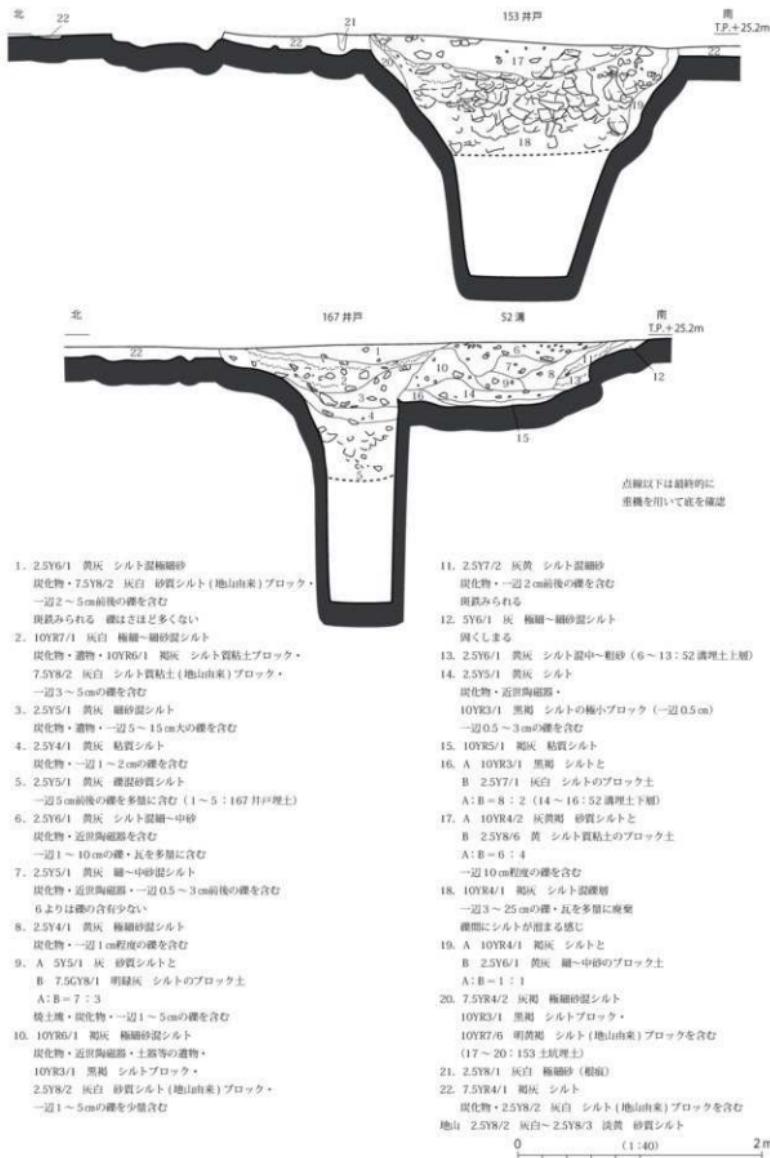
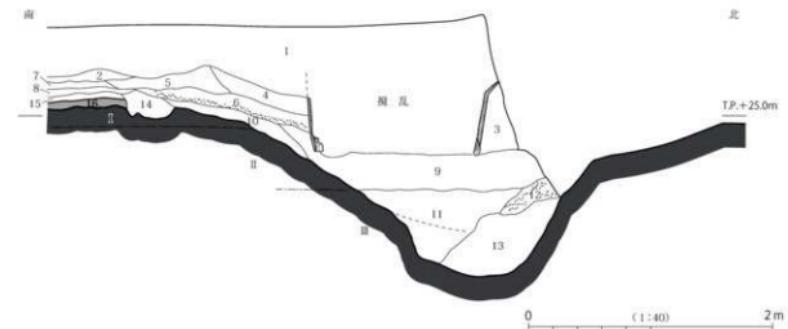


図 34 153・167 井戸・52 溝 断面図

の字が刻まれる。筒部は細かな面取り状になっており、断面多角形をなす。窓道具（I字形のトチン）にもみえるが性格は不明。

図37-133～159は肥前系陶器である。133～146は碗。133・134は小振りな碗である。133は京焼風小碗であろう。高台脇から高台内は露胎。134は体部外面下4分の1から高台内が露胎。それ以外は透明釉がかけられる。133・134は17世紀末～18世紀後半の所産であろう。135は天目碗。体部下位は露胎。それ以外には鉄釉がかけられる。17世紀初頭～前半の所産。136は高台が低く、高台内に兜巾がみられない。体部外面下半以下は露胎。それ以外には灰釉がかけられる。137は高台脇をしっかり削り、高台内に兜巾がみられる。体部外面下3分の1から高台内は露胎。それ以外には藁灰釉がかけられる。疊付に糸切痕が残る。内面見込み及び疊付に胎土目がみられる。136・137は16世紀末～17世紀初頭の所産であろう。138は体部外面下半が露胎。それ以外は灰釉がかけられる。139は高台脇から高台内が露胎。体部外面に2条の沈線が廻る。140・141は内外面に白化粧土で刷毛目文を描く。140の内面見込みは蛇の目釉剥ぎ。見込み釉剥ぎ部分と疊付に砂目痕がみられる。140は17世紀後半、141は17世紀末～18世紀後半の所産であろう。142～144は呉器手碗。142・143は疊付



1. 2.5Y3/1 黒灰 シルト 塗化物・埴土粒・レンガ・瓦・一辺3～5cmの縁などを含む 下部には粘膜状の2.5Y8/6 黄 砂質シルトがみられる (厚さ3cm程度) (近～現代の整地層) (第1層)
2. 5Y6/1 黒 極細粒混シルト 塗化物を多く、φ0.5mmの小礫を含む (近代の耕作土か) (第2層)
3. 2.5Y5/1～6/1 黄灰 シルト混極細～細砂 塗化物・10Y8/1 黄灰 砂質シルト (地山由来) ブロック～一辺1～5cmの縁を含む 斑状みられる
4. A 2.5Y7/1 黄白 極細粒混シルトと
B 10Y8/1 黄白 シルト質粘土 (地山由来) のブロック土
A : B = 7 : 3.
粘化物～一辺2～3cmの縁を含む
5. 2.5Y6/1 黄灰 シルト混極細～細砂
2.5Y8/1 黄白～10Y8/1 黄白 シルト質粘土 (地山由来) ブロック
10Y8/1 黄灰 シルト (16由来) ブロックを含む
6. 2.5Y5/1 黄灰 シルト混極細 一辺2～3cmの縁、近世陶磁器を僅かに含む ラミナ状に粗砂を含む 斑状頭著 (3～6 : 52溝理上)
7. 2.5Y7/1 黄白 極細～細砂混シルト 塗化物を含む 斑状頭著
8. 10Y8/2 黄粘 シルト混極細～細砂
9. 2.5Y4/1 黄灰 粘質シルト 塗化物・2.5Y7/1 黄白 極細砂ブロック・一辺5～10cmの縁・高植物を含む 縁は上部が多く含まれる
10. 2.5Y5/2 黄灰 極細砂混砂質シルト 10Y8/1 黄灰 シルト (16由来) ブロックを含む
11. 2.5Y5/1 黄灰 黏質シルト 塗化物・腐植物・φ0.5～1cmの小礫を含む 縁に於ては地から洗出した中～粗砂が比較的多く含まれる
12. 2.5Y6/2 黄灰～2.5Y6/1 黄灰 シルト～細砂 10Y8/1 明灰灰 粘土 (地山由来) ブロックを含む
13. 2.5Y5/1 黄灰 細～中砂混砂質シルト 塗化物・腐植物・一辺1～3cmの縁 (地山由来) を含む 下方ほど地山から洗出した細～中砂の含有が多い (9～13 : 第1面 157 土壌埋土)
14. A 10Y8/1～4/1 黄灰 シルト (16由来) と
B 2.5Y8/2 黄白 砂質シルト (地山由来) と
C 10Y8/1 黄白 シルト (15由来) のブロック土
A : B : C = 8 : 1 : 1
(第1面 51 清理土)
15. 10Y8/1 黄白 極細～細砂混シルト 黄鉄・Mn斑がみられる (7 : 8 : 15 : 第4層・中～近世の耕作土)
16. 10Y8/1～4/1 黄灰 シルト (土壌層) 斑駁がみられる (第4層)
地山 I 2.5Y7/1 黄白～2.5Y8/2 黄白 砂質シルト
II 2.5Y8/0 黄 砂質シルト
III 5BG7/1 明青灰 砂礫層 (段丘礫層か) 縁は一辺1～15cm程度

図35 52溝・157土坑 断面図

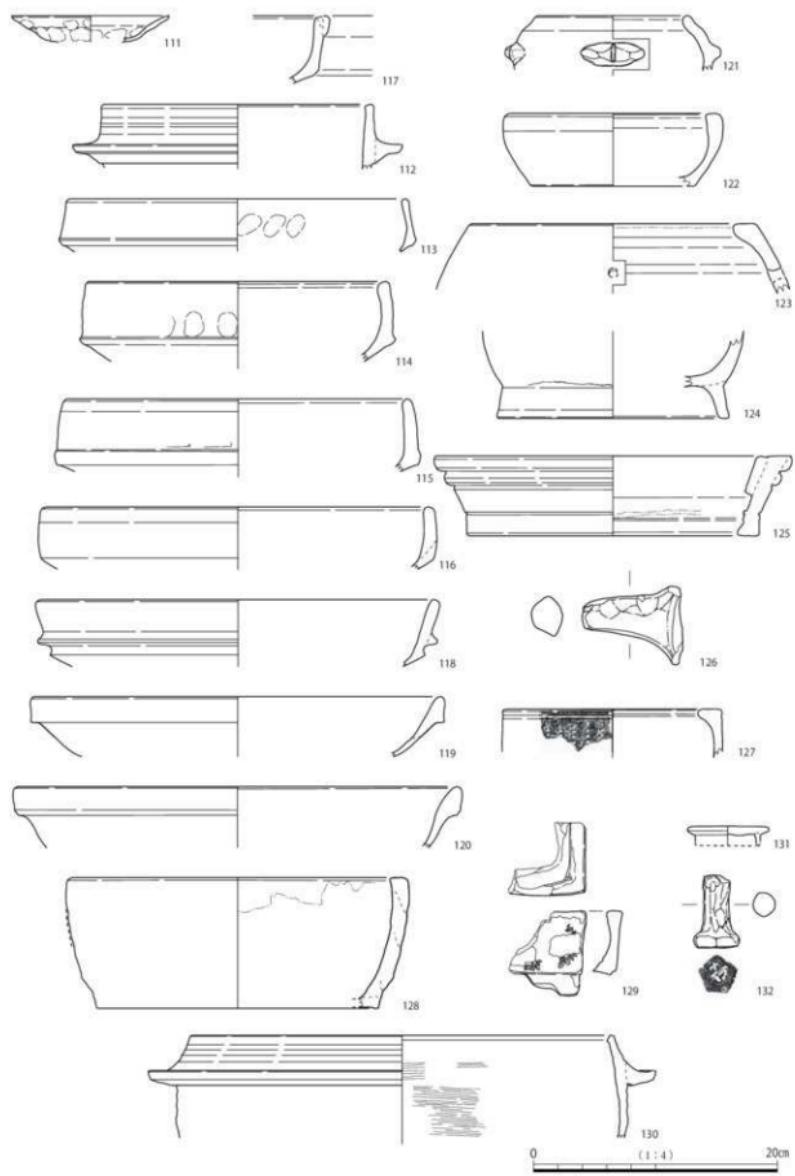


図36 52溝上層 出土遺物(1)



図37 52溝上層 出土遺物（2）

以外を施釉。142は豊付に、143は内面見込み及び豊付に砂目痕がみられる。144の高台は高いが高台内の削り込みは浅く、底部が厚い。体部外面下三分の1から高台内は露胎である。それ以外には施釉されるが、焼成不良であったため、釉はガラス化していない。142は17世紀後半、143・144は17世紀末～18世紀後半の所産であろう。145・146は京焼風碗。145は豊付以外を施釉する。146は高

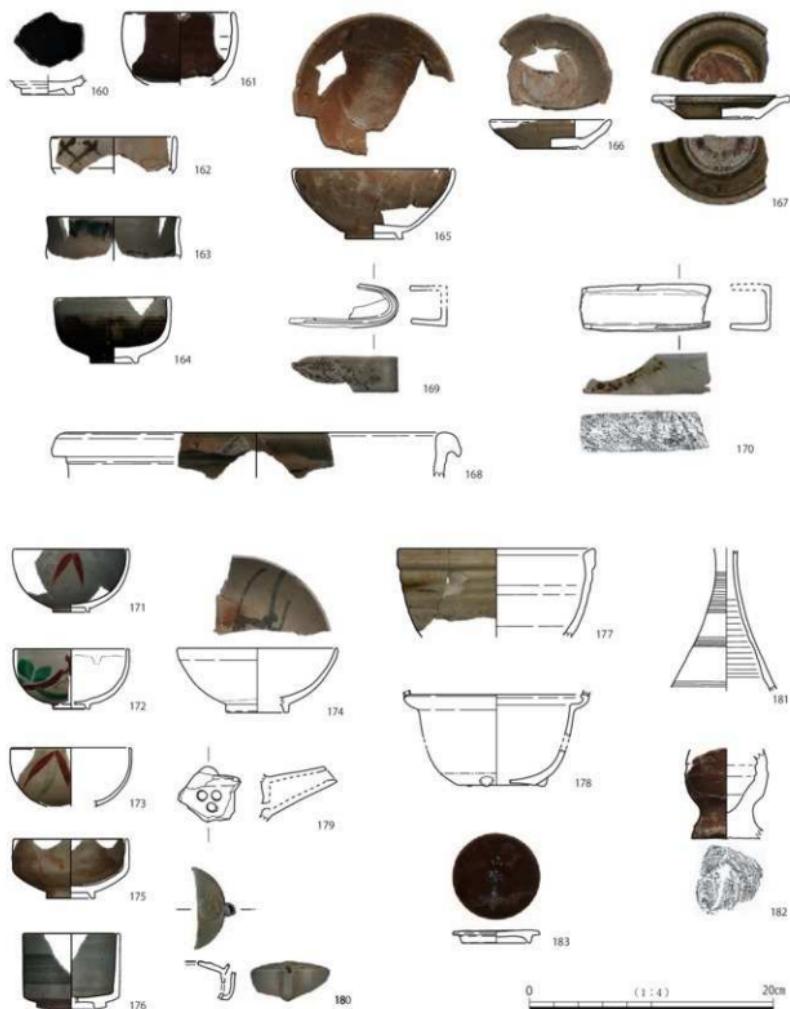


図38 52溝上層 出土遺物（3）

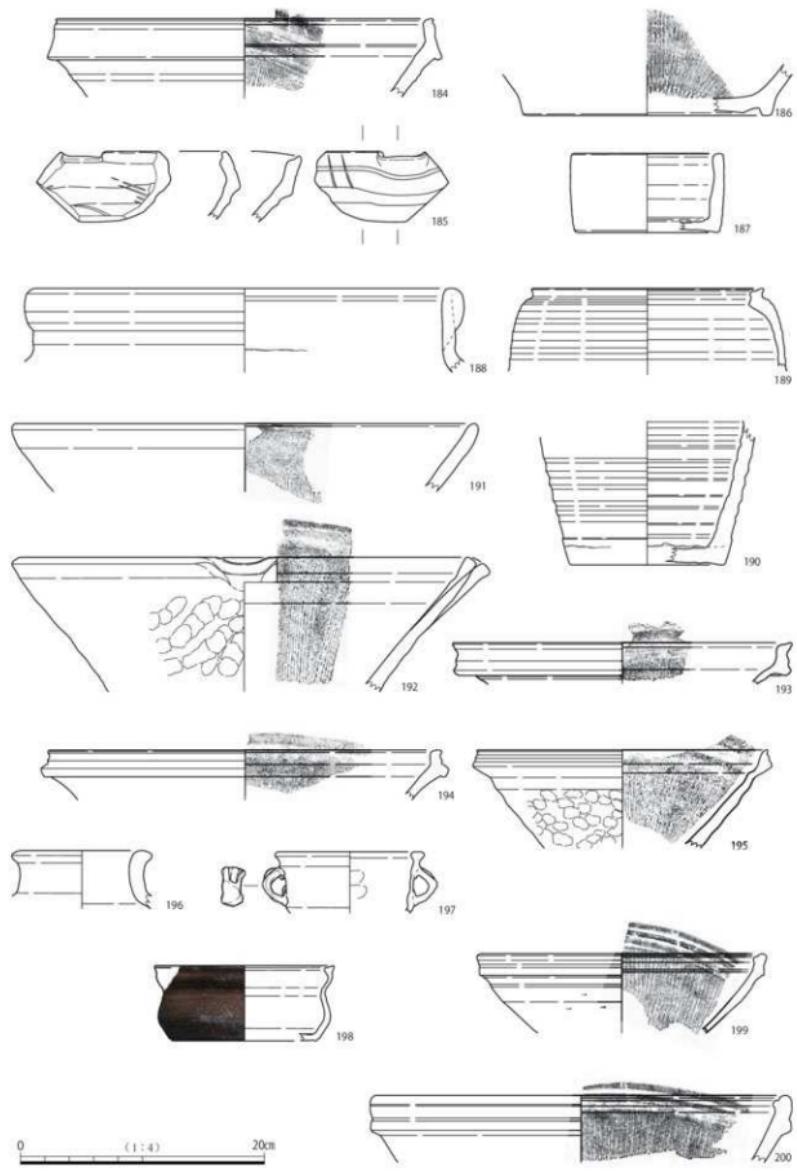


図39 52溝上層 出土遺物(4)

台脇から高台内が露胎である。ともに体部外面に山水文を描く。17世紀末～18世紀後半の所産。

147～153は皿である。147～150は平皿。いずれも高台脇から高台内は露胎。148は内面見込みに4箇所の胎土目が残る。149は内面見込み及び疊付に3箇所の砂目痕がみられる。150は内面見込みを蛇の目釉剥ぎする。内面は銅緑釉、外面は透明釉がかけられる。147は16世紀後半～末、148は16世紀末～17世紀初頭、149は17世紀前半、150は17世紀末～18世紀後半の所産。151は京焼風皿または平碗。内面見込みに山水文を描く。18世紀前半の資料か。152は内外面に白化粧土を塗り、刷毛目文を描く。17世紀後半の所産。153は輪花状口縁皿。内外面に透明釉をかける。17世紀末～18世紀後半の所産であろう。

154～156は鉢である。154は疊付から高台内は露胎。内面見込みに三島手の象嵌文様がみられる。また、内面見込みには直径1.5cmの砂目痕がみられる。17世紀代の所産。155は内面見込みを蛇の目釉剥ぎし、体部内面に白化粧土で刷毛目文を描く。内面見込み及び疊付に砂目痕がみられる。18世紀前半の所産。156の体部外面上半は白化粧土で刷毛目文を描き、内面は白化粧土塗りとなっている。焼成不良のため、釉はガラス化していない。17世紀末～18世紀前半の所産であろう。157は火入れ。腰がシャープさを保ちながら張る器形。内面は口縁部以下が露胎となり、外面は全面施釉。体部外面上半に白化粧土による文様が描かれる。17世紀後半の所産であろう。158は茶入（肩衝茶入）か。肩部に耳が付設されたものか。外面には鉄釉がかけられる。159は壺または甕。頸部外面以下に長石釉を流しかける。体部外面中位に櫛描きによる波状もしくは山形文が描かれる。内面には同心円文の当て具痕がみられる。

図38－160～170は瀬戸・美濃系陶器である。160～165は碗。160は天目碗である。高台脇はしっかりと削る。高台脇から高台内は露胎。内面には黒色系の鉄釉がかけられる。17世紀前半の所産。161は鉄釉丸碗。高台脇以下は露胎となっている。162は志野のような長石釉。口縁部外面に鉄釉で「メ」の字状の文様を描く。163は拳骨茶碗か。透明釉がかけられ、口縁部外面に呉須と鉄釉で文様を描く。18世紀後半の所産か。164は腰錆碗。疊付は露胎。それ以外は全面施釉。体部外面下半以下は鉄釉がかけられる。18世紀後半～19世紀中頃の所産であろう。165は刷毛目文碗か。高台脇から高台内は露胎。18世紀後半の所産か。166・167は皿。166は内禿皿。底部は甚窓底である。内面見込み及び底部外面は露胎である。167は折縁皿。底部は甚窓底である。内面見込み及び底部外面は露胎である。底部外面に重ね焼きの痕跡が残る。166・167共に16世紀末～17世紀初頭の所産。168は鉢。口縁部を折り返し、下に垂下させる。19世紀代の資料か。169・170は鬢水入れ。169・170共に型紙摺りの鉄絵を描く。169は菊花状の鉄絵。底面は露胎で、搔き取り状の調整痕がみられる。18世紀後半の所産であろう。

図38－171～180は京・信楽系陶器である。171～173は丸碗。高台脇から高台内は露胎。いずれも外面に赤・緑彩の上絵で171・173には笹葉文を、172は草花文を描く。但し、171の緑彩の遺存状況は悪い。18世紀中頃～後半の所産であろう。174は平碗。高台脇から高台内は露胎。焼成不良のため、発色が良くない。18世紀中頃の所産か。175は煎じ碗。高台脇から高台内は露胎。それ以外は透明釉がかけられる。18世紀中頃～後半の所産であろうか。176は半筒碗である。高台脇から高台内は露胎。体部外面中位に鉄絵が施される。18世紀後半の所産であろう。177は鉢（水指か）である。口縁部は外側を肥厚させる。体部外面下半は露胎。それ以外には薄く灰釉がかけられる。瀬戸・美濃系陶器の可能性も考えられる。178は鍋。底部は露胎。それ以外には鉄釉がかけられる。底部には三角錐

を呈する脚が付く。18世紀末～19世紀初頭の所産であろうか。179は急須注口。外面は乳白色の釉が、内面には透明釉がかけられる。180は土瓶（急須）。肩部に菊文と算木文を型打ちで施文する。内外面ともに透明釉がかけられる。

図38-181～183は産地不明陶器。181は鶴首型徳利。器壁は非常に薄い。胎土が赤く発色する。大谷焼であろうか。182は花生か。胎土は灰白色を呈する軟質のもの。外面には鉄釉がかけられる。底部外面には回転糸切り痕を残す。183は蓋。内面は露胎で、外面には鉄釉がかけられる。外面には長石釉で山椒煮と書かれている。

図39-184～190は備前焼である。184～186は擂鉢。184は口縁部を上方に拡張するが、外面の凹線は未発達。放射状に5条+a一単位の櫛描きによる擂目が施される。口縁部外面下端に重ね焼きの痕跡がみられる。15世紀後半の所産。185は口縁部を上方に拡張し、外面には細い沈線が廻る。口縁端部は上角を強くナデて、尖り気味に仕上げ、内面に段を有する。口縁部外面には2条の短沈線によるヘラ記号がみられる。186は底部。断面逆台形を呈する高台が付く。擂目は幅約2.8cmで、9条一単位の櫛描きである。17世紀後半～18世紀初頭の所産。187は筒型鉢（建水）である。口縁端部と底部外面周縁に重ね焼きの痕跡が残る。188は壺。口縁部は扁平な玉縁状を呈する。凹線はみられない。15世紀後半の所産である。189・190は壺か。189の口縁部は受け口状になり、口縁部内面に蓋受けが作られる。胎土には黒色粒が多くみられる。

図39-191～198は丹波焼である。191～195は擂鉢。191の口縁端部は丸くおさめ、内面にヘラ描きの擂目がみられる。長谷川分類I A1類、16世紀後半～17世紀前半の所産か。192は口縁部を四角くおさめる。擂目は放射状に幅2cm、9条一単位の櫛描きで施している。体部外面は左下がりの連続ユビオサエが残る。193・194は口縁部を上方に発達させ、外面に凹線が廻る。擂目は幅約2cmで、7条一単位の櫛描きである。長谷川分類IV A類、17世紀後半～18世紀中頃の所産であろう。195は口縁部を上方に発達させ、沈線が2条廻る。擂目は5条一単位の櫛描きである。長谷川分類IV B類、18世紀中頃～末の所産。196は壺である。口縁端部を緩やかに外反させる茶壺タイプか。口縁部外面に自然釉がかかる。17世紀中頃～後半の所産であろう。197・198は火入れ。197には半環状の把手が付く。把手の上半部は強く押さえられて、断面「M」字状を呈する。内面には把手を貼り付ける際のユビオサエ痕が残る。18世紀代の所産か。

図39-199・200は堺擂鉢。199の体部外面は回転ヘラ削り。擂目は幅2cm、7条一単位の櫛描きである。口縁部内面付近は擂目を軽くナデ消す。200の擂目は幅3cm、8条一単位の櫛描き。共に18世紀前半～中頃の所産であろう。

図40-201～222は肥前系染付碗である。201は鋸歯状の一重網目文が、202は緩やかな一重網目文が描かれる。203は高台内に元字文と思われる銘款がみられる。204は口縁部外面に細い沈線が3条廻る。205・206は器壁が薄く、呉須も鮮やかな上質な染付。207は高台内に太明年製の銘款がある。208・209は器壁が薄い上質な染付。高台内に崩れた太明年製の銘款がみられる。210は高台内に崩れた太明年製の銘款がある。211は器壁が薄い上質の染付。冰裂文が描かれる。高台内の銘款は角福か。212の高台内の銘款は渦福。213は二重網目文が描かれる。高台内の銘款は昆虫文か。214は雨降り文が描かれる。高台内にはかなり崩れた太明年製の銘款がみられる。215は高台内に銘款をもつが不明である。216の内面見込みは蛇の目釉剥ぎされる。217は高台内に崩れた渦福の銘款がある。218の内面見込みは蛇の目釉剥ぎされ、外面には梅樹文が描かれる。219は端反碗。内面見込みは蛇の目釉剥

ぎされ、五弁花が描かれる。220は広東碗。内面見込みに変形字銘もしくは草花文を描く。221・222は外青磁染付である。221は筒碗。口縁部内面に四方擗文がみられる。222は蓋付碗か。内面見込みに五弁花が描かれる。



図40 52溝上層 出土遺物（5）



図41 52溝上層 出土遺物（6）

210・212・213・218・219は波佐見焼であろう。201は17世紀前半、202・203・205・206は17世紀後半、210・212・213は17世紀後半～18世紀前半、204・208・209・214～218は18世紀前半、207・211は18世紀代、220は18世紀後半～19世紀、219は19世紀代の所産である。

図41-223は肥前系磁器白磁皿である。体部外面下半は露胎。内面見込みは蛇の目釉剥ぎである。17世紀後半の所産。224～231は肥前系染付皿。224は内面見込みに五弁花が描かれる。225は菊花形皿。口縁部は鉄錆により口紅を施す。227・228は波佐見焼か。230の内面は施釉されず、内面見込み全体に砂が付着する。底部は甚簡底状の蛇の目凹形高台である。231の口縁部は花弁状を呈し、口縁端部は緩やかな端反となる。225は17世紀中頃、224・227は17世紀後半～18世紀前半、231は18世紀前半、228・230は18世紀代の所産。

図41-232～236は染付小壺である。232は疊付及び高台内は露胎。体部外面には錆を入れ、寿文を描く。233の疊付は釉剥ぎで、一部に砂が付着する。235は扁平な器形。釉がやや青味がかる。波佐見焼であろう。236は低い高台が付く。高台内に崩れた^太^四年製の銘款がみられる。232は17世紀前半、233・235・236は17世紀後半～18世紀前半、234は18世紀代の所産。237は肥前系磁器白磁猪口である。口縁部は型打成形によって花形に作られる。17世紀後半の所産。

図41-238は肥前系磁器白磁蓋である。口縁端部から口縁部内面は露胎。摘みは剥落する。鉢の蓋であろうか。17世紀末～19世紀後半の所産。239は染付蓋。口縁端部は露胎。熨斗形の摘みが付く。鉢の蓋である。18世紀代の所産。240は肥前系磁器白磁合子または蓋付鉢。体部外面は型打により算本文が施される。高台は輪高台となる。内面見込みは釉剥ぎ。部分的に外面に赤・緑彩がみられる。18世紀代の所産か。241は染付蓋付鉢。口縁端部及び内面は釉剥ぎである。18世紀代の所産か。242・243は染付鉢である。243は口縁部を外方に折って折縁となる。17世紀代の所産か。244・245は肥前系磁器青磁火入れ。244の高台脇から高台内及び内面は露胎。高台は輪高台となる。内面見込みに重ね焼きの痕跡が残る。17世紀後半の所産であろうか。245は脚部。内面は露胎である。

図41-246～250は壺類である。246は染付瓶。胎土、呉須共に茶色系に発色する。247は染付小瓶である。ままごと道具の一種か。248は肥前系磁器白磁花生か。高台、疊付は釉剥ぎ。内面は露胎。249・250は油壺である。249は体部が扁平で重心を下にもつ。頸部は短い。17世紀末～18世紀前半の所産。250は腰が低く、横に張り出す器形。17世紀後半の所産であろう。

図41-251～253は仏飯器である。251は染付。高台内は露胎である。17世紀後半～末の所産。252は白磁。高台から高台内は露胎。高台内の例り込みは浅い。253は青磁。疊付は露胎。高台内の例り込みは浅く、施釉する。252・253は17世紀末～18世紀後半の資料。254は肥前系磁器白磁紅皿。施釉は難である。外面は貝殻状の型押し成型。18世紀後半の所産であろう。

図41-255～257は輸入磁器である。255は中国製白磁皿。疊付は釉剥ぎする。口縁端部を緩やかに外反させる端反皿。18～19世紀の所産である。256は中国製青花皿である。底部は甚簡底。疊付は釉剥ぎされる。15世紀後半～16世紀前半の資料。257は龍泉窯系青磁碗。内面見込みに印刻花草文が施される。高台内は蛇の目釉剥ぎされる。14世紀初頭～15世紀前半の所産。

図42-258～262は軟質施釉陶器である。258はミニチュア鉢。柿釉がかけられる。ままごと道具の一種か。259・260は受付皿（灯明皿の受け台）か。共に透明釉・緑釉がかけられる。18世紀代の所産か。261は醤水入れ。柿釉がかけられる。262は翁面である。表面には離型剤として使った雲母が付着する。裏面は露胎で、表面に柿釉がかけられる。土製玩具の芥子面であろう。263・264は

土人形。263は組相撲を模したものか。264は仏像か。表面には離型剤として使った雲母が付着する。265は土製独楽である。芯を通す孔は直径0.2cmである。表面には離型剤として使った雲母が付着する。

図42-266～270は須恵器である。266は蓋か。天井部外面に櫛状工具による連続押引文が施される。6世紀前半の所産か。267は長頸壺か。肩部に沈線が1条廻る。268・269は高环脚。268は直径1cmの円形透かしを3方向にもつ。外面はカキメを施す。269は長方形透かしを3方向にもつ。6世紀後半～7世紀前半の所産。270は甕。口縁部は折り返して玉縁状に仕上げる。肩部外面にはカキメを施す。内面には同心円の当て具痕がみられる。6世紀後半の所産であろう。いずれも胎土には黒色粒を多く含む。271は円筒埴輪である。断面「M」字状を呈し、下端幅約1.5cmのタガが1条みられる。タガの下位はタテハケを施している。焼成は堅締で須恵質に近い。6世紀前半頃の資料であろうか。

図42-272は瓦質土管である。復元径は15cmを測る。凹面には布目がみられる。凹面の玉縁連結部際には幅0.2cm程度の棒状工具によるタタキが残る。273は三巴文軒丸瓦。274は橘文唐草文軒平瓦。頭の調整は横位のナデを施す。中心飾りは三葉文で、三葉文の下部に萼を有する。萼の先端は二又に分離する。1682～1724年に使用したとされる大阪市住友銅吹所跡出土瓦に類似する。275は平瓦。凸面には繩タタキ、凹面には布目が残る。276は丸瓦。凸面にはナデを施し、内面には布目が残る。277～280は凸面に斜格子目タタキを施す平瓦である。凹面はナデを施し、部分的に布目が残る。277・279は土師質、278・280は須恵質である。

図43-281～283・374(図版14)は石製品。281は硯である。海部分や硯縁を欠失する。擦痕や敲打痕がみられることから、硯としての機能終了後に砥石へ転用したものと推察される。粘板岩製。282・374は砥石。282の肌理は非常に細かい。裏面は剥落しており、確認できる砥面は1面である。側面には成形時の擦痕が残る。仕上げ砥であろう。374は使用により中央部が大きく減じる。肌理は細かく、仕上げ砥と考えられる。282は頁岩製、374は粘板岩製。283は砂岩製の茶白下白である。

図43-44-284～321は下層出土遺物である。284～289は土師質皿。284の外面はユビオサエが顕著である。286～289は所謂「へそ」皿である。286・287は口縁部に油煙が付着。灯明皿に使用されたものであろう。289は二次焼成を受けたのか淡い橙色を呈する。外面にはユビオサエが顕著にみられ、爪痕が残る。284～288は黄橙色系胎土で、いずれも精良な胎土である。288は16世紀後半、285・289は17世紀前半～中頃、286・287は17世紀中頃～後半の所産。

図43-290～293は瓦質土器である。290～292は羽釜。290は体部中央から口縁部に向けて内湾しながら立ち上がる。口縁端部は上方に向かい直立気味に小さく突出する。口縁部外面には2条の沈線が廻る。大和型羽釜である。15世紀後半～16世紀前半の所産。291は口縁部外面に段がみられる。鋤柄分類C群IV-3類、15世紀後半の所産。292は口縁部外面に四線が3条廻る。鋤柄分類D群1類か。15世紀後半～末の資料であろう。293は甕。口縁部を短く外方へ折り返す。摩滅著しく調整は不明。鋤柄分類II群1類か。14世紀後半頃の資料であろうか。

図43-294～304は肥前系陶器である。294～298は碗。294は天目碗である。高台脇以下は露胎。口縁部には鉄釉が、体部には黒褐釉がかけられる。17世紀前半の所産である。295は体部下半以下が露胎である。それ以外には灰釉がかけられる。高台内には兜巾を残す。16世紀末～17世紀前半の所産。296は端反碗。体部下半以下が露胎。それ以外には透明釉がかけられる。高台内は削りに伴う縮緬皺が顕著で、兜巾を残す。内面見込みには深い茶溜りがみられる17世紀前半の所産であろうか。297は内外面に白化粧土で刷毛目文を描く。内面見込みは蛇の目釉剥ぎされ、釉剥ぎ部分にも刷毛目文が施され

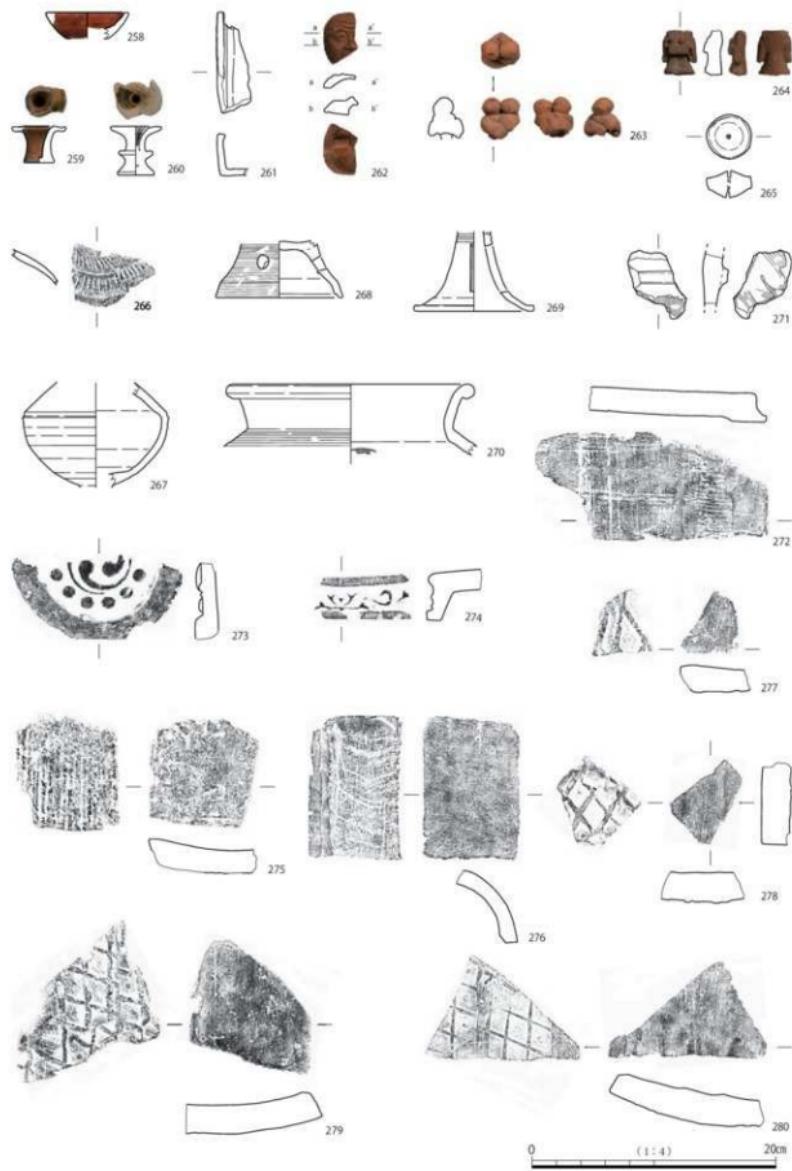


図42 52溝上層 出土遺物(7)

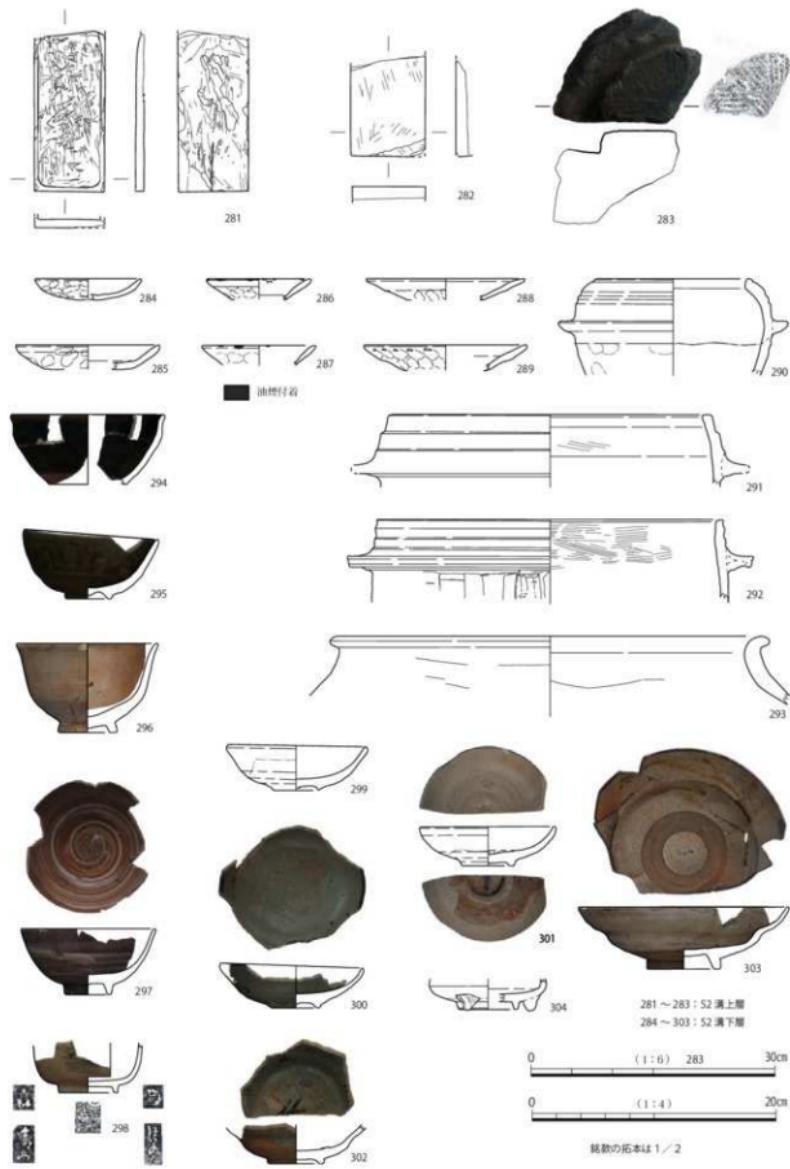


図43 52溝上層 出土遺物(8)・52溝下層 出土遺物(1)

る。豊付に砂目痕がみられる。17世紀末～18世紀後半の所産。298は京焼風碗。高台及び高台内は露胎である。高台内に「柴」の銘款がみられる。これ以外に「森」「清水」等の銘款がある。17世紀後半～末の所産。

299～303は皿。299・300の高台は低く、幅が狭い。高台内には兜巾を残す。体部外面下半以下は露胎で、それ以外は灰釉がかけられる。300の口縁端部には鉄釉を施し皮鯨手となり、内面には鉄絵が描かれる。所謂絵唐津である。301は高台内に兜巾を残し、兜巾上に「一」字状の墨書記号がみられる。体部下半以下は露胎。内面見込みには胎土目が1箇所みられる。302は体部外面下半以下が露胎で、それ以外には灰釉がかけられる。内面には鉄絵が描かれる。所謂絵唐津である。303は体部下半から高台内は露胎、それ以外には灰釉がかけられる。内面見込みは蛇の目釉剥ぎ。299・300は16世紀末、301・302は16世紀末～17世紀前半、303は17世紀末～18世紀後半の所産。304は火入れである。内面及び高台脇から高台内は露胎で、それ以外は透明釉がかけられる。3方向に脚が付くものであろう。

図44～305は瀬戸・美濃系陶器天目碗である。16世紀後半～末の所産。306・307は備前焼である。306は種壺か。頸部は短く、やや外方に向けて立ち上がる。口縁端部は玉縁状になる。17世紀前半～中頃の所産か。307は水屋甕。頸部外面に環状の把手を模したレリーフを貼り付ける。308～312は丹波焼である。308は擂鉢である。口縁部を上方に発達させ、外面に凹線が廻る。擂目は9条一単位の櫛書きである。長谷川分類I A3類か。17世紀中頃～末の所産であろうか。309は壺。外面に自然釉がかかる。17世紀前半の所産であろうか。310は甕。口縁部を「く」の字状に折り曲げる。口縁端面には凹線が1条廻る。14世紀中頃の所産か。311は壺であろう。底部外面に自然釉が付着する。内面は部分的にユビオサエの痕跡を残すが、丁寧にナデ消している。312は火入れ。外面に自然釉がかかる。煙管でも打ちつけたのか、口縁端部には細かな欠損が多くみられる。

図44～313～317は肥前系染付碗である。313の外面には緩やかな一重網目文が描かれる。314の外面には鋸歯状の一重網目文が描かれる。315は器壁が薄い上質なもの。高台内に銘款があるが不明。316の内面見込みは蛇の目釉剥ぎ。317は内面見込みに砂目痕がみられる。313～315は17世紀後半、317は17世紀後半～18世紀前半、316は17世紀末～18世紀前半の所産。

図44～318は土師質ミニチュア羽釜である。ままと道具の一種か。319は土鉢。内部に土製の玉が入る。320は須恵器甕。口縁部から頸部にかけて内外面共に自然釉がかかる。外面は平行タタキが施される。内面には同心円文の当て具痕が残る。321は朝顔形埴輪の肩部。タガ上面は欠失。タガ下端幅は2.5cmを測る。焼成はあくまで軟質である。外面には7条/cmのハケメが施される。

出土遺物の年代観や167井戸・157土坑との切り合い関係から、17世紀中頃には掘削されて18世紀後半には完全に埋め戻されたものと推定される。

157土坑（図35・44・図版7）

52溝の西側底面、X = -134,282・Y = -49,171付近に位置する土坑である。土坑西側は調査区外へと広がるため、全容は不明である。土坑は幅約2.4m、深さ約1.2m、検出長は約5.5mである。断面形は不整逆台形を呈し、埋土は黄灰色粘質シルトを主体として5層に分かれる。

52溝は157土坑が埋没してから掘削されていることから、52溝の前身となる溝であった可能性が想定される。出土遺物には肥前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前焼、瓦質羽釜等がある。

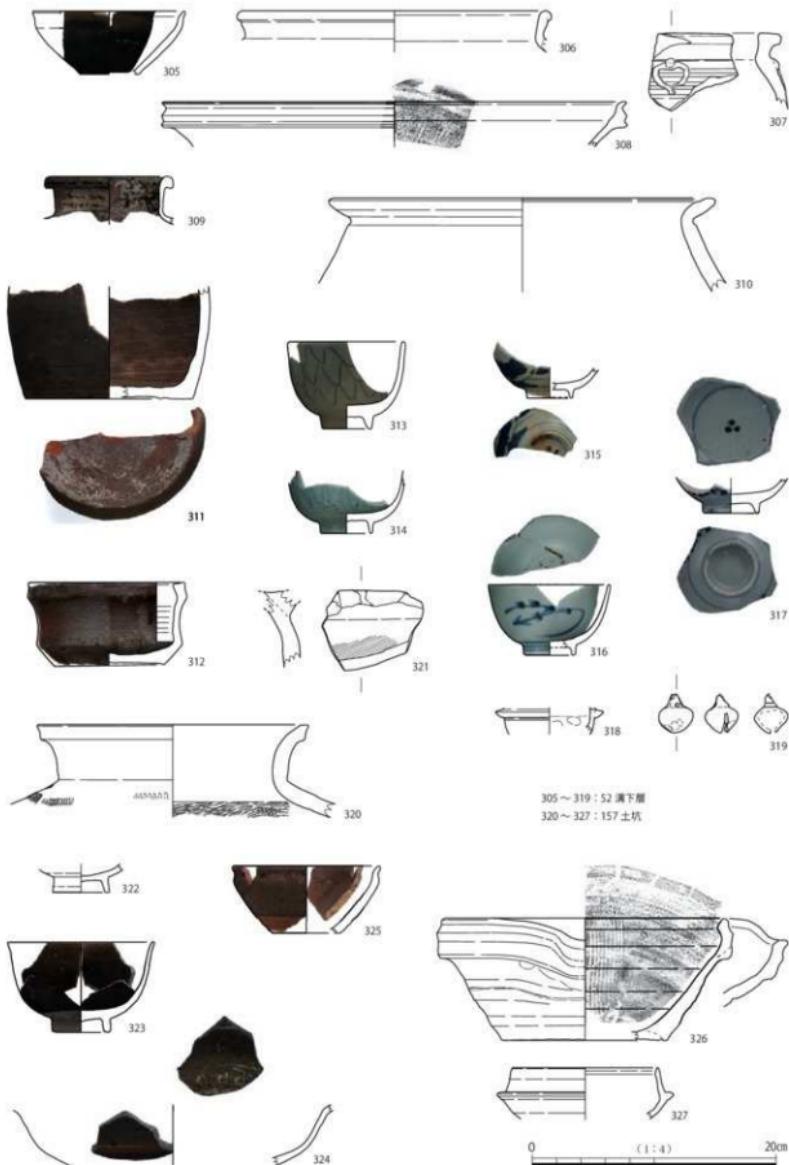


図 44 52 漢下層 出土遺物 (2)・157 土坑 出土遺物

図 44 – 322 ~ 324 は肥前系陶器である。322・323 は碗。322 は高台が高く、高台内に兜巾を残す。外面は露胎で、内面は灰釉がかかる。323 は高台が高く、高台内に兜巾を残す。高台脇から高台内は露胎で、それ以外は鉄（飴）釉をかける。322・323 は 17 世紀中頃～末の所産。324 は皿。体部外面下半は露胎。それ以外には灰釉がかけられる。内面見込み及び口縁部内面に三島手の象嵌文様（印花文）がみられる。

325 は瀬戸・美濃系陶器天目碗。高台脇以下は露胎で、それ以外には鉄釉がかけられる。16 世紀後半の所産。326 は備前焼擂鉢である。口縁部を上方に拡張し、外面には凹線が 2 条廻る。口縁端部は上角を強くナデて、尖り気味に仕上げ、内面に段を有する。放射状に幅 2.8cm で、9 条一単位の櫛描きによる擂目が施される。口縁部外面下端に重ね焼きの痕跡がみられる。17 世紀初頭の所産。327 は須恵器坏身。6 世紀中頃の所産。

一部に新しい時期の資料もみられたが、出土遺物の年代観や 52 溝との切り合い関係から、16 世紀後半～17 世紀初頭には掘削され、17 世紀中頃には埋没したものと推察される。

(2) 第 2 面の遺構と遺物 (図 45 ~ 49・図版 8)

小穴 (図 46)

直径 0.2 ~ 0.5 m の平面円形や楕円形を呈する小穴を 10 基余り検出した。このうち 5 基 (200 ~ 204 小穴) は 173 土坑の南～西側肩部に沿って掘削されている。他は散在的に分布しており、建物を復元するには至らなかった。小穴からは出土遺物がほとんど確認できず、また基盤層（地山）上面で検出したこともあり、個別の掘削開始面を明らかにすることができなかった。

小穴の埋土は褐灰～灰褐色シルトを基調とし、地山由来の黄色系シルトや砂質シルトブロック、黒褐色シルトを含んでいる。

上位面で検出した小穴のように礎石や根石を持つ例や柱痕跡を有する例がみられなかつたため、当面検出の小穴に関しては性格が明らかではない。

土坑 (図 46 ~ 48・図版 8)

調査区全域で、散在的に分布する平面円形や長楕円形、隅丸方形を呈する土坑を 8 基検出した。土坑からは出土遺物がほとんど確認できず、また基盤層（地山）上面で検出したこともあり、個別の掘削開始面を明らかにすることできなかつた。

177・178 土坑 (図 46)

調査区北西側、X = -134.273・Y = -49.171 付近に位置する土坑。177 土坑は平面楕円形を、178 土坑は円形を呈する。ともに南側を上位面の遺構によって切られている。

177 土坑は長径約 0.6 m、深さ約 0.1 m である。断面形は不整逆台形を呈し、埋土は灰褐色極細砂混シルトで地山由来のシルトブロックや炭化物、焼土粒を含む。出土遺物は土師器細片が出土したのみで時期は不詳である。178 土坑は直径約 0.5 m、深さ約 0.05 m である。断面形は浅い皿状を呈し、褐灰色極細砂シルトと黒褐色シルトのブロック土である。出土遺物はみられず時期は不詳である。

180・181土坑(図46)

177・178土坑の南側約1.5mに位置する土坑である。180土坑が181土坑を切っている。両土坑の南側は擾乱によって切られている。180土坑は平面円形を、181土坑は現状で扇形を呈する。

180土坑は直径約0.3m、深さ約0.1mである。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐灰～黒褐色シルトで地山由来の砂質シルトブロックを含む。181土坑は浅い皿状を呈し、深さは約0.05mである。埋土は褐灰色シルト混極細砂である。遺物が出土しておらず時期は不詳である。

176土坑(図46)

調査区南東側、 $X = -134,280$ ・ $Y = -49,157$ 付近に位置する土坑。平面形は溝状を呈し、土坑北東端を第1面の149井戸に、南西端を150井戸に切られている。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は2層に分かれる。上層は黒褐～褐灰色極細砂混シルトで地山由来ブロックを含む。下層は褐灰色極細～細砂混シルトである。断面図ではこの下位に浅黄色シルト混細砂を表現しているが、地山が擾乱を受けたものと判断される。遺物は出土していない。土坑の形状や埋土の状況から、176土坑は後述する落込みと同質であると考えられる。

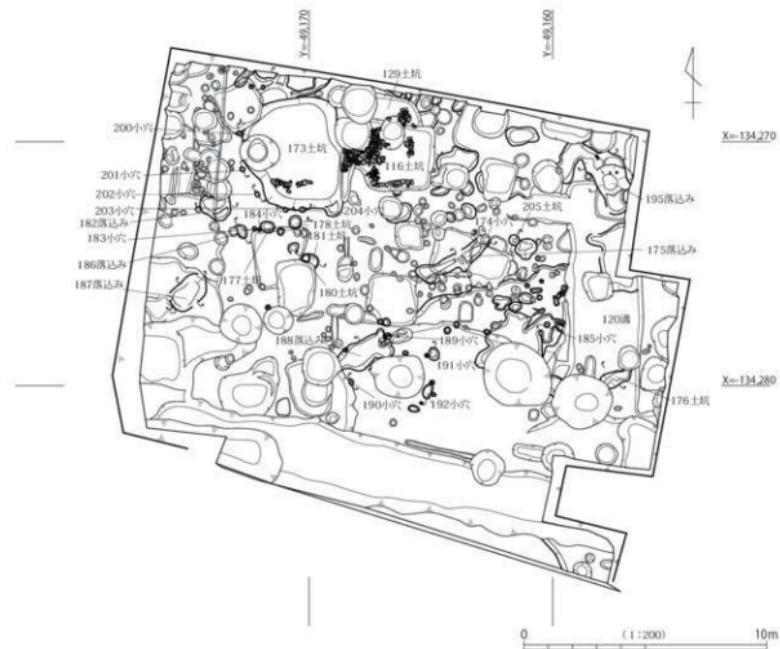
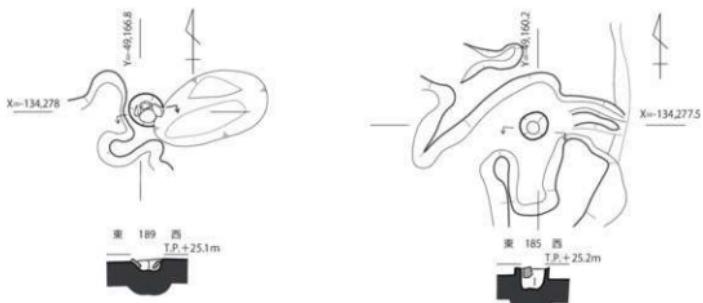


図45 2区 第2面 平面図



1. 10YR5/1 西灰 シルト混細砂
炭化物・一辺0.5cmの塊を含む
頭蓋みられる
1. 10YR5/2 西灰 シルト混細砂
炭化物・10YR8/1 灰白 シルトブロック・
一辺0.5~5cmの塊(地山由来)を含む
頭蓋みられる
10YR3/1 黒闇 シルトの上から
振り込まれたものなので第1面積算



1. 10YR4/1 西灰 シルト
炭化物・一辺0.5~1cmの小塊
(地山由来)を含む
比較的固くしまる
1. A 7.5YR5/1 西灰 シルトと
B 10YR3/1 黒闇 シルトのブロック土
A:B = 4 : 6
2. 10YR6/1 西灰 粗粒混シルト
地山 10YR7/6 明黄闇 混凝シルト
1. 10YR3/1 黒闇 シルト
10YR8/1 灰白 シルトブロックを含む
2. A 10YR3/1 黒闇 シルトと
B 10YR5/1 西灰 極細砂と
C 10YR7/6 明黄闇 砂質シルト
(地山由来)のブロック土
A:B:C = 4 : 5 : 1
一辺2cmの塊(地山由来)を含む

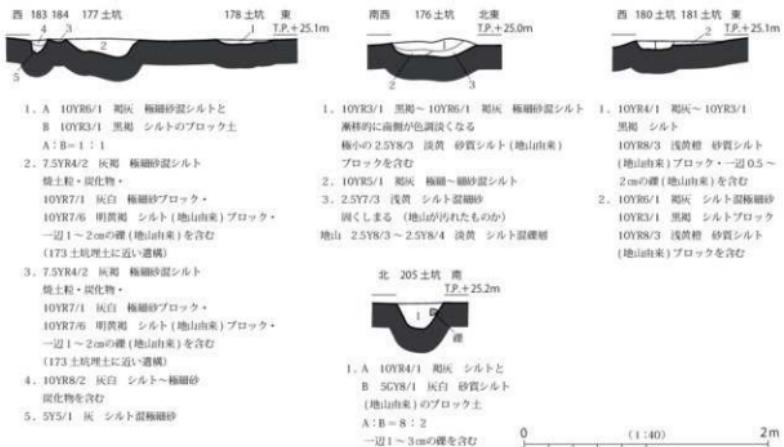
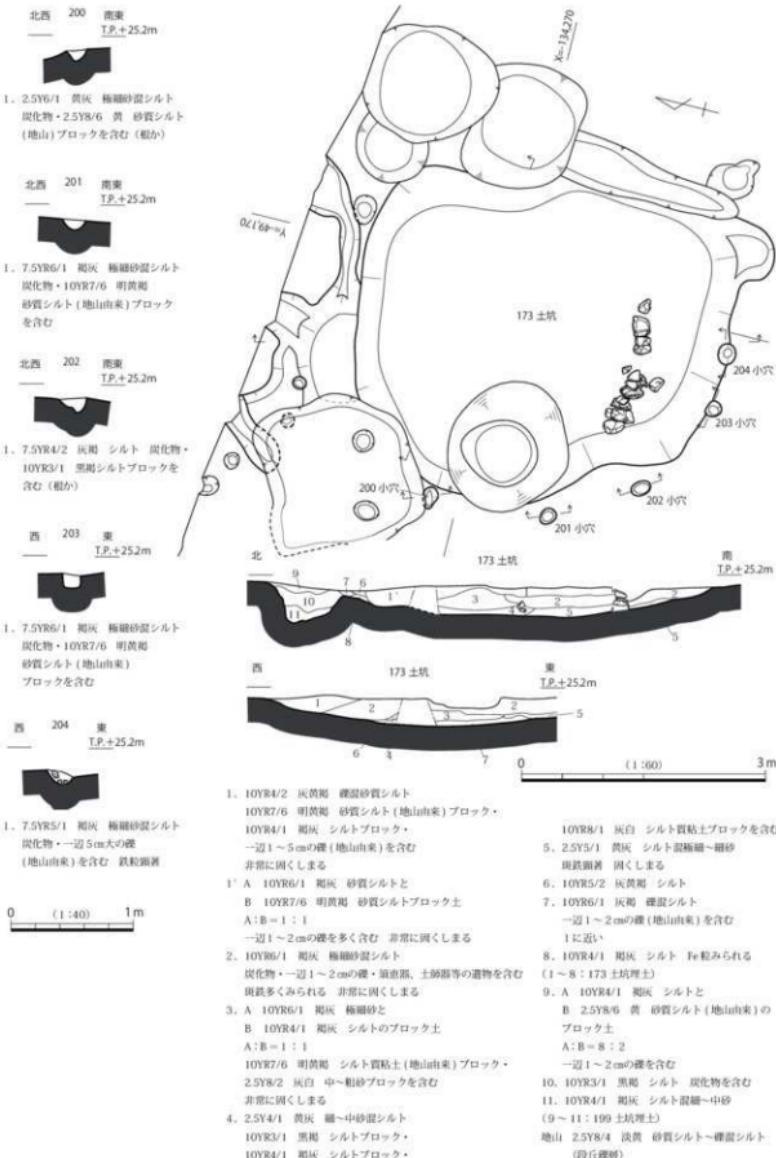


図46 小穴・土坑 平・断面図



205 土坑 (図 46)

調査区中央やや東側、 $X = -134.274$ ・ $Y = -49.162$ 付近に位置する土坑。平面円形を呈する。直径は約0.4m、深さ約0.2mである。断面形は深い逆台形を呈し、埋土は褐灰色シルトと地山由来の灰白色砂質シルトのブロック土である。遺物が出土しておらず時期は不詳である。

173 土坑・200～204 小穴 (図 47・48・図版 8)

調査区北西側、 $X = -134.270$ ・ $Y = -49.170$ 付近で検出した平面隅方形を呈する土坑である。検出規模は南北約4.6m×東西約4mを測る。土坑東側は第1面の121 土坑や148 溝に、西側は74 井戸に切られている。土坑底面は平坦ではなく中央部が緩やかに窪み、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は非常に固く縮まっており、褐灰～黄灰色砂質シルトや砂混シルトを基調としたブロック土が堆積して

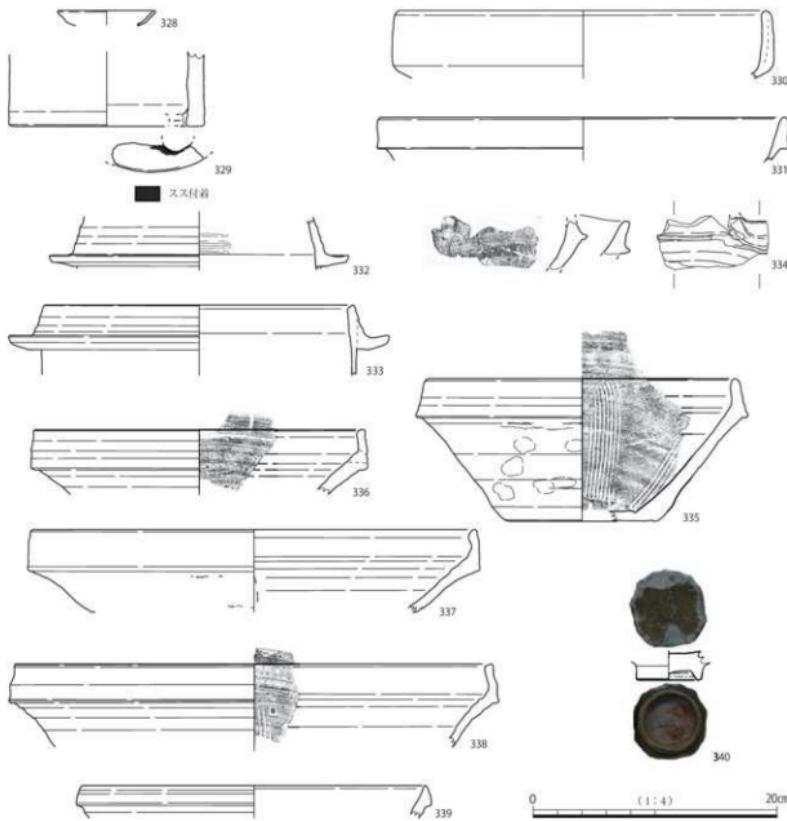


図 48 173 土坑 出土遺物

いる。

土坑南側には底面からやや浮いた状態で一辺 10 ~ 20cm の礫を用いて 2 段に積んだ石列を検出したが、性格は不明である。

土坑西側及び南側には、平面円形または梢円形を呈する 200 ~ 204 小穴が周囲を囲むように 5 基みられる。小穴は直径約 0.15 ~ 0.2 m、深さ約 0.1 m を測る。埋土は褐灰~灰褐色シルト~極細砂混シルトである。小穴は概ね芯々距離で 1.2 ~ 1.5 m 間隔で配置されることから、簡易な屋根が掛けられていた可能性が想定できよう。



図 49 落込み 断面図

土坑の性格は判然としないが、簡易な屋根が掛けられていた可能性を有することから、小屋状の簡易な施設を想定できるかもしれない。

173 土坑の出土遺物には土師質土器、瓦質土器、備前焼、青磁碗、須恵器がある。

図 48 - 328 ~ 331 は土師質土器である。328 は皿である。黄橙色系の精良な胎土。二次焼成を受けたのか部分的に淡赤色を呈する。329 は火鉢か。胎土は長石やチャート、赤色くさり礫を含みやや粗い。底面には復元直径約 2cm の円孔が 1 つ穿たれている。内面には厚さ約 1mm のタール状の黒色物質が付着する。330・331 は焰烙。330・331 の胎土には赤色くさり礫が目立つ。330 は積山分類 D 類、大坂産の焰烙で 17 ~ 18 世紀代の所産であろう。331 は口縁部が肥厚し、外面下端が突帯状に突出して稜を成している。口縁部以下にスヌが付着。積山分類 G 類、枚方産の焰烙で 19 世紀代の所産であろう。他の出土遺物の検討から、330・331 は混入品と考えられる。

332・333 は瓦質羽釜である。332 の口縁部外面には浅い凹線が廻る。鍔は短い。鍔柄分類 C 群 IV 類、15 世紀後半 ~ 16 世紀初頭の所産。333 の口縁部外面には浅い凹線が廻る。鍔は短い。鍔柄分類 B 群 III ~ IV 類、15 世紀代の所産。334 ~ 338 は備前焼擂鉢である。334 は片口部。擂目は 6 条以上を一単位とし、櫛描きで入れたもの。15 世紀後半頃の所産。335 ~ 338 は口縁部を上方に拡張するが、外面の凹線は未発達。いずれも口縁部外面下端に重ね焼きの痕跡がみられる。335 は放射状に幅 2.5cm、8 条一単位の櫛描きによる擂目が施される。15 世紀中頃 ~ 後半の所産。336 は放射状に 6 条 + α 一単位の櫛描きによる擂目が施される。15 世紀末 ~ 16 世紀前半の所産。337 は放射状に櫛描きによる擂目が施される。15 世紀末の所産。338 は放射状に 4 条 + α 一単位の櫛描きによる擂目が施される。16 世紀前半の所産。339 は東播系須恵器捏鉢。断面三角形状の口縁部を有する。12 世紀末 ~ 13 世紀初頭の所産であろうか。340 は龍泉窯系青磁碗。疊付は釉剥ぎされ、高台内は露胎である。内面見込みに印刻花文を施す。14 世紀初頭 ~ 後半の所産。

出土遺物の年代観から、15 世紀後半 ~ 16 世紀の所産と捉えられる。

落込み（図 49）

調査区北側を中心に平面不定形な形状を呈する落込みを 11 基検出した。落込みは底面や側壁が滑らかでなく、不規則に凹凸がみられる。埋土には黒褐色シルトが単層でみられるもの、上下 2 層に分かれ、上層に黒褐色シルトが、下層に褐灰色シルトが堆積するものがみられた。こうした落込みは近年、土坑状変形と称され、地震動に起因する変形構造と指摘される。今回検出したものも人為的な掘削とは考え難い形状を示していることから、土坑状変形である可能性を想定しておきたい。なお、断面図には表現されていないが、落込みの片側の側壁には多くの礫が集中する傾向が窺えた。これは地震による破壊・変形に伴い、基盤層の下位に広がる礫層が姿をみせたものと推察される。遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明である。

第 4 節 3 区の調査

3 区は調査地の南側に位置し、X = - 134,283 ~ - 134,310・Y = - 49,150 ~ - 49,174 の範囲内に位置する、南北約 25 m × 東西約 20 m の調査区である。

近代・近世の整地層や耕作土を掘削し検出した黒褐色～褐灰色シルト（第4層）上面を第1面として、黒褐色～褐灰色シルト（第4層）を掘削して検出した基盤層（地山）上面を第2面（最終面）として調査を行なった。

第1面は北側がやや高くなるもののほぼ平坦な地形で、標高はT.P. + 25.1 m前後である。第1面では土坑、耕作痕（鋤溝）、落込み（溜池状遺構）を検出した。第2面は北側から緩やかに南側に傾斜する地形となる。標高はT.P. + 25.1 ~ 25.0 mである。第2面では溝、流路、轍痕、落込みを検出した。

（1）第1面の遺構と遺物（図50～52・図版9）

耕作痕（鋤溝群）

ほぼ調査区全域に展開する。X = - 134,290以南には2区南端で検出した52溝に直交するN-15°

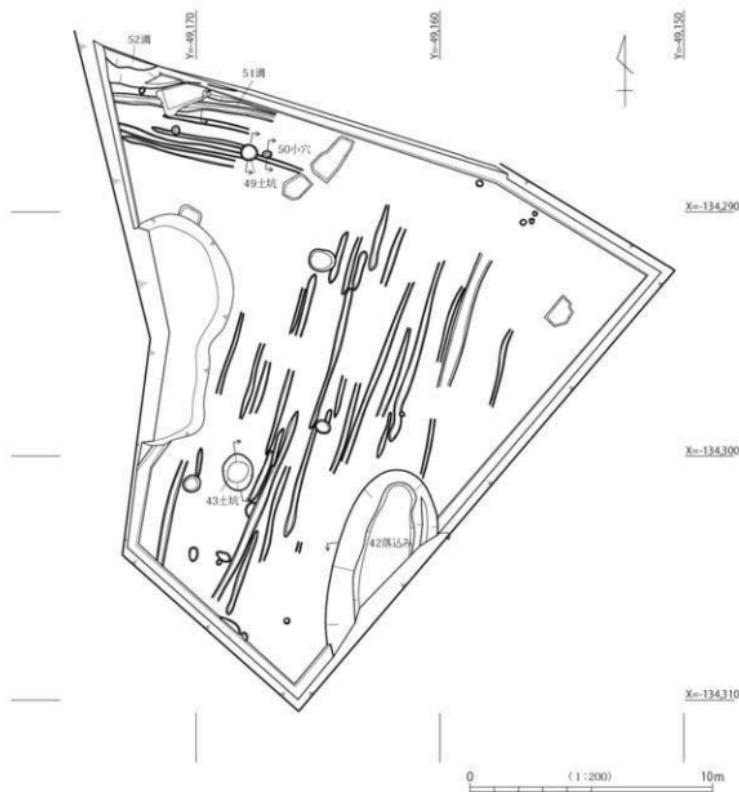


図50 3区 第1面 平面図

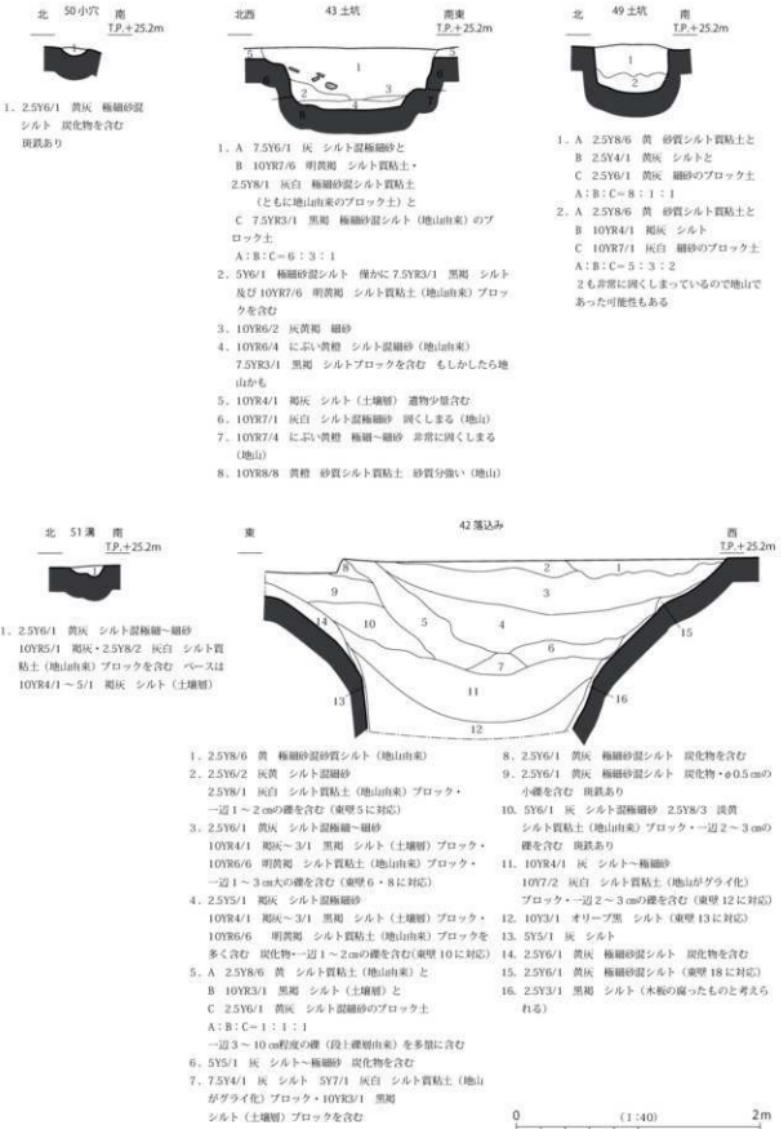


図 51 42 落込み他 断面図

—Eを指向する一群があり、以北には52溝に平行するようにN—77°—Wを指向する一群がみられる。鉢溝は概ね幅約0.2～0.3m、深さ0.03～0.05mである。一部、幅広のものがあるが、これは複数の鉢溝が重複して掘削された結果によるものである。

小穴（図51）

調査区北側で直径約0.2m前後の小穴を7基確認した。いずれも非常に浅いものである。小穴として調査を行なったが、先述した耕作痕（鉢溝）の残存物である可能性が高い。

51溝（図51）

調査区東北隅、X=—134,285ライン沿いに位置する溝である。溝西側は調査区外へと延びる。東側は2区へと延びるようであるが、確認するに至らなかった。51溝は52溝と平行するように掘削されており、52溝南肩から南へ約0.3mの位置にある。溝は幅約0.3～0.4m、深さ約0.1m、検出長約7mである。埋土は黄灰色シルト混極細～細砂で緩やかな水の流れがあったものと思われる。出土遺物には細片となった須恵器や土師器がみられた。下層の遺物が巻き上がったものであろう。

43土坑（図51・52）

調査区南西側、X=—134,300・Y=—49,169付近に位置する平面梢円形を呈する土坑。長径は約1.5m、深さ約0.5mを測る。断面形は逆台形を呈し、ブロック土で充填される。土坑の形状や埋土の状況から、2区で検出した117・121・122土坑等のように埋桶であった可能性を指摘しておきたい。

出土遺物には肥前系陶器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、肥前系染付、土師質土器、須恵器、瓦類等がある。図52—341は瀬戸・美濃系陶器馬の目皿である。外面は長石釉をかける。口縁端部に鉄釉を塗布し、口紅状に飾る。内面は鉄釉で馬の目を描く。18世紀後半～19世紀初頭の所産。342は肥前系染付筒形碗。口縁部内面を四方襷文で飾る。18世紀中頃～後半の所産。343は肥前系染付広東碗である。内面見込みに「製」の字がみられる。18世紀後半～19世紀初頭の所産。344は鉄鍋である。破断面がブロック状に崩壊していくことから鋳造品と推定される。

出土遺物の年代観から18世紀後半～19世紀初頭の所産と考えられる。

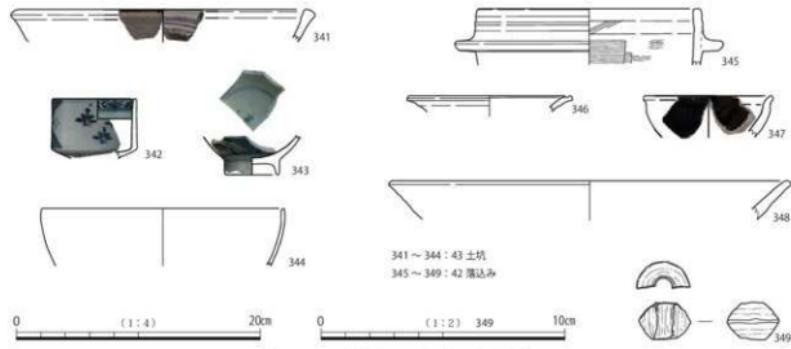


図52 42落込み・43土坑 出土遺物

42 落込み（溜池状遺構）（図 51・52・図版 9・14）

調査区南西隅、 $X = -134,300$ ・ $Y = -49,160$ 付近に位置する落込みである。落込み南側は調査区外へと広がる。落込みは $N - 5^{\circ} - E$ を軸にほぼ南北に延びる。

落込みは幅約4m、検出長約6mを測る。検出面から約1mで湧水が著しくみられる。また検出面から約2.8m掘削したが底は確認できなかった。断面形はV字状に近い形状をなしている。埋土は上部が礫を多く含む砂質シルトや極細～細砂で埋められ、下部はシルトが堆積していた。また、断面図にみられるようにT.P.+24.2m以下の側壁際には壁に沿って有機物が腐食したような黒褐色シルトがみられた。壁の崩落を防ぐために木板を入れていた可能性が想定できる。

出土遺物には肥前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前焼、焼締陶器、肥前系染付、中国製青皿、瓦質土器、土師質土器、備前焼転用円盤、須恵器等がある。

図52-345は土師質羽釜である。短い鍔が水平に伸びる。内面は11条/cmの横位のハケメを施す。鍔以下にはスヌクが付着。346は肥前系陶器溝縁皿。灰釉がかけられる。17世紀前半の所産であろう。347は瀬戸・美濃系陶器天目碗である。鉄釉がかけられる。16世紀代の所産であろうか。348は備前焼大平鉢。口縁端部に自然釉がかかる。349はツゲ材を用いた算盤玉である。直径0.6cmの芯棒を通す孔がみられる。

出土遺物の年代観から17～18世紀の所産と考えられる。

（2）第2面の遺構と遺物（図53～57・図版10・11）

小穴（図56）

直径0.2～0.5mの平面円形や楕円形を呈する小穴を散在的に5基検出した。小穴からは出土遺物がほとんど確認できず、また基盤層（地山）上面で検出したこともあり、個別の掘削開始面を明らかにすることはできなかった。

小穴の埋土は褐灰色シルトを基調とし、地山由来の黄色系シルトや砂質シルトブロックを含んでいる。礎石や根石を持つ例や柱痕跡を有する例がみられなかったため、当面検出の小穴に関しては性格が明らかではない。図56-350は70小穴出土の瓦器碗である。器壁は薄く、扁平な器形である。楠葉型IV-1期、13世紀中頃の資料であろう。

67 土坑（図54）

調査区北側中央、 $X = -134,289$ ・ $Y = -49,162$ 付近に位置する平面不整円形を呈する土坑である。長軸約0.7m、短軸約0.5mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色シルトと灰オリーブ色シルトのブロック土である。土坑底面付近から細片となった土師質土器片がみられたが時期は不詳である。

55 溝・57 落込み（図54・図版11）

55溝は調査区南西端に位置し、 $N - 52^{\circ} - W$ を軸に北西から南東にはしる溝である。溝は幅約0.45m、深さ約0.1m、検出長約9mを測る。溝両端は調査区外へと延びる。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色シルトと黄色系シルトのブロック土である。出土遺物が少なく時期を決し難いが、黒色土器（両黒）片が僅かにみられることから、古代末頃の所産としておきたい。

57 落込みは 55 溝に切られる平面不定形な落込みである。底面や側壁が滑らかでなく、不規則に凹凸がみられる。埋土は大きく上下 2 層に分かれ、上層に黒褐色粘質シルトが、下層に褐灰色粘質シルトが堆積する。同種の落込みは調査区南西隅に複数みられる。これらの落込みは人為的な掘削とは考え難い形状を示していることから、地震動に起因する土坑状変形である可能性を想定しておきたい。

58 落込み（図 56）

調査区北東側、 $X = -134,295 \sim Y = -49,160$ を中心に広がる落込みである。落込みの平面形は不定形で、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黒褐～褐灰色シルトである。人為的な遺構ではなく、自然のたわみと考えられる。出土遺物には須恵器や土師器の細片がある。図 56-351 は須恵器杯 B もしくは椀である。

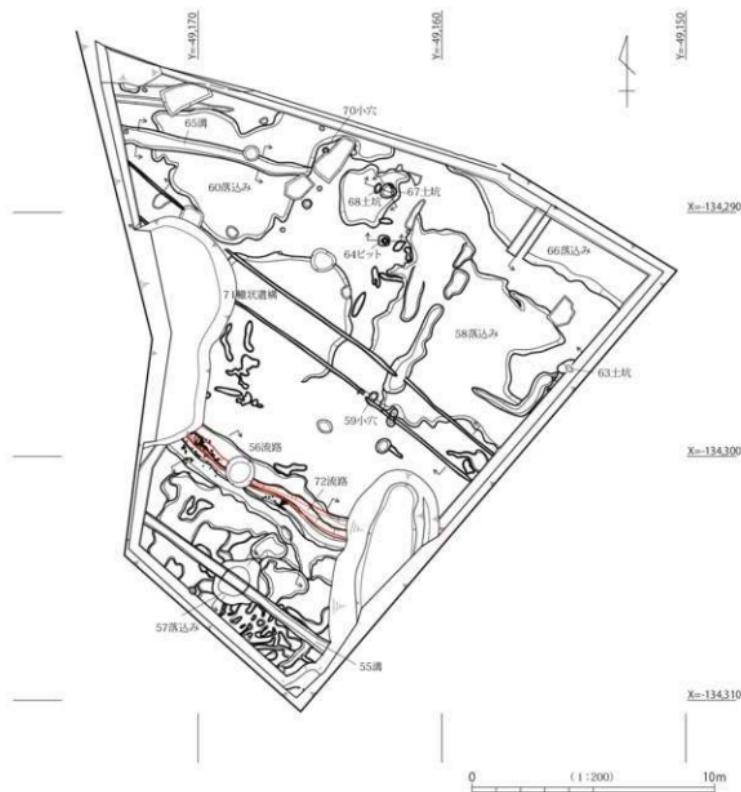


図 53 3 区 第 2 面 平面図

60 落込み（図 56）

調査区北西隅、X = -134,288・Y = -49,169を中心広がる落込みである。落込みの平面形は不定形で、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黒褐～褐灰色シルトである。人為的な構造ではなく、自然のたわみと考えられる。出土遺物には須恵器や土師器の細片がある。図 56-352・353は須恵器蓋である。352は宝珠状の摘みが付く。天井部外面はカキメを施す。胎土には黒色粒が多く含まれる。7世紀前半の所産か。353は7世紀後半か。

56・72 流路（図 55・56・図版 10・11・12）

55溝の北東側約2.5mの位置に、N-52°Wを指向し、北西から南東に蛇行しながら流れる自然

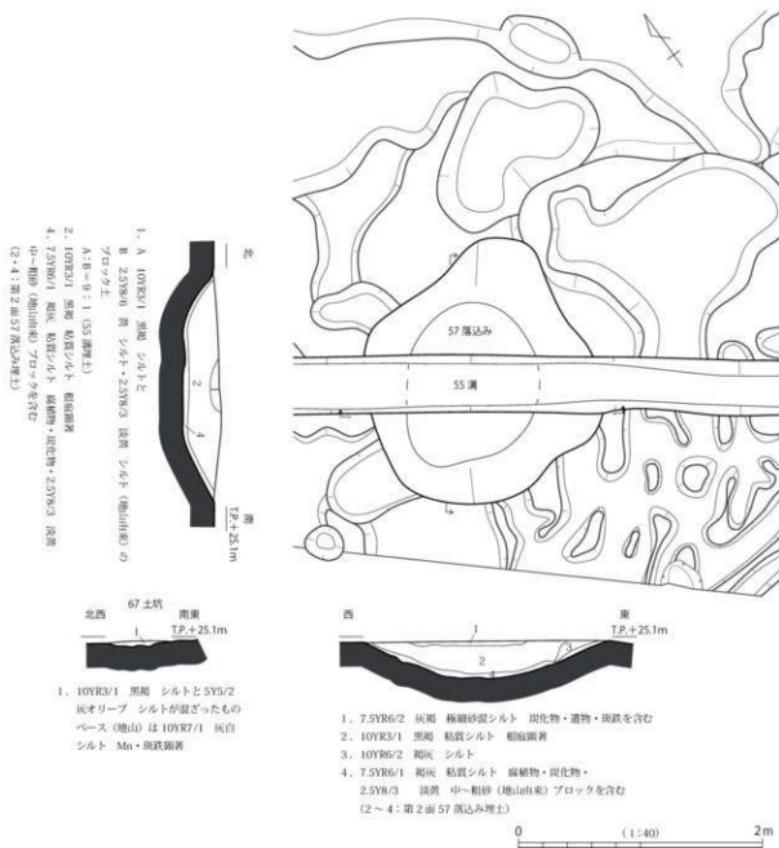


図 54 55 溝・57 落込み 平・断面図・67 土坑 断面図

流路（56 流路）である。56 流路の北端は擾乱に、中央部は第1面 43 土坑に、南端は第1面 42 落込みに切られる。流路は幅 1.7 ~ 2.2 m、深さ 0.25 ~ 0.3 m を測る。検出長は約 8 m である。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は大きく 3 層に分かれる。埋土上層は黒色系シルトが、中層に褐灰色砂混シルトが、下層に黄灰色系シルト～中砂が堆積している。流路の北西側を中心に須恵器片（环身・环蓋・甕等）が、中央付近で弥生中期土器片がまとめて出土した。これの遺物は下層堆積物である黄灰色系シルト

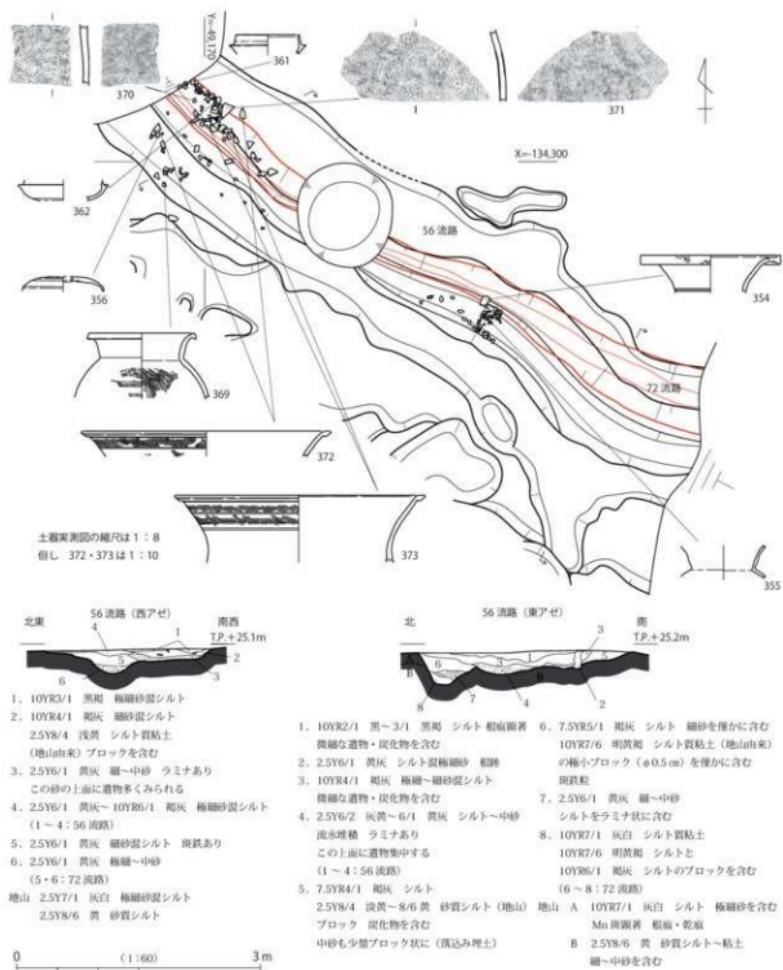


図 55 56・72 流路 平・断面図

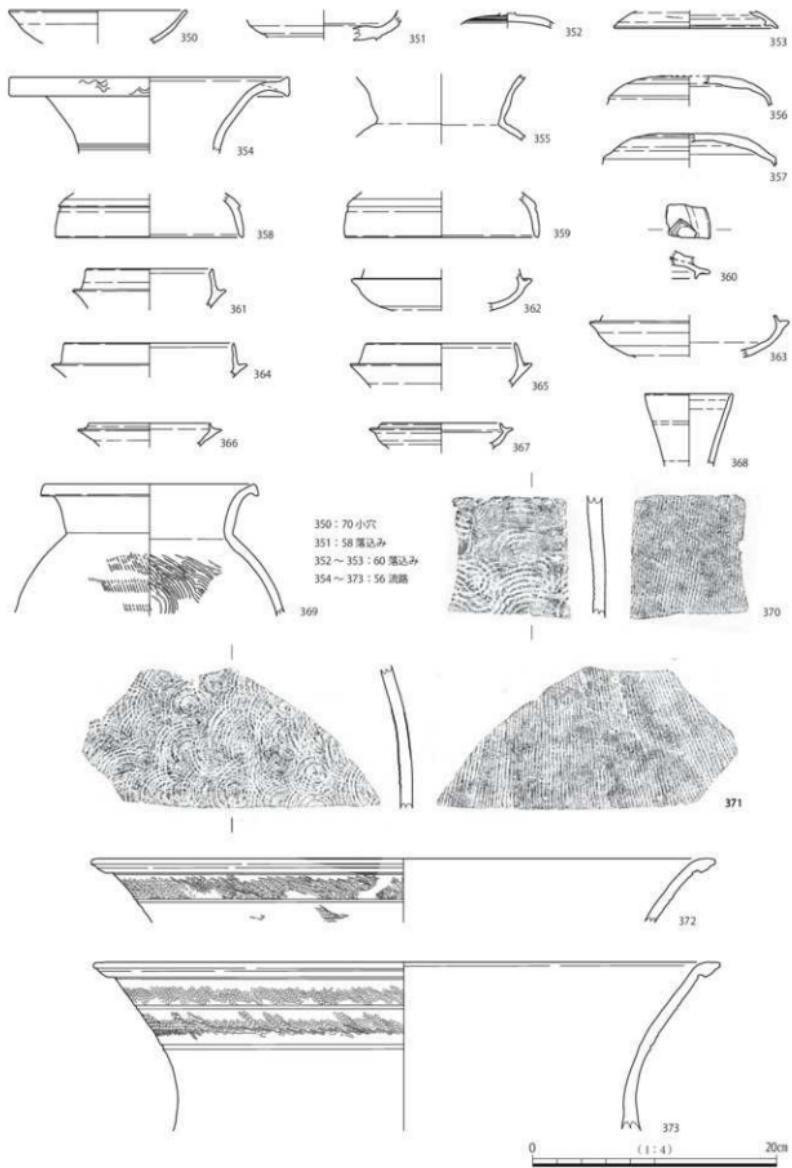


図 56 遺構 出土遺物

～中砂の上面に多くみられた。出土した須恵器の中には焼成不良や焼け歪みを有するものがあった。

また、56流路の下位にはこれに先行する72流路が存在する。72流路は幅0.3～0.75m、深さ0.3～0.4mを測る。検出長は約8mである。72流路の断面形は逆台形を呈する。埋土は流路北側で2層に、南側で3層に分かれる。埋土上層は褐色シルトが、中層に黄灰色細～中砂が、下層に灰白色シルト質粘土が堆積している。出土遺物がみられず時期は不詳である。但し、56流路から出土した弥生中期土器が本来は72流路に伴っていた可能性が想定できる。

図56～354は弥生土器広口壺。胎土には長石、石英、チャート、赤色くさり礫を含む。口縁部外面に3条以上の櫛描き波状文が施文され、頸部外面に櫛描きによる沈線が3条以上廻る。全体的に摩滅が著しく調整及び施文が不明瞭である。摂津IV式であろう。355は土師器直口壺か。器壁は非常に薄い。摩滅が著しく詳細は不詳である。

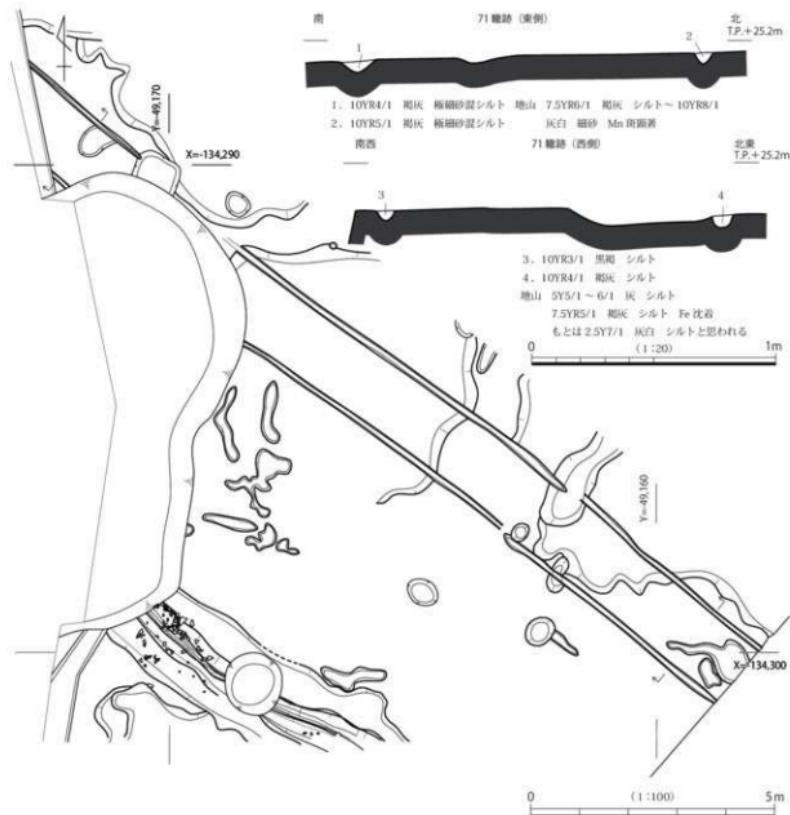


図57 71 線状遺構 平・断面図

356～373は須恵器である。356～360は壺蓋。356～359は胎土に黒色粒を多く含む。360は外面に須恵器片が溶着している。356～359は6世紀代、360は7世紀後半の所産。361～367は壺身。361・362・364・365・367は胎土に黒色粒を多く含む。361は焼け歪みが著しい。362・365は受け部に重ね焼き痕がみられる。361は5世紀末～6世紀初頭、362～365は6世紀代、366・367は7世紀前半の所産であろう。368は平瓶の口縁部か。胎土に黒色粒を多く含む。369～373は甕である。いずれも胎土に黒色粒を含む。369～371は外面には平行タタキが、内面には同心円文の當て具痕がみられる。369は6世紀後半の所産であろう。370は内面の同心円文の當て具痕を板ナデによりナデ消す。371の内面には大振りな同心円文の當て具痕がみられる。372・373は頸部に櫛描き波状文とヘラ描き沈線が廻る。両者は接合しなかったが、同一個体である可能性が高い。5世紀中頃～後半の所産であろう。

出土遺物には年代幅がみられることから、その場で廃棄されたのではなく、上流側から流されてきたものと推察される。

71 輪状遺構（図57・図版11）

調査区中央部、56流路の北東側約5mに位置する。輪状遺構は一部擾乱に切られるが、N-50°Wを軸に北西-南東方向に直線的に伸び、両端は調査区外へと延びる。検出長は約19mである。輪状遺構の幅は10cm前後で、平行した一対の輪状遺構間の芯々距離は約1.4mである。遺構内には褐灰色シルト（第4層）が堆積していることから、第4層形成途上のある段階に残された痕跡と考えられ、古代～中世段階のものと推察される。

55溝や56流路、71輪状遺構の指向する方位がほぼ共通していることから、古墳時代から古代においては地形的制約等の強い規制が働き、南東-北西を意識した土地利用がなされた可能性が窺える。

第4章 総括

本町遺跡ではこれまで40次に及ぶ調査が積み重ねられてきた。調査は遺跡全域で実施されており、今回の調査地周辺でも多くの調査事例がみられる。今回の調査は遺跡南東部の様相を知る上で貴重な成果を提供するものとなった。最後に総括として、周辺の調査成果も概観しながら成果をまとめておきたい。

今回の調査では旧石器から近世に至る遺構・遺物を確認することができた。その中でも主体であったのは近世期の資料である。以下では、近世期とそれ以前という項目で記述する。

調査地は西側の沖積平野に向かって張り出し、緩く傾斜する低位段丘の平坦面上に位置する。調査地の中央～北側部分は、近世期の居住域造成に伴う大規模な土地改変が基盤層（地山）上面まで及んでおり、近世期以前の遺物包含層は残存していなかった。この影響は非常に大きく、調査地南側以外では中世期以前の様相はほとんど明らかにできなかった。

【近世期】

阪急電鉄宝塚線豊中駅周辺は、近世には新免村と称されている。今次調査では、その新免村の一様相を垣間みることができた。

近世期には2区南辺で検出した52溝を境に北側では居住域、南側には耕作地が展開することを明らかにした。これまででは水利に関わるような溝や耕作に伴う溝等が各調査地点で検出されていたが、居住域との関係性を捉えることができたのは大きな成果と言える。

居住域部分では礎石や小穴等の建物に関連する遺構を検出しており、複数棟の建物が存在したと推定されるが、復元するには至らなかった。近世期の遺構からは多くの瓦類が出土していることから、建物の多くは瓦葺であったといえる。

また、調査地北側には1区を中心に多くの埋桶が配置されていた。埋桶はその性格が問題ではあるが、残存する桶内面には糞尿の痕跡が観察できなかったことから、水溜状施設であった蓋然性が高い。また、1区においては断面観察ではあるがカマド状の焼土面が認められた。水溜やカマドであるとの判断が妥当であるならば、調査地北側の1区は建物内部でも台所状施設に相当するものと考えられよう。

居住域と生産（耕作）域を区画する52溝は幅2.5～3mを測る大型の溝である。52溝の東方への延長上約70mの位置には溜池を埋めて建てられた豊中市立大池小学校が存在する。単純に考えれば、52溝がこの溜池を始発とする可能性が浮かび上がる。52溝の性格が単に区画のみを意図したものか、或いは耕作に関わる水利目的を兼ね備えたものなのかは今後の検討課題である。東方に位置する溜池との関連性を含め、調査地東側での調査を注視したい。

居住域の造成時期や耕作開始期は明らかではないが、16世紀末～17世紀初頭に掘削された井戸や土坑がみられることから、近世初期から居住域が存在していたものと想定される。なお、15世紀後半～16世紀代の土坑や溝が1・2区で確認できることから、調査地は中世後半段階には既に開発が及んでおり、居住域の前身となる空間が形成されていたものと推察される。

調査地西側には、調査地をかすめるように能勢街道が南東～北西にはしることが指摘されている。今回の調査ではその痕跡を捉えることができなかったが、居住域・生産域・街道の関係を考える上で重要な位置を占めることは言を待たない。今後の周辺での調査が大いに期待される。

【近世期以前】

近世期以前の遺構には、2区で検出した15世紀後半～16世紀の116・129・173土坑や120溝がある。残存した遺構数が限られているため、それぞれの性格や関係性を明らかにはできなかった。しかし、先述した近世期の居住域の前身として注目すべき資料といえよう。中世段階の新免村に関しては、永禄元

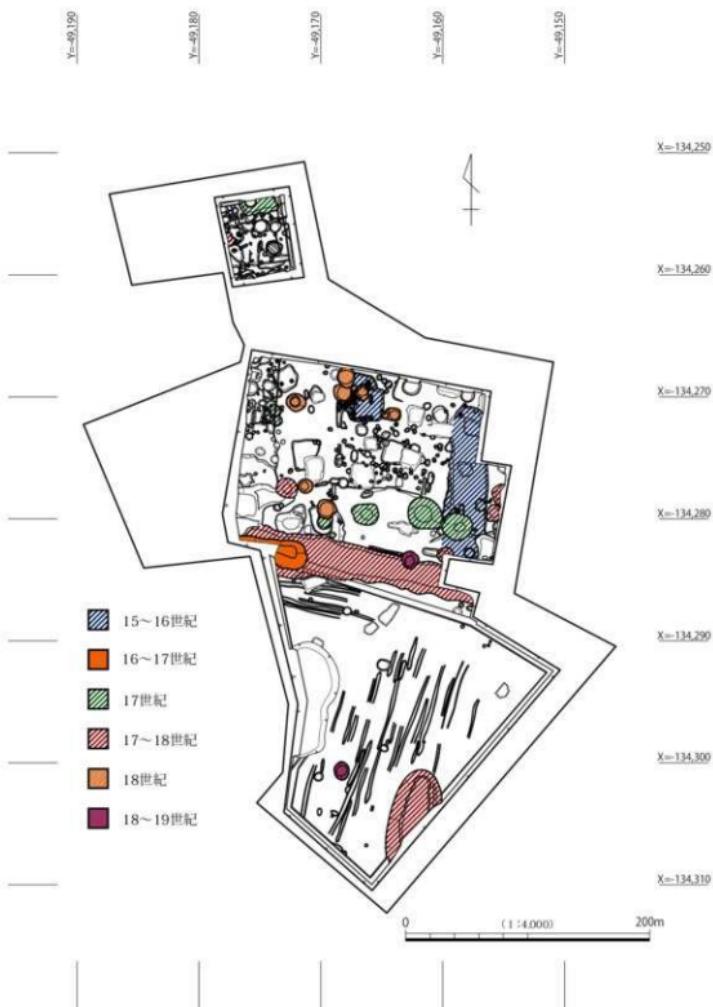


図58 第1面 全体平面図

年（1429）8月の「春日社領桜井本郷新田畠帳」に新免村が散見することが知られている。15世紀前半には既に中世新免村が成立している可能性が高いことから、これらの遺構が中世新免村の一角をなしていたものであることは疑いないであろう。当該期の資料増加が待たれるところである。

中世前半代に関しては、近世期の大幅な造成による削平が顕著であったこともあり、遺構・遺物とも

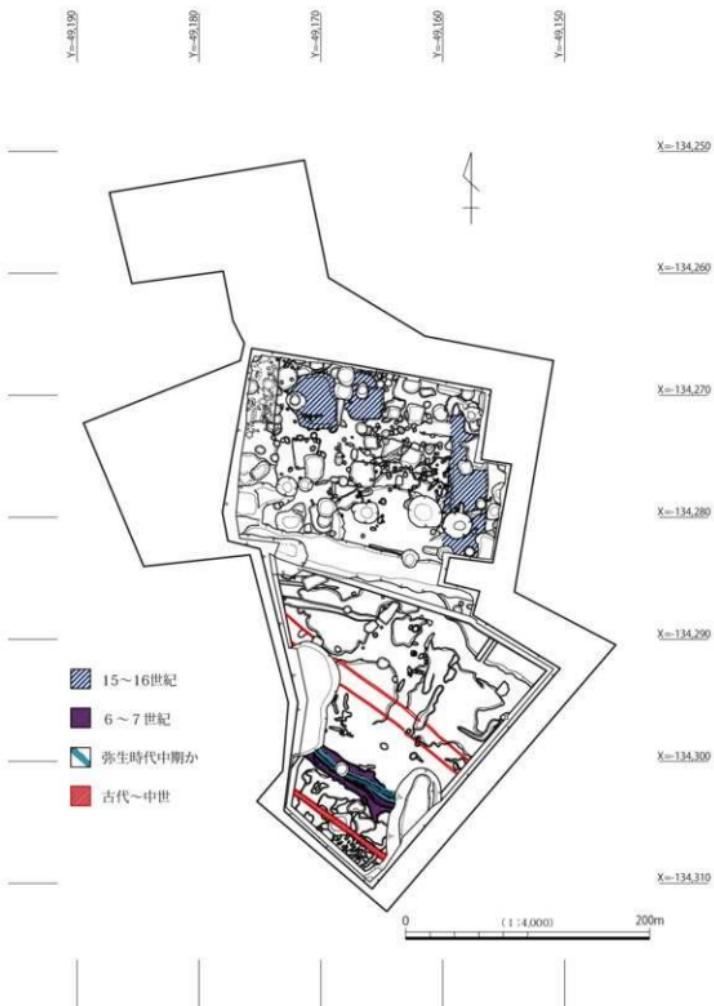


図 59 第2面 全体平面図

にほとんど確認できておらず、不明と言わざるを得ない。

古代以前に関しても、1・2区では近世期の大幅な造成による削平が顕著であったこともあり、明確にはできなかった。古墳時代～古代の遺構が確認できた3区においては、遺構数や出土遺物量共に少なかった。調査地が本町遺跡の南東部分に位置することから、古墳時代～古代集落の縁辺部であった可能性が高く、従前の調査で確認している古墳時代後期・古代の集落としての本町遺跡の様相を窺うことができなかった。しかし、56流路や3区でみられた黒褐色シルト（第4層）からは焼け歪んだ須恵器や焼成不良の須恵器が出土しており、以前から指摘されている桜井谷窯跡群で焼かれた須恵器の集積・選別・配送等を担った物流センター的な性格を持つ集落としての姿を垣間みることができた。

遺跡北東側には古代寺院である金寺山廃寺が建立されている。従前の調査（第18次等）において金寺山廃寺と関係が深い瓦類の出土があったが、今次調査においても近世期の遺構（1区4水溜・2区52溝）から類似の瓦の出土がみられた。金寺山廃寺関連の瓦は、本町遺跡のみならず新免遺跡や穂積遺跡、豊島北遺跡等で出土することが知られ、寺院衰退後に再利用可能な瓦が持ち出された可能性が高いと指摘されている（橋田1995）。一方で、金寺山廃寺は「金寺千坊、金寺千軒」と称されるほどに繁栄していたとされることから、近傍に寺院に関わる施設が存在していた可能性も想定しておくべきであろう。今後の周辺での調査に期待される部分である。

また、円筒埴輪や朝顔形埴輪が近世期の遺構（121・122土坑・52溝等）から出土している。類する埴輪は調査地の南東約150mに位置する新免古墳群第3号墳（6世紀前半代）から出土している。古墳は近世以前に削平されて耕作地へと転換した（浅岡1993）とされており、その際に散逸したもののが混入したのであろうか。注目すべき資料である。

3区第2面では、近接した場所に位置し、同じ様な方位（N-50°～52°-W）を指向する55溝・56流路、71輥状遺構を検出した。古墳時代から古代においては地形的制約等の強い規制が働き、南東一北西を意識した土地利用がなされた可能性が窺える。なお、これらの遺構は所産時期が異なるものの、この位置や方位は、後に本遺跡直近を通る近世期の能勢街道に類するものである。古くから街道の前身となるような性格を帯びた場所であった可能性が高い。

今調査で検出した71輥状遺構に類するものとして、先述の新免第3号墳の周濠底で検出された芯々距離が約1.5mのレール状遺構と称されるものがある。遺構の時期は明確ではないが、須恵器や埴輪を踏み潰すことから、古墳築造後の所産とされる。71輥状遺構と直接結びつけることは困難であるが、さほど離れていない調査地点で検出されていることから、今後周辺の調査においては注意すべき種類の遺構といえる。

本町遺跡の初現とも言える弥生時代中期については、僅かに摩滅したIV様式の広口壺片が出土したにとどまり、明確な人為的な遺構は検出されなかった。既に指摘されているように、散在的な存在であることを追認した。

新たな知見として、近世期の遺構（2区116・169土坑）埋土から縄文時代草創期の有舌尖頭器や旧石器時代の所産と考えられるサヌカイト製横長有底剝片の出土をみた。市域では有舌尖頭器は野畠春日町遺跡に次いで2例目、旧石器資料出土遺跡としては8遺跡目となる。

旧石器時代の遺物は、阪急宝塚線蛻池駅周辺に展開する遺跡群（蛻池北・蛻池西・蛻池遺跡等）での出土例が多い。一方、蛻池周辺遺跡群から千里川を挟んで南側に広がる豊中台地上では、大塚古墳出土の国府型ナイフ形石器が知られるのみであった。これまで市域の旧石器時代遺跡の探求は蛻池周辺遺跡

群に注目が集まったが、今後は豊中台地上の遺跡にも目を配る必要があろう。

縄文時代の資料は、調査地西側に位置する新免遺跡で晚期後半や早期中葉の資料が確認されているが、本町遺跡ではこれまで確認されていなかった。今後は、地山と認識している低位段丘構成層である黄色系シルトやシルト質粘土に関しては、旧石器・縄文時代遺物が存在している可能性があるものとして、調査時に注意が必要となろう。

また、調査地には土坑状変形と考えられる落込みが複数みられた。このような形状の落込みは、近年各地で検出され、地震動に起因する変形構造であると指摘される。今調査では、遺物が出土しておらず時期が不詳であるが、古代末頃（55 溝）の遺構との切り合い関係が認められることから、平安時代以前の大規模な地震によるものと想定しておきたい。

以上、局所的な状況ではあるが、遺跡南東部分の様相を明らかにすることができた。今回の調査では、従来の本町遺跡のイメージとは異なる中～近世新免村の基礎資料と旧石器・縄文時代資料を新たに追加した。今後の調査の進展とこれまで蓄積された資料の精査によって、古墳時代～古代の本町遺跡だけではなく、中世以降に展開する新免村に関してはより鮮やかに歴史像を復元することができよう。今後に期待するところである。

参考文献

- 浅岡俊夫 1993 『豊中市 新免古墳群第3号墳－新免遺跡第38次調査－』 六甲山麓遺跡調査会
- 井上智博 2008 「土坑状変形」『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第173集 讀良郡条里遺跡VI—一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』 財団法人大阪府文化財センター
- 橋田正徳編 1995 「第Ⅱ章 本町遺跡第18次調査の概要」『豊中市文化財調査報告第34集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成6年度(1994年度)』 豊中市教育委員会
- 橋田正徳編 1998 『蛽池西遺跡－阪神高速道路大阪池田線池田延伸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』 蛽池西遺跡調査団
- 豊中市史編さん委員会 2005 『新修 豊中市史』第4巻 考古
- 豊中市史編さん委員会 2009 『新修 豊中市史』第1巻 通史1
- 松田順一郎・井上智博 2005 「風倒木とは似て非なる古地震痕跡－大阪府讀良郡条里遺跡の事例」日本文化財科学会第22回大会 ポスターセッション資料
- 光石鳴巳 2003 「第3節 大阪府北摂地域出土の有茎尖頭器について」『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第84集 粟生間谷遺跡－旧石器・縄文時代編一』 財団法人大阪府文化財センター
- 柳本照男ほか編 2004 『豊中市文化財調査報告第54集 金寺山廐寺－第1・2・3次発掘調査報告書一』 豊中市教育委員会

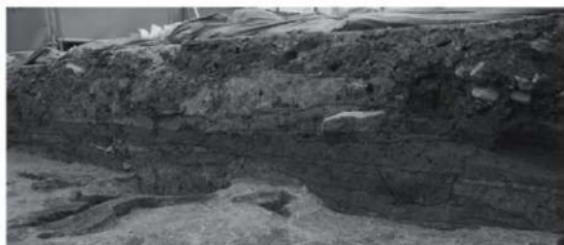
写 真 図 版

図版1 1948年米軍撮影航空写真



国土地理院 1948年米軍撮影航空写真 (1948年3月19日撮影に加筆)

図版2 1～3区



1. 1区西壁 断面
(北東から)



2. 1区南壁 断面
(北から)



3. 2区東壁 断面
(西から)



4. 3区北・東壁 断面
(北西から)



5. 3区東壁 断面
(北から)

図版3 1区



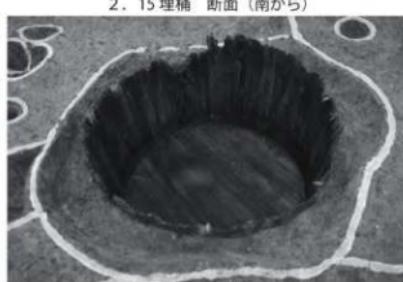
1. 第1面 全景（北から）



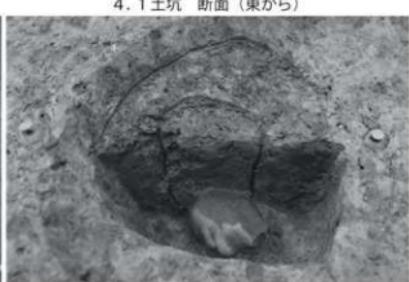
2. 15埋桶 断面（南から）



4. 1土坑 断面（東から）



3. 15埋桶 完掘状況（南から）



5. 30小穴 断面（南から）

図版4 2区



1. 第1面 全景（南から）



2. 132 土坑 断面（南から）



4. 82 小穴 断面（東から）

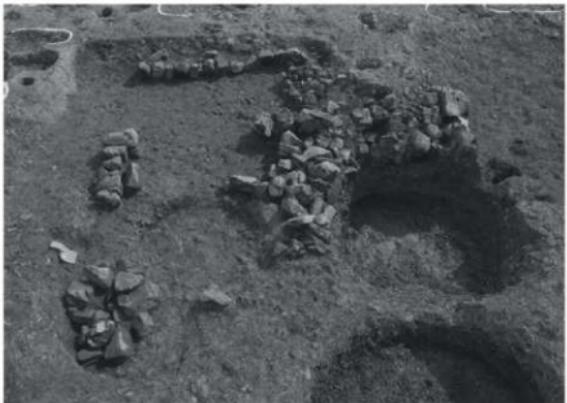


3. 132 土坑 完掘状況（南から）



5. 146 小穴 断面（南から）

図版5 2区



1. 116・129 土坑
完掘状況
(北から)



2. 116 土坑
南辺石列
(東から)



3. 116 土坑 断面
(南から)

図版6 2区



1. 74井戸 断面（南から）



5. 150井戸 検出状況（南から）



2. 153井戸 断面（南から）



6. 150井戸 断面（南から）



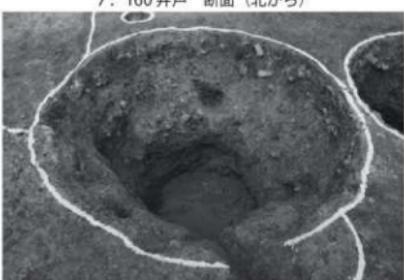
3. 154井戸 断面（南から）



7. 160井戸 断面（北から）



4. 156井戸 断面（西から）



8. 160井戸 完掘状況（南から）

図版7 2区



1. 52溝 完掘状況 (西から)



2. 52溝・167井戸 断面 (西から)



4. 120溝 完掘状況 (南から)



3. 157土坑 完掘状況 (東から)



5. 120溝 断面 (北西から)

図版8 2区



1. 第2面 全景
(西から)

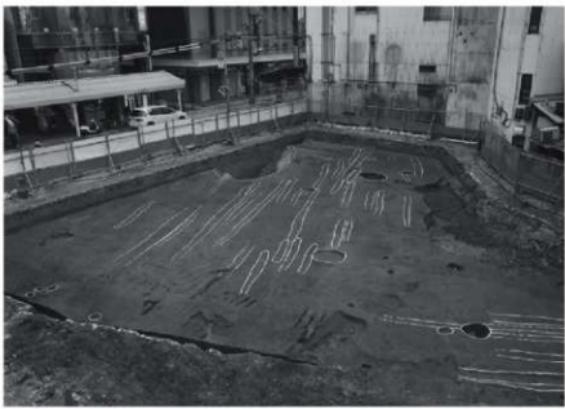


2. 173 土坑 完掘状況
(西から)



3. 173 土坑 断面
(南から)

図版9 3区



1. 第1面 全景
(北から)



2. 42落込み 完掘状況
(南から)



3. 42落込み 断面
(北から)

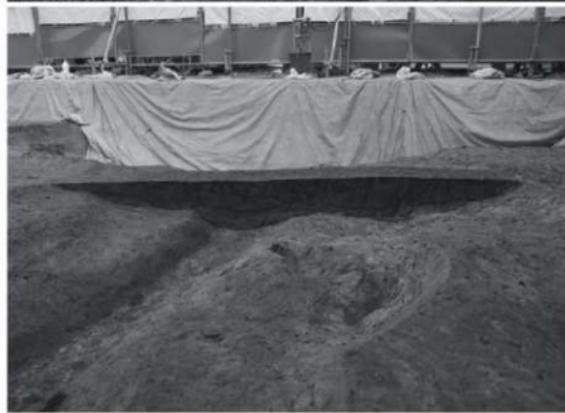
図版 10 3区



1. 第2面 全景
(北から)



2. 56 流路 完掘状況
(北西から)



3. 56 流路 断面
(北西から)

図版 11 3区



1. 55 溝・56 流路
完掘状況
(南東から)



2. 72 流路 断面
(北西から)



3. 71 轢状遺構 掘出状況
(南東から)

図版 12 3区 56 流路出土遺物



354



369



373



358



359



364



361



367

図版 13 1・2区 出土遺物



271



15



321



8



278



277

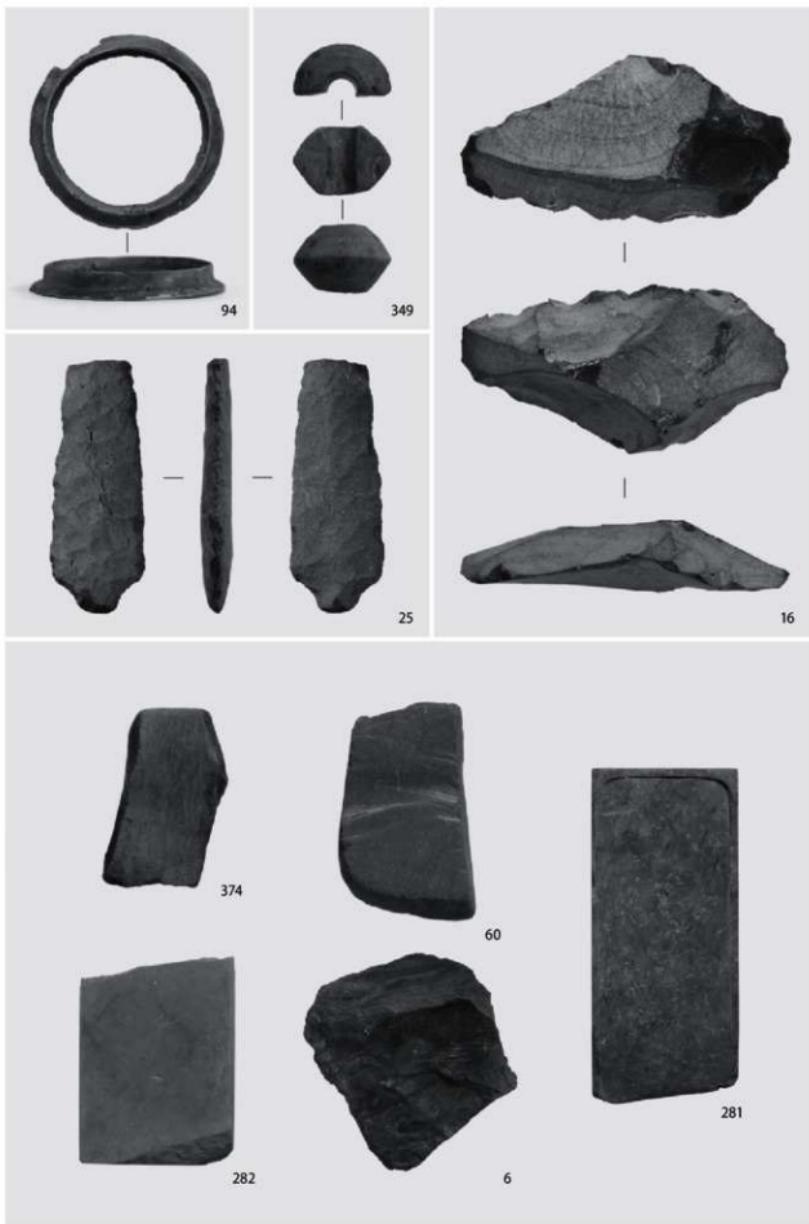


280



279

図版 14 1～3区 出土遺物



報 告 書 抄 錄

公益財團法人 大阪府文化財センター調査報告書 第244集

本町遺跡

豊中市本町1丁目マンション建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 2014年2月28日

編集・発行 公益財團法人 大阪府文化財センター
〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所
〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号